芹生谷遺跡Ⅲ

大阪府埋蔵文化財調査報告二〇一三―一

大阪府教育委員会

大阪府埋蔵文化財調査報告2013－1

芹 生 谷 遺 跡 Ⅲ

大阪府教育委員会

芹生谷遺跡Ⅲ

大阪府教育委員会

序　　文

史跡整備された金山古墳のうえに立って、北に芹生谷遺跡をのぞむと、広々した河南台地の田園風景を見ることができます。さらに北を展望すると、遠くに古市古墳群の陵墓群や二上山・生駒山の連なりがあります。そして、西にはおだやかに北流する石川の水面が見え隠れし、万葉の時代から続く風景を想像させます。

近年まで、ほとんど大規模な開発がなかった河南台地にも、一般国道309号が東西に貫通し、さらに今回調査地をバイパス道路が南北に建設されることとなりました。芹生谷遺跡はこの道路計画によって、新規発見された集落遺跡です。これまで、周辺の遺跡の実態はほとんど解明されておらず、台地の開発を知る重要な手がかりが得られると期待されました。

今回の調査では、金山古墳とほぼ同時期頃に営まれた竪穴住居・掘立柱建物などが発見され、古墳造営に関与した集団の一端が解明されようとしています。集落を形成した人々が古墳造営のためだけに周辺に居住したのか、台地を開発して生産域を拡大、大型古墳を造営させるまで成長したのかは、さらなる調査の進展によって結論付けることができるかもしれません。

本調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、大阪府都市整備部をはじめとする関係各位に、多大なご協力を賜りました。深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年12月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　荒井　大作

例　　言

１．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した一般国道309号河南赤阪バイパス道路整備工事に伴う、河南町芹生谷所在、芹生谷遺跡の発掘調査報告書である。

２．本調査の調査番号は、12007である。

３．現地調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査西川寿勝を担当者とし、平成24年９月３日から平成24年12月16日まで実施し、引き続き遺物整理作業を調査管理グループ主査三宅正浩、副主査藤田道子を担当者とし、実施した。

４．現地調査にあたり、河南町教育委員会赤井毅彦氏・向井妙氏、千早赤阪村教育委員会和泉大樹氏(当時)、河内長野市立ふるさと歴史学習館長谷口夫抄子氏、大阪大谷大学名誉教授中村浩氏のご協力を得た。

５．出土遺物・記録資料などは、本府教育委員会において保存・管理している。

６．検出遺構の写真撮影および、本書の執筆・編集は、西川寿勝が担当した。

７．本調査の基準点測量・写真測量は、大阪測量株式会社に委託して実施した。撮影フィルムは同社で保管している。

８．出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

９．発掘調査・遺物整理および、本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

10．本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、494円である。

本　文　目　次

序文
例言
本文目次　挿図目次　図版目次

第Ⅰ章　位置と環境……1

１節　歴史的環境
２節　調査経緯
３節　調査方法
４節　層序

第Ⅱ章　調査成果……11

１節　１区の調査
２節　２区の調査
３節　出土遺物

第Ⅲ章　まとめ……25

図版
報告書抄録

挿　図　目　次

図１　周辺遺跡分布図……2
図２　調査区位置図……6
図３　調査区地区割図……7
図４　調査区全体図……9～10
図５　１区全体図……12
図６　１区掘立柱建物……13
図７　２区全体図……15
図８　２区竪穴住居……16

図９　２区竪穴住居２－２・２－３……17
図10　２区竪穴住居２－１・２－４……18
図11　２区掘立柱建物……19
図12　打製石器……20
図13　古墳時代後期の土器……22
図14　古代・中世の土器……23
図15　実測遺物対照表……23
図16　古墳と竪穴住居……28

図　版　目　次

巻頭図版　金山古墳と調査区周辺
図版１　全景
図版２　１区全景
図版３　２区全景
図版４　１区掘立柱建物１－１
図版５　１区掘立柱建物１－２
図版６　１区掘立柱建物１－１・１－２柱穴
図版７　１区掘立柱建物１－２柱穴
図版８　２区掘立柱建物
図版９　２区掘立柱建物２－１柱穴
図版10　２区掘立柱建物２－２・２－３柱穴
図版11　２区竪穴住居検出状況
図版12　２区竪穴住居２－１・２－４
図版13　２区竪穴住居２－１・２－４柱穴など
図版14　２区竪穴住居２－２・２－３
図版15　２区竪穴住居２－２・２－３柱穴など
図版16　出土遺物１
図版17　出土遺物２
図版18　出土遺物３

大阪府埋蔵文化財調査報告2013－１

芹 生 谷 遺 跡 Ⅲ

大 阪 府 教 育 委 員 会

芹生谷遺跡Ⅲ

大阪府教育委員会

序　　文

史跡整備された金山古墳のうえに立って、北に芹生谷遺跡をのぞむと、広々した河南台地の田園風景を見ることができます。さらに北を展望すると、遠くに古市古墳群の陵墓群や二上山・生駒山の連なりがあります。そして、西にはおだやかに北流する石川の水面が見え隠れし、万葉の時代から続く風景を想像させます。

近年まで、ほとんど大規模な開発がなかった河南台地にも、一般国道309号が東西に貫通し、さらに今回調査地をバイパス道路が南北に建設されることとなりました。芹生谷遺跡はこの道路計画によって、新規発見された集落遺跡です。これまで、周辺の遺跡の実態はほとんど解明されておらず、台地の開発を知る重要な手がかりが得られると期待されました。

今回の調査では、金山古墳とほぼ同時期頃に営まれた竪穴住居・掘立柱建物などが発見され、古墳造営に関与した集団の一端が解明されようとしています。集落を形成した人々が古墳造営のためだけに周辺に居住したのか、台地を開発して生産域を拡大、大型古墳を造営させるまで成長したのかは、さらなる調査の進展によって結論付けることができるかもしれません。

本調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、大阪府都市整備部をはじめとする関係各位に、多大なご協力を賜りました。深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政に一層のご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年12月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　荒井　大作

例　　言

１．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した一般国道309号河南赤阪バイパス道路整備工事に伴う、河南町芹生谷所在、芹生谷遺跡の発掘調査報告書である。

２．本調査の調査番号は、12007である。

３．現地調査は、文化財保護課調査第二グループ副主査西川寿勝を担当者とし、平成24年９月３日から平成24年12月16日まで実施し、引き続き遺物整理作業を調査管理グループ主査三宅正浩、副主査藤田道子を担当者とし、実施した。

４．現地調査にあたり、河南町教育委員会赤井毅彦氏・向井妙氏、千早赤阪村教育委員会和泉大樹氏(当時)、河内長野市立ふるさと歴史学習館長谷口夫抄子氏、大阪大谷大学名誉教授中村浩氏のご協力を得た。

５．出土遺物・記録資料などは、本府教育委員会において保存・管理している。

６．検出遺構の写真撮影および、本書の執筆・編集は、西川寿勝が担当した。

７．本調査の基準点測量・写真測量は、大阪測量株式会社に委託して実施した。撮影フィルムは同社で保管している。

８．出土遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

９．発掘調査・遺物整理および、本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

10．本書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、494円である。

本　文　目　次

序文
例言
本文目次　挿図目次　図版目次

第Ⅰ章　位置と環境……1

１節　歴史的環境
２節　調査経緯
３節　調査方法
４節　層序

第Ⅱ章　調査成果……11

１節　１区の調査
２節　２区の調査
３節　出土遺物

第Ⅲ章　まとめ……25

図版
報告書抄録

挿　図　目　次

図１　周辺遺跡分布図……2
図２　調査区位置図……6
図３　調査区地区割図……7
図４　調査区全体図……9～10
図５　１区全体図……12
図６　１区掘立柱建物……13
図７　２区全体図……15
図８　２区竪穴住居……16

図９　２区竪穴住居２－２・２－３……17
図10　２区竪穴住居２－１・２－４……18
図11　２区掘立柱建物……19
図12　打製石器……20
図13　古墳時代後期の土器……22
図14　古代・中世の土器……23
図15　実測遺物対照表……23
図16　古墳と竪穴住居……28

図　版　目　次

巻頭図版　金山古墳と調査区周辺
図版１　全景
図版２　１区全景
図版３　２区全景
図版４　１区掘立柱建物１－１
図版５　１区掘立柱建物１－２
図版６　１区掘立柱建物１－１・１－２柱穴
図版７　１区掘立柱建物１－２柱穴
図版８　２区掘立柱建物
図版９　２区掘立柱建物２－１柱穴
図版10　２区掘立柱建物２－２・２－３柱穴
図版11　２区竪穴住居検出状況
図版12　２区竪穴住居２－１・２－４
図版13　２区竪穴住居２－１・２－４柱穴など
図版14　２区竪穴住居２－２・２－３
図版15　２区竪穴住居２－２・２－３柱穴など
図版16　出土遺物１
図版17　出土遺物２
図版18　出土遺物３

第Ⅰ章　位置と環境

１節　歴史的環境

ａ．古代

河南町は大阪府の南東に位置し、北に太子町、西に富田林市、南に千早赤阪村と接する。東は葛城山系から金剛山系が南北に連なり、その東は奈良県となる。芹生谷遺跡は河南町の南にあり、千早赤阪村の水分神社東側に端を発する用水が潤す河南台地の深部に位置する（図１）。

河南台地で土地開発がはじまる時期は明瞭でない。河南町寛弘寺遺跡・神山遺跡や千早赤阪村誕生地遺跡などの発掘調査で、縄紋土器や石器が確認されており、ふるくは葛城・金剛山系を移動しながら縄紋人が活動していたことがうかがえる。芹生谷遺跡でも、縄紋時代のものと思われる石槍・石鏃が発見されている。

寛弘寺古墳群の東側低地部にあたる神山遺跡では、弥生時代末と古墳時代中期の集落が発見されている。なかでも、古墳時代中期集落は西側丘陵上の寛弘寺古墳群（ツギノ木山支群）を出現させた集団に関わるものと推測できる。初期須恵器・韓式系土器・製塩土器なども発見されており、須恵器生産に関わる渡来人をも含む可能性もある。

奈良時代に成立したとされる『住吉大社神代記』には仁徳天皇の御世に天皇が大神にさとされ、「大島守をもって紺口の溝を掘らしめよ」とあり、上鈴鹿・下鈴鹿・上豊浦・下豊浦の四か所の原の四万頃(しろ)の田を開墾した、と伝承する。『日本書紀』仁徳十四年条もこれによってこの地の水田は豊かに実り、百姓も豊かににぎわい、凶年の心配がなかった、という。さらに『住吉大社神代記』は石川や針魚川の水を屯倉の田畑に受水しているのはこの開発が起源、とする。

以上の伝承が史実を反映しているのかは議論が分かれる。鈴鹿・豊浦などの地名は現在に伝わらず、紺口の溝を古市古墳群の中を貫く古市大溝と考え、古墳時代中期の段階に人工水路を建設して河内平野の水田を灌漑した、と解釈する説もある。

これに対し、紺口の溝は河南台地の灌漑水路とし、現在もその名を伝える大島水路が大島守に由来する、という意見もある。そして、古墳時代中期には大型の帆立貝式古墳などからなる寛弘寺古墳群（ツギノ木山支群）が営まれ、これは紺口県主の奥津城とも考えられている。

ただし､河南台地の灌漑が古墳時代中期まで遡るかどうかは定かでない。大島水路の下流部(河南中学校調査地点）で河南町教育委員会が溝状遺構を検出し、自然河川の可能性もあるが、その中に五世紀前半の須恵器を確認している、という。また、大島水路上流部で千早赤阪村教育委員会が発掘調査を実施し、六世紀後半から末頃の水路とそれに伴う土器などを発見している。大島水路の西に分岐する川野辺地区の水路では平安時代の遺物がまとまって発見されており、これらの水路が飛鳥～平安時代頃には機能し、河南台地の水田化が整備されていったことがわかりつつある。

また、河南台地には六世紀後半の古墳が散在していることが古くから知られていた。上流部の

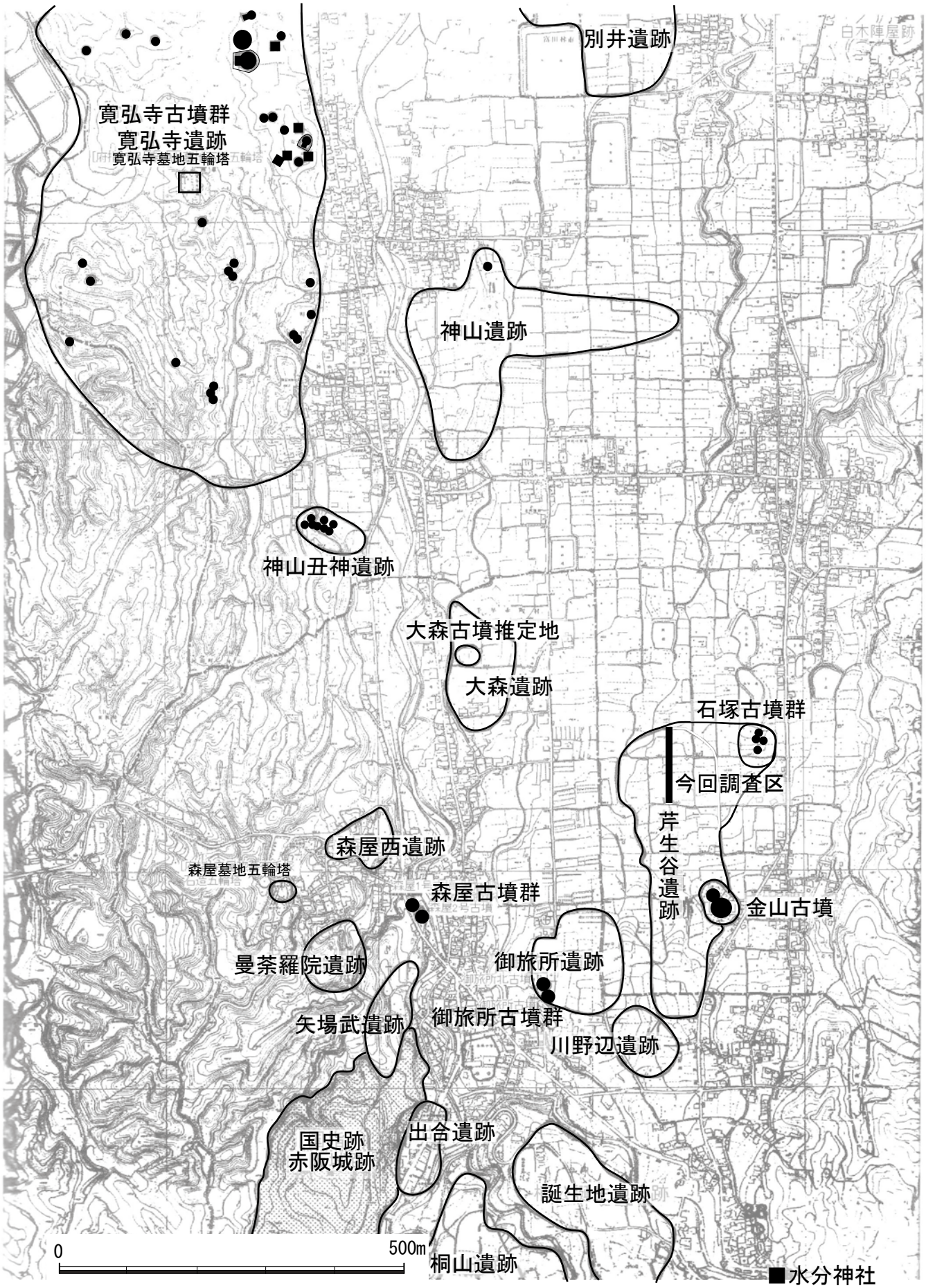

別井遺跡
寛弘寺古墳群
寛弘寺遺跡
寛弘寺墓地五輪塔
神山遺跡
神山丑神遺跡
大森古墳推定地
大森遺跡
石塚古墳群
今回調査区
芹生谷遺跡
金山古墳
森屋西遺跡
森屋墓地五輪塔
森屋古墳群
曼荼羅院遺跡
御旅所遺跡
矢場武遺跡
御旅所古墳群
川野辺遺跡
国史跡
赤阪城跡
出合遺跡
誕生地遺跡
桐山遺跡
0
500m
■水分神社

図１　周辺遺跡分布図

千早赤阪村には御旅所古墳・御旅所西古墳・浄心寺古墳・森屋古墳群などがある。御旅所北古墳には二上山凝灰岩製の組合式家形石棺が二基おさめられていた。森屋古墳群は詳細が不明だが、六世紀後半の須恵器が採集され、浄心寺古墳でも同時期の須恵器が見つかっている。

河南町域では芹生谷遺跡の東側に全長86ｍを測る双円墳の金山古墳があり、六世紀後半から末に大きな墳丘をもつ古墳が築かれた。さらに、金山古墳の北側で同時期頃の４基の小規模古墳が発見され、石塚古墳群と命名された(図２)。

河南台地下流部は西の丘陵に寛弘寺古墳群・神山丑神古墳群が、東の丘陵に一須賀古墳群・平石古墳群がある。東西あわせて200基以上の横穴式石室墳からなる大型群集墳である。これらは六世紀から七世紀にかけて築かれたものである。一須賀古墳群の被葬者集団は蘇我系氏族とも推定されており、これらの群集墳は河南台地のみを基盤とする集団によるものではないようだ。

さて、金山古墳は今回調査区の南東約50ｍに位置する双円墳で、南丘の径55ｍ、高９ｍ、北丘の径39ｍ・高７ｍを測る。北丘は二段築成、南丘は三段築成で周濠がめぐる。南丘の石室は不明だが、北丘の横穴式石室内は開口しており、二上凝灰岩製のくり抜き式家形石棺が２基おさめられている。石室長は16ｍ、玄室長は3.8ｍ・幅2.5ｍ・高さ2.8ｍ、羨道長６ｍ・幅1.7ｍ・高さ２ｍである。

古くから知られた二つの家形石棺は後期古墳の基準資料とされ、奥が六世紀後半、手前が六世紀末とされる。手前の石棺は奈良県藤の木古墳と同じ二上凝灰岩製で、同型式とされ、これが蘇我馬子によって殺された穴穂部皇子・安宅皇子墓とすれば、587年前後の造営である。

開口する北丘石室は盗掘にあっており、1946年の発掘調査では石室から、銀環２、瑠璃玉１、鉄製帯金具３、鉄刀２振り分の破片、鉄刀子１、鉄鏃十数本、馬具、土師器杯、須恵器高杯、壺などが出土した。また、1993年の発掘調査では、北丘石室前庭部で須恵器子持ち器台、壺などが出土している。

河南台地に単独で営まれた金山古墳や御旅所古墳は、丘陵の群集群に対し、やや性格が異なる被葬者像が推定されてきた。ところが、先に示したとおり、金山古墳北方で発見された石塚古墳群を考慮すれば、金山古墳周辺にも墓域が広がる可能性があり、被葬者集団の推定はさらに複雑な様相を示す。

被葬者集団の手がかりとして、注目されるのが三木精一氏や直木孝次郎氏による地名考証である。王仁の子孫と伝承する西文首・蔵首・馬史等の氏族が、石川郡に本貫をもち、これらが物資の記録(西文首)・保管(蔵首)・運搬(馬史)などにたずさわった可能性である。古墳の北東にひろがる「馬谷」の地名は、石川を通じで河内から大和に物資を運搬する集団が飛鳥時代にかけて活躍したのではないか、と考えられる。また、河南台地の「馬谷」と金山古墳は、羽曳野丘陵の「駒ケ谷」と蔵塚古墳に共通する要素があり、馬匹生産に関わる渡来系氏族に由来するのかもしれない。

ｂ．中・近世

河南台地の条里地割は現状でも良好に確認できる。これらがいつ頃成立したのかは定かでない。883年（元慶七年）に記載されたと伝わる『観心寺勘録縁起資材帳』によると、「仲村荘」・「杜屋荘」の名があり、これは芹生谷遺跡を含む中村地区やその西南の千早赤阪村森屋地区と考えられている。田地表記は「六条鏡田里五坪三反百卅歩」など、条里呼称が使われており、平安時代中頃には遺跡周辺の条里が整いつつあったと推測される。

河南台地を貫流する水路群の源となる取水地に水分神社がある。この神社は南北朝期の戦乱で荒廃し、1334年（建武元年）に後醍醐天皇の勅命を受けた楠木正成が本殿・拝殿・鐘楼などを再建した、と伝わる。また、1337年（延元２年）には、最高位である正一位の神階を授けられている。南北朝時代に台頭した楠一族が、河南台地と水路の支配権を握っていた実態がうかがえる。

千早赤阪村から河南町・太子町にかけては、多くの中世城郭が残されている。千早赤阪村では国史跡の千早城跡・楠木城跡（上赤阪城跡)・赤阪城跡（下赤阪城跡）をはじめ、二河原辺城跡・本宮城跡・しょうぶ城跡・桝形城跡・猫路山城跡などがある。河内長野市域では金剛寺、河合寺城、石仏城など、河南町域では平石城跡など、富田林市域では龍泉寺城跡など、太子町域では松山山城跡などがあり、楠一族の拠点を取り囲む「大赤阪城群」を形成していた可能性がある。河南台地もその中に含まれ、地域の人々が南北朝の攻防に関与していた可能性もある。

南北朝の動乱がおさまり、中世末には秀吉の紀州攻めなどで戦禍を被るものの、近世には再び現在に面影を残す田園風景になったと思われる。これまでの調査や今回調査でも表層から織豊期の肥前陶器や近世初期の肥前磁器が発見されている。条里地割が秀吉時代や江戸時代の検地で大きく改変されたのかどうかは、発掘成果に照らして今後も検討すべき課題だろう。

２節　調査経緯

一般国道309号の延伸が遺跡地周辺に及び、本府教育委員会で平成14年に試掘調査を実施した。このときは芹生谷遺跡の北側部分で大きな谷状の落ち込みがみられ、遺構・遺物の確認はできなかった。平成17年、遺跡地周辺で暫定的に二車線のみ309号が開通すると、その南側で南北800ｍにわたり、幅員21ｍの河南赤阪バイパス整備事業が計画された。

これをうけて、平成19年に試掘調査を実施し、全域で遺物の広がりを確認、一部に遺構が残されていることもわかった。その結果、道路予定地を含む地域をあらたに芹生谷遺跡と命名して対応することとなった。ところが、その後の国・府などの行政改革や公共事業の見直しによって用地買収や道路整備事業は遅滞した。その間の平成20年・21年・22年は部分的な調査を実施、古代から中世にいたる集落の一端が確認された(図２)。

平成24年になって道路整備事業が再開されることとなった。今回調査は芹生谷遺跡の道路計画地内の北端約165ｍ、2100㎡に及ぶ地域である。また、平成25年度以降も南に続く部分の調査が予定されている。

平成19年度の試掘調査は開発対象地全域に27か所の試掘トレンチを実施して行った。基本的に遺構掘削はせずに埋め戻しているものの、今回調査区の地域では遺構面より深く掘削され、大半で遺構は失われてしまった。

平成20年度の本調査は今回調査区の東側に幅約２ｍ長さ約300ｍで行われた。今回調査区と一部は重なる。溝・柱穴などが確認されている。

平成21年度の本調査は金山古墳の南側で行われた。主に中世の掘立柱建物や溝などが発見されている。

平成22年度の本調査は金山古墳の西北で行われた。顕著な遺構は確認されず、古墳時代後期の須恵器や土師器・鎌倉時代の瓦器などが発見されている。

今回の本調査（平成24年度）は平成24年９月３日より実施、同年12月16日に終了した。遺物整理作業と本書の作成は現地調査と併行して開始し、平成25年10月末に終了した。調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居４棟、掘立柱建物５棟、南北朝時代の掘立柱建物１棟などが発見された。平成24年12月1日にはこれらの成果を現地説明会で公開した。

３節　調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行１／10000地形図を基準として４段階の区分を実施している（図３）。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８に区画する。芹生谷遺跡は河南町の南端に位置するＤ６区内にある。

第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500ｍ、横2000ｍの範囲である。芹生谷遺跡は15区・11区にあたる。今回調査区は15区にほぼ含まれる。

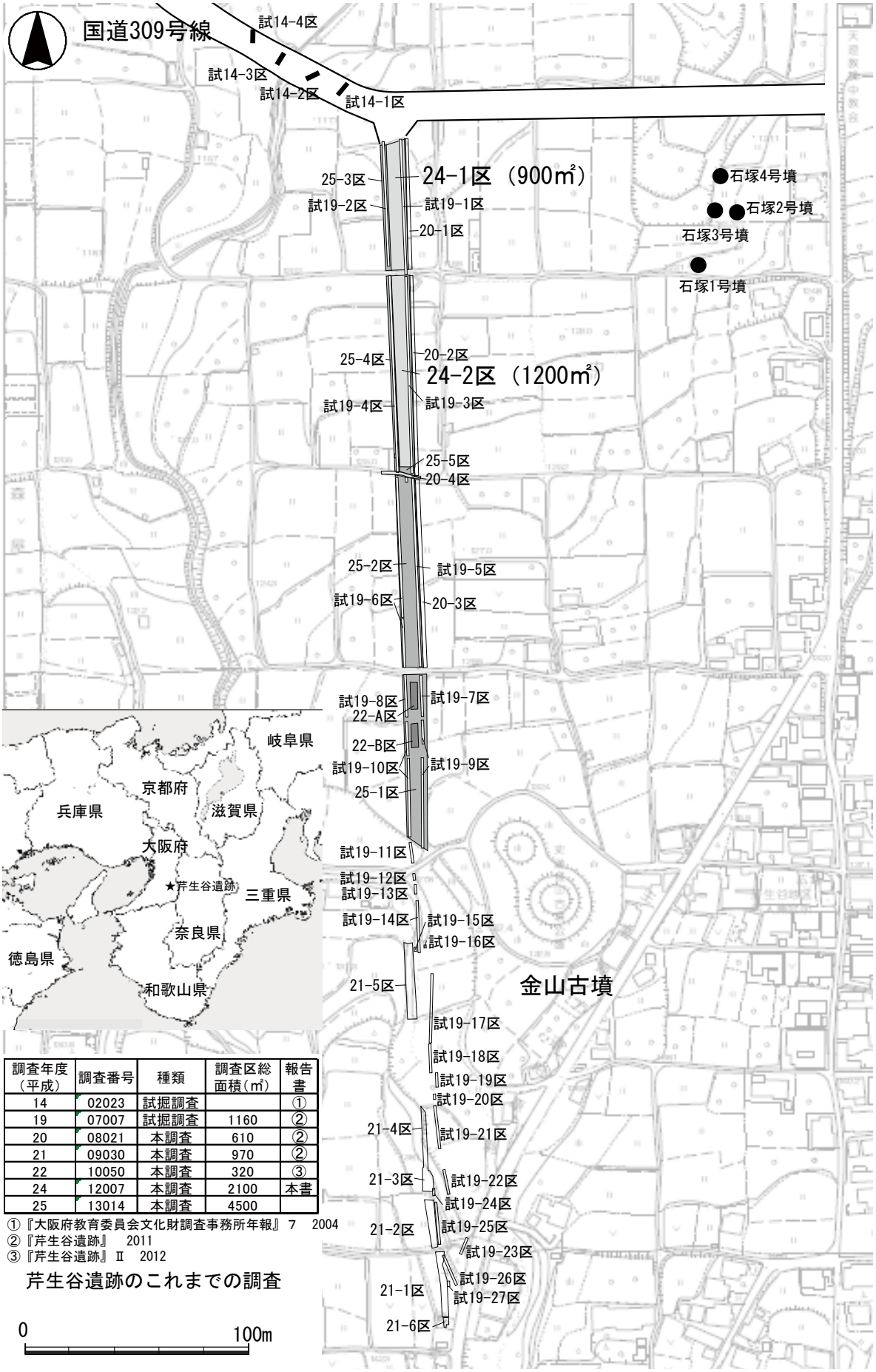
第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を１～20、横軸をA～Oに区分したものである。今回調査地は1Ｎ区と1Ｏ区内にあたる。

第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をａ～ｊ、横軸を１～10に区分したものである。今回調査区はＤ6－15－1N-5c・6cなどである。

本文中の北は座標北を示す。水準は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ.）を使用した。遺構面の標高は最も高いところで125ｍ前後、最も低いところで118ｍ前後である。概して、北が低く、南ほど高くなる。

調査地は里道を挟み、南北二つに分かれるため、便宜的に北側を１区、南側を２区とした。両区はクレーン撮影による写真測量を行い、1/20・1/100の遺構図・等高線図を委託作成した。写真測量によって得られたデータは三次元で遺構断面が表現できるようにデータ処理している。写真測量は１区を平成24年10月22日に、２区を11月27日に実施した。基準点はＧＰＳ測量による。三級電子基準点から調査区各所に四級基準点を設けて実施した。

道路予定地は南北に長く、西側里道が生活道路にされているため、里道部分を工事用仮設進入



調査年度（平成）	調査番号	種類	調査区総面積（㎡）	報告書
14	02023	試掘調査		①
19	07007	試掘調査	1160	②
20	08021	本調査	610	②
21	09030	本調査	970	②
22	10050	本調査	320	③
24	12007	本調査	2100	本書
25	13014	本調査	4500	

①『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』7　2004
②『芹生谷遺跡』　2011
③『芹生谷遺跡』Ⅱ　2012

芹生谷遺跡のこれまでの調査

図２　調査区位置図

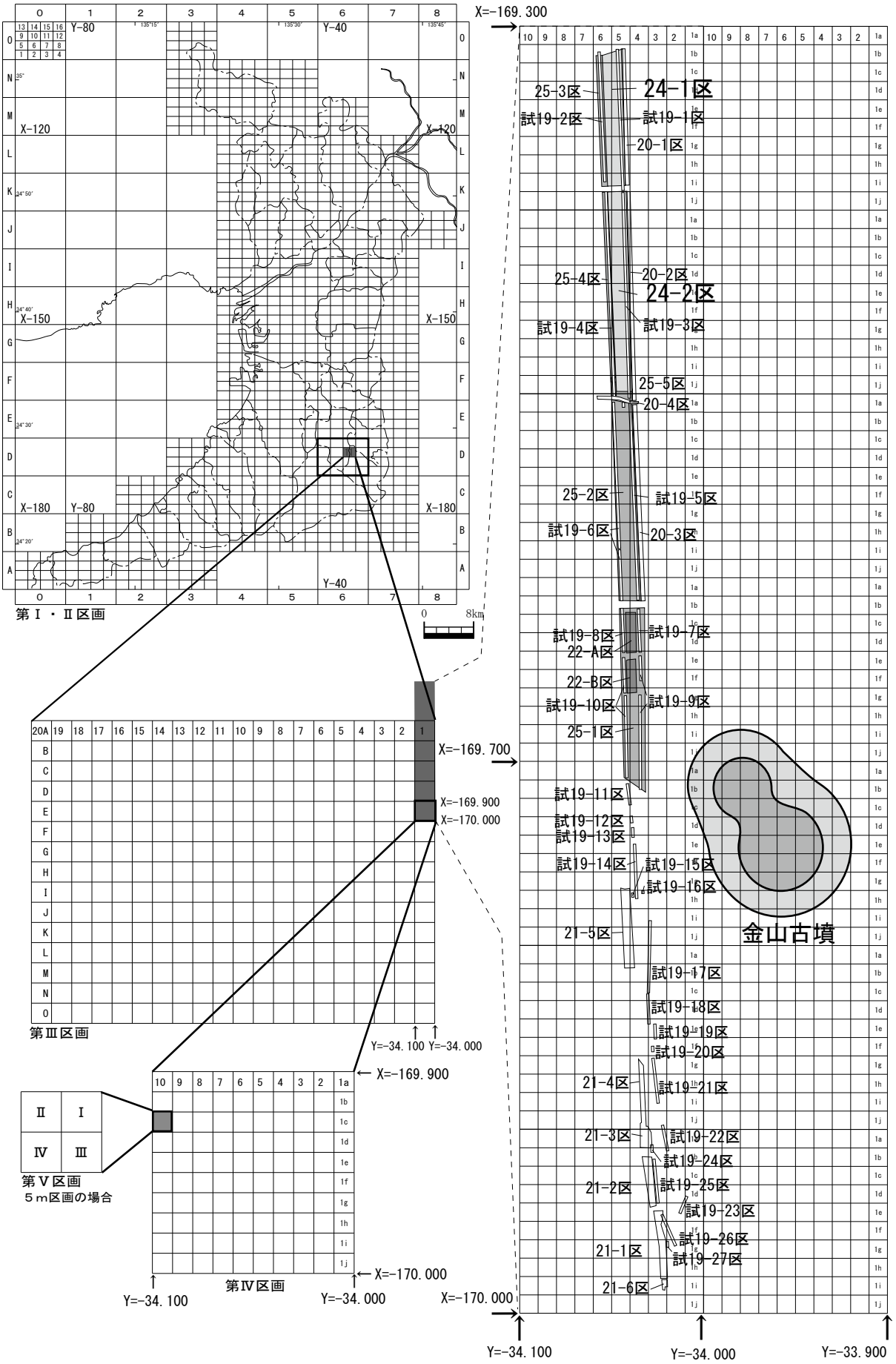

X=-169.300
X-120
X-150
X-180
Y-80
Y-40
第Ⅰ・Ⅱ区画
0 8km
24-1区
25-3区
試19-2区
試19-1区
20-1区
25-4区
20-2区
24-2区
試19-4区
試19-3区
25-5区
20-4区
25-2区
試19-5区
試19-6区
20-3区
試19-8区
試19-7区
22-A区
22-B区
試19-10区
試19-9区
25-1区
X=-169.700
X=-169.900
X=-170.000
試19-11区
試19-12区
試19-13区
試19-14区
試19-15区
試19-16区
金山古墳
21-5区
試19-17区
試19-18区
試19-19区
試19-20区
21-4区
試19-21区
21-3区
試19-22区
試19-24区
21-2区
試19-25区
試19-23区
試19-26区
21-1区
試19-27区
21-6区
第Ⅲ区画
Y=-34.100
Y=-34.000
Ⅱ Ⅰ
Ⅳ Ⅲ
第Ⅴ区画
５ｍ区画の場合
第Ⅳ区画
X=-170.000
Y=-33.900

図３　調査区地区割図

路として拡張し、その東側約165ｍ、幅約12ｍについて調査区を設定した。発掘調査は地表面の旧耕作土を重機で除去し、水田床土を人力掘削、地山面で遺構検出した。地山は水田化に伴い、地山面まで切り土され、低地部に客土、ひな壇造成されていた。遺構検出できたのは切り土のない部分のみである。

出土遺物はコンテナ５箱で、須恵器・土師器・瓦器などがある。現地調査と併行して洗浄・注記・実測・写真撮影をおこなった。また、本書を刊行するにあたり、遺構・遺物図面の浄書をデジタル図化し、省力化をはかった。アドビシステムのイラストレータＣＳ４による。

４節　層序

これまでの調査で調査区周辺はもともと旧水田が広がり、深さ約0.2ｍの水田耕作土を除去すると、遺物を包含する水田床土があり、その直下が地山であることが確認できていた。

地山は花崗岩や安山岩などの礫や砂利を含む粘土で、洪積段丘の上面にあたる。試掘調査では、この中からは旧石器時代の遺物などは確認されていない。

遺構はおもに、地山に掘削されたものが残存し、遺構の上面は永年の耕作で幾分削平を受けている。したがって、水田床土に含まれる須恵器・土師器などの遺物も、粉砕されたものが多く、遺存状況は悪い。今回調査でも大半の遺物は二次堆積のもので、遺構に伴う遺物はわずかだった。

基本層序は、水田耕土が黒褐粘土、遺物包含層である水田床土が暗褐土・灰褐土・茶褐土など、地山が礫混じりの茶褐土である。各区とも水田耕土は5YR2/1黒褐色(①)で、地山は10YR7/8黄橙色(③)に対応する。遺物包含層である水田床土は10YR6/1・10YR4/1などの褐灰色である（図５・７)。

地山は南に高く、北に低い。さらに、調査区の南端は深い谷となる。ひな壇状の水田は緩やかに傾斜する斜面地の北側を削って南側に客土し、平坦面をつくりだしたものによる。したがって、地山を削った部分は、包含層がなく、遺構も削平されている。逆に、客土された部分は遺構が残され、遺物包含層が0.3～0.8ｍ程度ある。

遺物包含層である水田床土はいくつかに分層でき、層境で遺構面の有無を確かめながら人力掘削したが、層境に顕著な遺構はなかった。

第Ⅱ章　調査成果

１節　１区の調査

１区は南北に長く、南北約65ｍ、幅約12ｍを測る(図５・図版２)。北側は国道309号に、南側は２区に取りつく。西側は平成19年調査の試掘２区、東側は平成20年調査の１区に接する。また、調査区のほぼ中央に平成19年調査の試掘１区を含む。

現地調査は水田耕土を機械掘削で除去したのち、人力掘削で遺物包含層を一層ずつ掘削、遺構面を確かめながら実施した。約0.2ｍの深さの旧水田耕土を除去すると、水田床土がある。遺構面の標高（Ｔ.Ｐ.）は北端が117ｍ前後、南端が120ｍ前後、その間に三段の水田面がひな壇造成されていた。約３ｍの比高差の傾斜地に水田造成する際、各水田の北側を削り、削った土を南側に盛り上げて三段の平坦面とする。削られた地山部分にはほとんど遺構は残されていなかった。逆に、客土された部分は１ｍちかくの遺物包含層が形成されたところもあった。

発見された遺構は掘立柱建物２棟、南北溝・東西溝・土坑などである。なお、調査区の北端は谷となり、２ｍ以上の自然地形による落ち込みだったため、地山まで掘削していない。

掘立柱建物１－１は調査区北西で発見された１×３間以上の建物で、西の妻柱は調査区外へと続く(図６上・図版４・６)。軸線は北東から南西に向いており、上面から古墳時代後期の須恵器片が発見された。長辺3.8ｍ以上、短辺3.2ｍを測る。柱穴には顕著な抜き取り跡がみられなかったものの、柱痕跡も確認できなかった。柱穴の一部は鋤溝と思われる東西溝群で上面が削られる。この東西溝には中世の瓦器碗片などが含まれていた(図14－49)。

掘立柱建物１－２は調査区南西で発見された２×４間の建物で、ほぼ軸線を東西にそろえる(図６下・図版５・７)。東西7.8ｍ、短辺4.2ｍを測る。上面から14世紀前半の瓦器碗片が発見された。柱穴には柱痕跡を残すものもある。建物東側は総柱となる。西側が土間、東側が居間だろうか。建物の北側と南側で東西溝が確認されており、雨落ち溝かもしれない。また、その南側にはいくつかの柱穴があり、柵列の可能性がある。南東隅に土坑１－３がある。

東西溝群が調査区の北端、中央、南端で発見されている。いずれも、水田床土が0.1ｍ程度のところからみつかり、地山を削った耕作痕跡と推定する。牛馬耕による鋤溝だろう。

南北溝１－１・１－２は調査区の南端で並んで発見された。南北溝１－１は長さ約7.4ｍ、幅約0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。南北溝１－２は長さ約4.3ｍ、幅約0.2ｍ、深さ0.1ｍを測る。出土遺物はない。

土坑１－１は長辺約1.1ｍ、短辺約1.0ｍ、深さ0.1ｍを測る不定形土坑で、埋め土は灰褐粘土で出土遺物はない。

土坑１－２は長辺約1.8ｍ、短辺約0.9ｍ、深さ0.15ｍを測る不定形土坑で、埋め土は暗褐粘土で出土遺物は瓦器碗片である。その他、小穴が遺構面の各所で発見されている。いずれも上層の暗褐土で埋められる。遺物の出土はない。地山に含まれた礫などの抜き取り痕跡かもしれない。

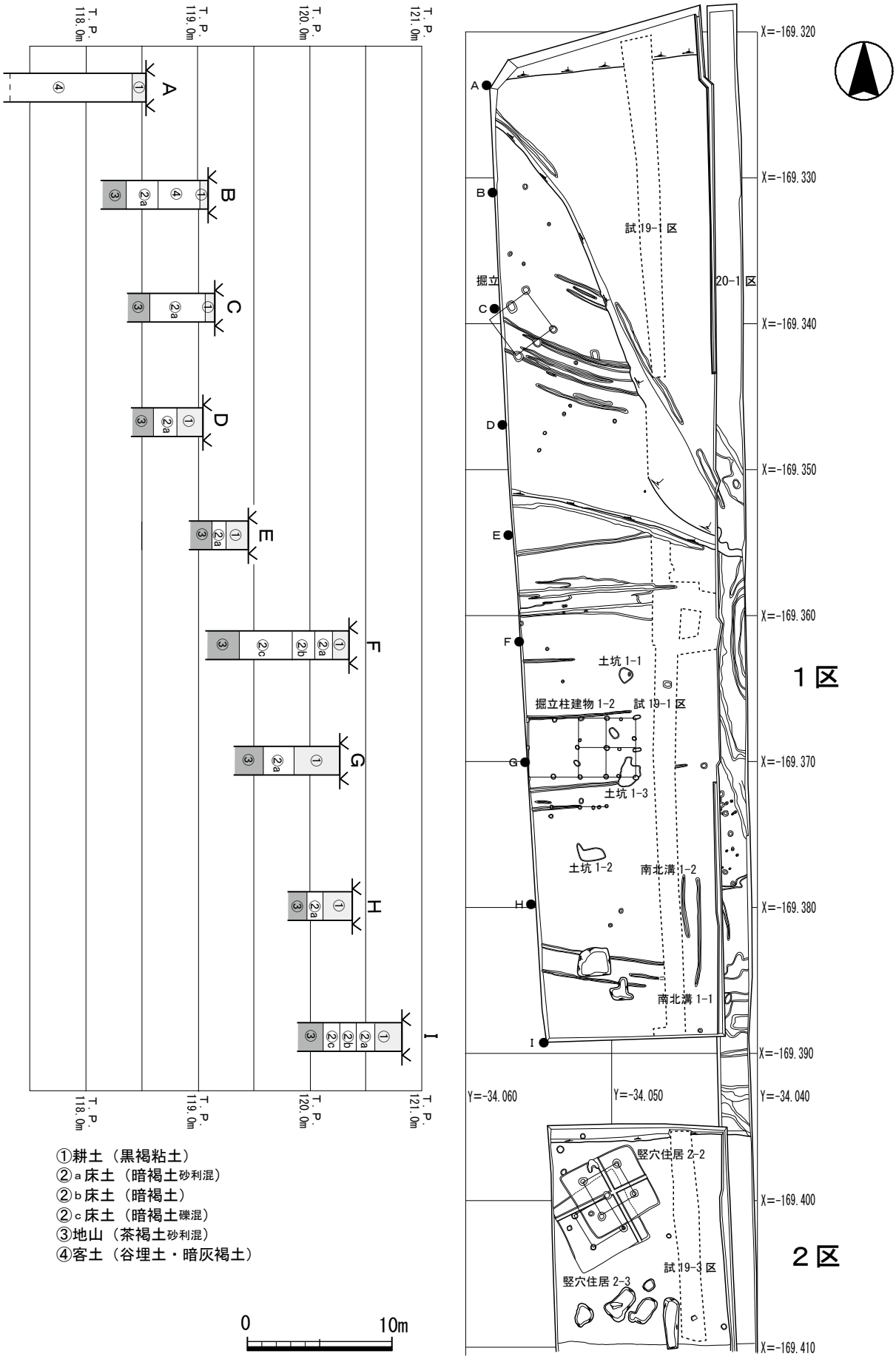

T.P. 118.0m
T.P. 119.0m
T.P. 120.0m
T.P. 121.0m
A
B
C
D
E
F
G
H
I
①耕土（黒褐粘土）
②a床土（暗褐土砂利混）
②b床土（暗褐土）
②c床土（暗褐土礫混）
③地山（茶褐土砂利混）
④客土（谷埋土・暗灰褐土）
0
10m
X=-169.320
X=-169.330
X=-169.340
X=-169.350
X=-169.360
X=-169.370
X=-169.380
X=-169.390
X=-169.400
X=-169.410
Y=-34.060
Y=-34.050
Y=-34.040
試19-1区
20-1区
掘立
土坑1-1
掘立柱建物1-2
試19-1区
土坑1-3
土坑1-2
南北溝1-2
南北溝1-1
竪穴住居2-2
試19-3区
竪穴住居2-3
1区
2区

図５　１区全体図

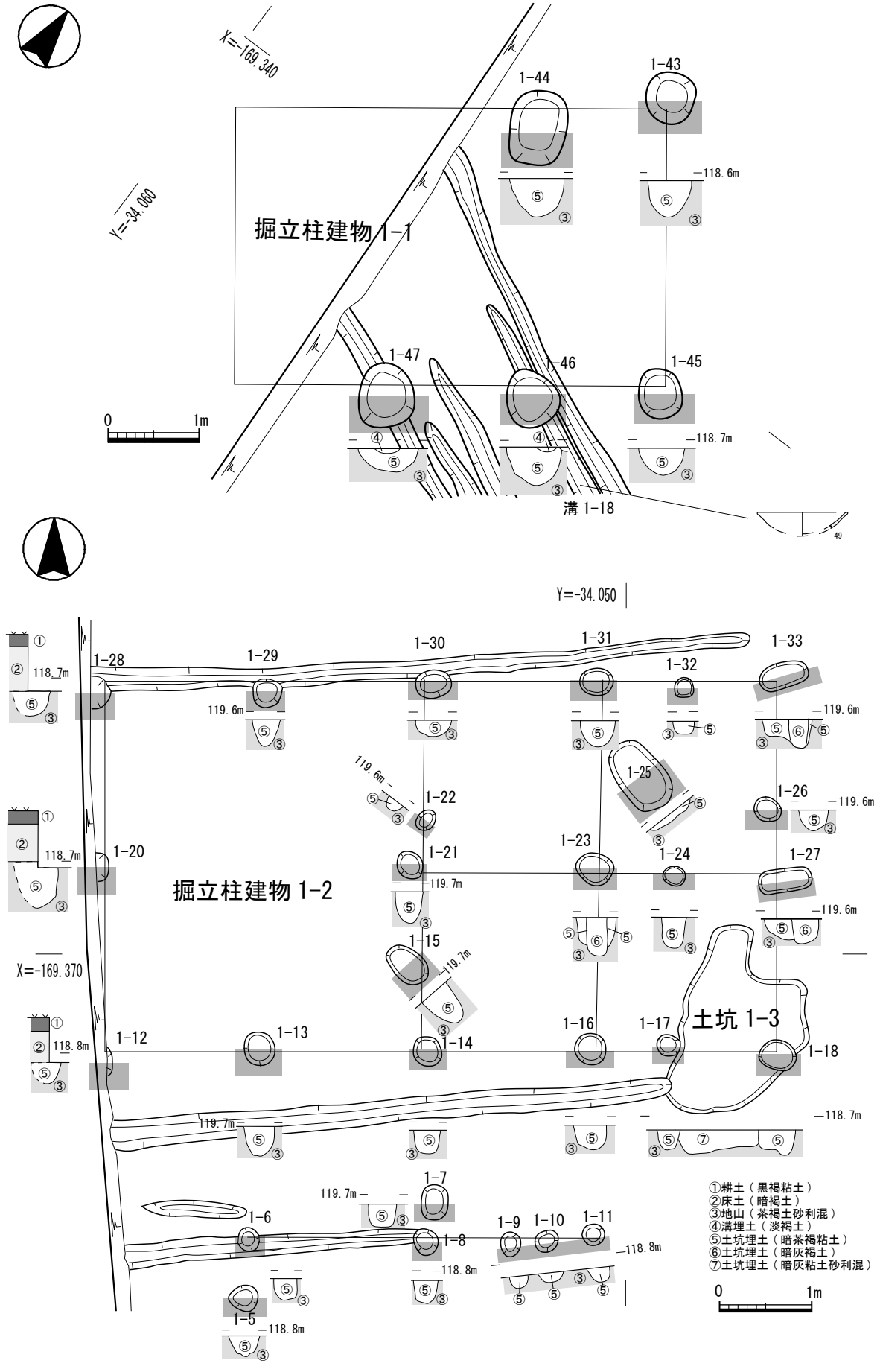

X=-169.340
Y=-34.060
掘立柱建物 1-1
1-43
1-44
1-45
1-46
1-47
溝 1-18
0
1m
Y=-34.050
X=-169.370
掘立柱建物 1-2
土坑 1-3
1-5
1-6
1-7
1-8
1-9
1-10
1-11
1-12
1-13
1-14
1-15
1-16
1-17
1-18
1-20
1-21
1-22
1-23
1-24
1-25
1-26
1-27
1-28
1-29
1-30
1-31
1-32
1-33
①耕土（黒褐粘土）
②床土（暗褐土）
③地山（茶褐土砂利混）
④溝埋土（淡褐土）
⑤土坑埋土（暗茶褐粘土）
⑥土坑埋土（暗灰褐土）
⑦土坑埋土（暗灰粘土砂利混）

図６　１区掘立柱建物

２節　２区の調査

２区は南北に長く、南北約100ｍ、幅約12ｍを測る。北側は１区、南側は平成25年度調査予定地に続く。西側は平成19年調査の試掘４区、東側は平成20年調査の２区に接する。また、調査区のほぼ中央に平成19年調査の試掘３区を含みこむ。南北に里道があり、これは条里水田の坪境とされる。

現地調査は１区と同様、水田耕土を機械掘削で除去したのち、人力掘削で遺物包含層を一層ずつ掘削、遺構面を確かめながら実施した。

約0.2ｍの深さの旧水田耕土を除去すると、水田床土がある。遺構面の標高（Ｔ.Ｐ.）は北端が121ｍ前後、南端が124ｍ前後、その間に六段の水田がひな壇造成されている。調査区は一反四方の条里水田のほぼ中央を南北に貫く形状である。

約３ｍの比高差の傾斜地にほぼ均等に18ｍ間隔で六段の水田を造成する際、各水田の北側を削り、削った土を南側に盛り上げて平坦面としたようだ。削られた地山部分に遺構はほとんど残されていなかった。逆に、客土された部分は0.8ｍちかく遺物包含層が形成されたところもあった。

発見された遺構は竪穴住居（竪穴建物）４棟、掘立柱建物４棟、南北溝・東西溝・斜行溝・土坑などである。

２区南端で一辺約5.4ｍ、深さ約0.15ｍの隅丸方形の竪穴住居２－１と少し小ぶりの竪穴住居２－４が重なるようにして発見された(図８下・図10・図版12・13)。竪穴住居２－４は東西約5.6ｍ、南北4.8ｍ、深さ約0.1ｍを測る。竪穴住居は地形にそって営まれ、１区の掘立柱建物１－１と軸線がほぼ共通し、約200ｍ南に位置する金山古墳の方向に入口を向ける。

少し小ぶりの竪穴住居２－４を埋め戻し、竪穴住居２－１へと建て替えられたと考える。竪穴住居２－１は中央がマウンド（土壇）となり､堅く焼きしまっていた。火を使う作業をしたのか、暖や灯りとりの施設かもしれない。北側にはカマド痕跡があり、赤変した50㎝四方の広がりとその上面に焼けた粘土塊が散在していた。カマドの上部構造は最終的に撤去されず、倒壊して、後の水田化に伴い四散したと考える。

二つの住居跡はいずれも四隅に柱穴を伴い、埋め土に６世紀後半の須恵器・土師器片が含まれた。

竪穴住居２－１の東で北東に伸びる斜行溝２－１が検出された。長さ24.5ｍ､深さ0.3ｍを測る。薬研掘りで埋め土は砂利混じりの暗茶褐粘土による。流水の痕跡は残されていないが排水溝と考える。竪穴住居２－１との取り付き部分から６世紀後半の土師器甕が発見された(図13－34)。

２区北端で竪穴住居２－１とほぼ同規模で軸線を同じくする隅丸方形の竪穴住居２－２・竪穴住居２－３が発見された(図８上・図９・図版14・15)。竪穴住居２－２は一辺5.1ｍ四方、深さ約0.1ｍ､北壁の中央にカマド痕跡が残されていた。竪穴住居２－３は一辺5.2ｍ四方､深さ約0.05ｍを測る。南側は削平により、埋め土はほとんど残されていなかった。カマドの遺存状況などか

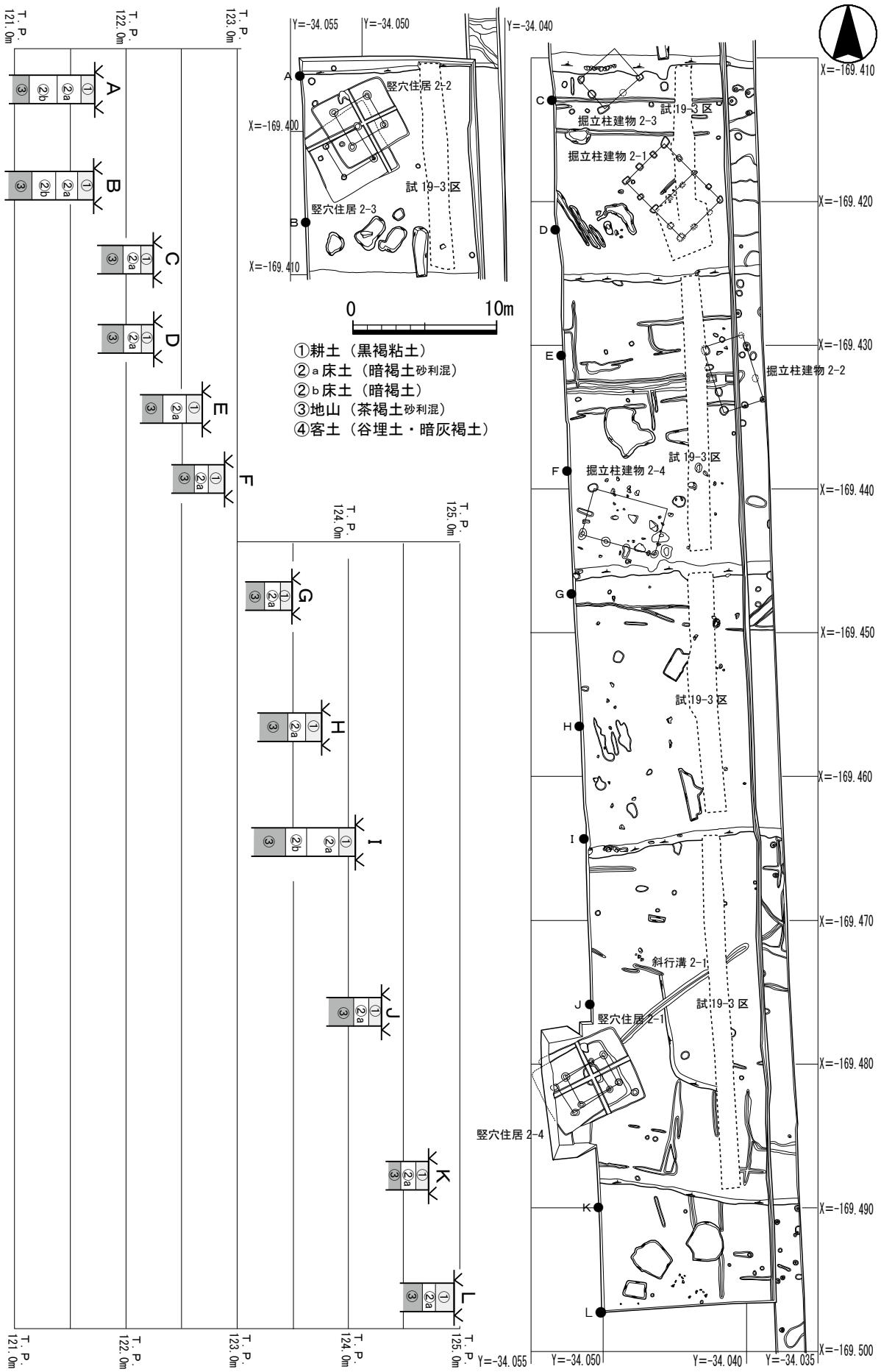

T.P. 121.0m
T.P. 122.0m
T.P. 123.0m
T.P. 124.0m
T.P. 125.0m
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
Y=-34.055
Y=-34.050
Y=-34.040
X=-169.400
X=-169.410
竪穴住居 2-2
竪穴住居 2-3
試 19-3 区
0
10m
①耕土（黒褐粘土）
②a床土（暗褐土砂利混）
②b床土（暗褐土）
③地山（茶褐土砂利混）
④客土（谷埋土・暗灰褐土）
X=-169.410
X=-169.420
X=-169.430
X=-169.440
X=-169.450
X=-169.460
X=-169.470
X=-169.480
X=-169.490
X=-169.500
掘立柱建物 2-3
掘立柱建物 2-1
掘立柱建物 2-2
掘立柱建物 2-4
斜行溝 2-1
竪穴住居 2-1
竪穴住居 2-4
Y=-34.055
Y=-34.050
Y=-34.040
Y=-34.035

図7　2区全体図

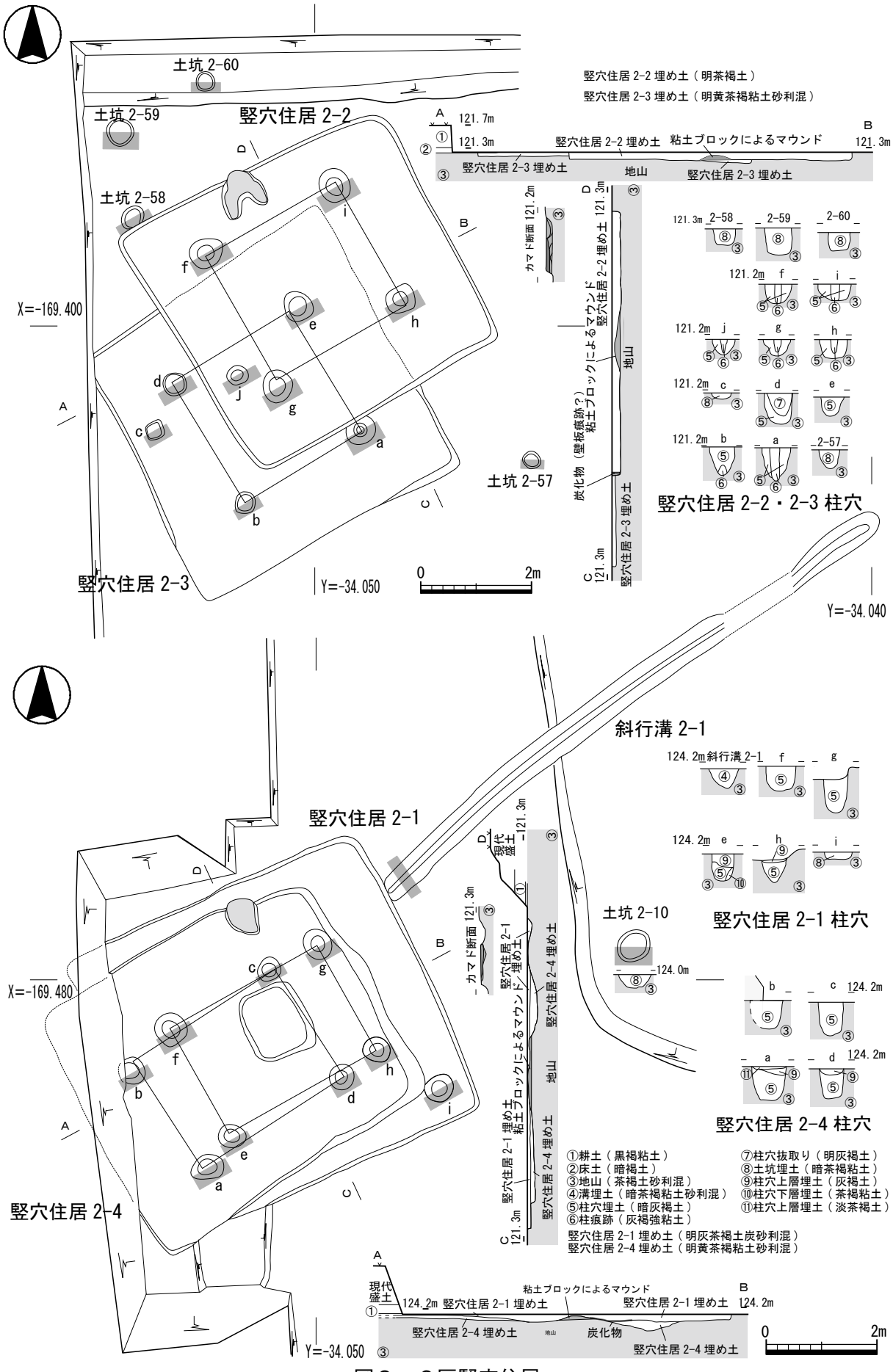
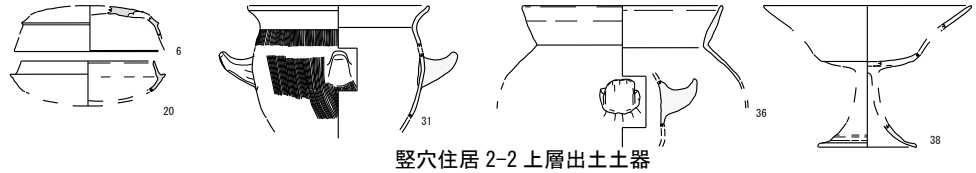
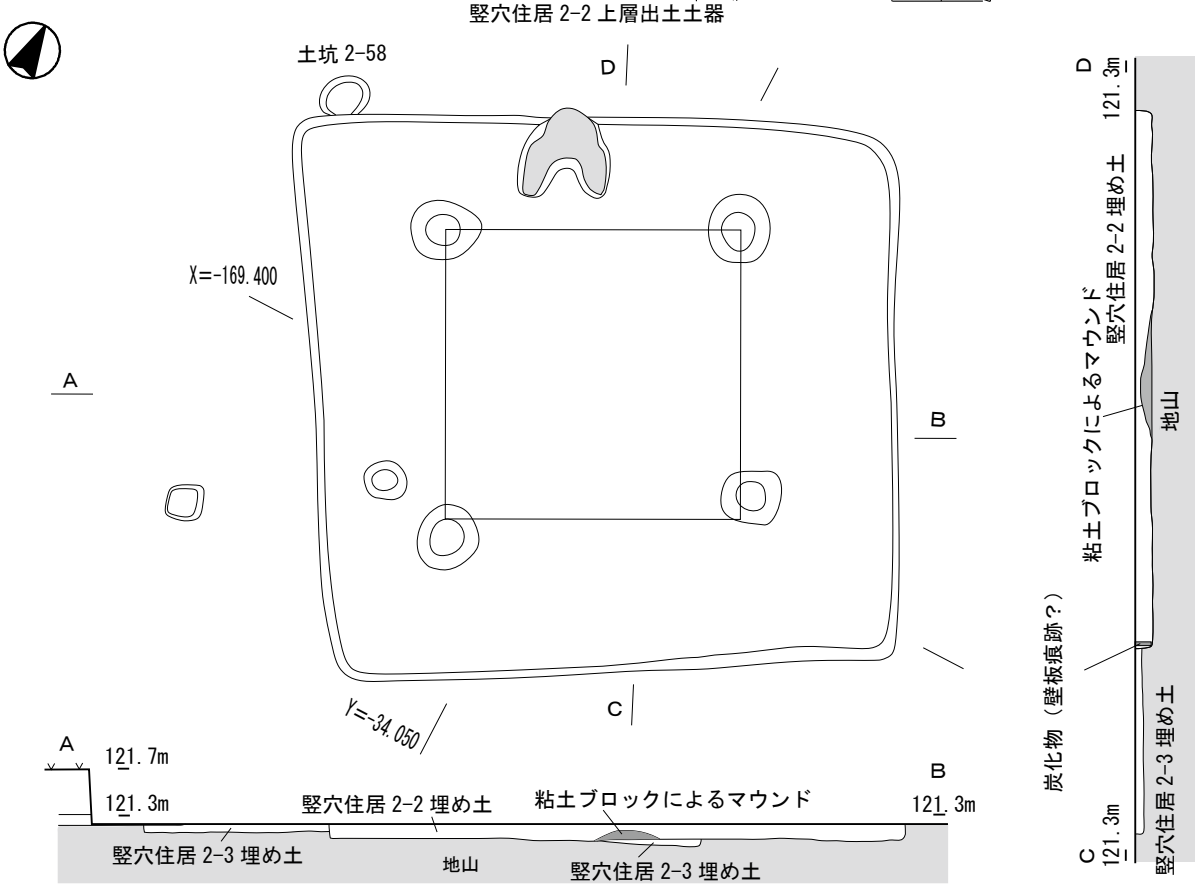

土坑 2-60
土坑 2-59
竪穴住居 2-2
土坑 2-58
竪穴住居 2-3
X=-169.400
Y=-34.050
Y=-34.040
土坑 2-57
竪穴住居 2-2 埋め土（明茶褐土）
竪穴住居 2-3 埋め土（明黄茶褐粘土砂利混）
粘土ブロックによるマウンド
竪穴住居 2-3 埋め土
地山
竪穴住居 2-2・2-3 柱穴
斜行溝 2-1
竪穴住居 2-1
竪穴住居 2-4
X=-169.480
竪穴住居 2-1 柱穴
竪穴住居 2-4 柱穴
土坑 2-10
竪穴住居 2-1 埋め土（明灰茶褐土炭砂利混）
竪穴住居 2-4 埋め土（明黄茶褐粘土砂利混）
①耕土（黒褐粘土）
②床土（暗褐土）
③地山（茶褐土砂利混）
④溝埋土（暗茶褐粘土砂利混）
⑤柱穴埋土（暗灰褐土）
⑥柱痕跡（灰褐強粘土）
⑦柱穴抜取り（明灰褐土）
⑧土坑埋土（暗茶褐粘土）
⑨柱穴上層埋土（灰褐土）
⑩柱穴下層埋土（茶褐粘土）
⑪柱穴上層埋土（淡茶褐土）
0
2m

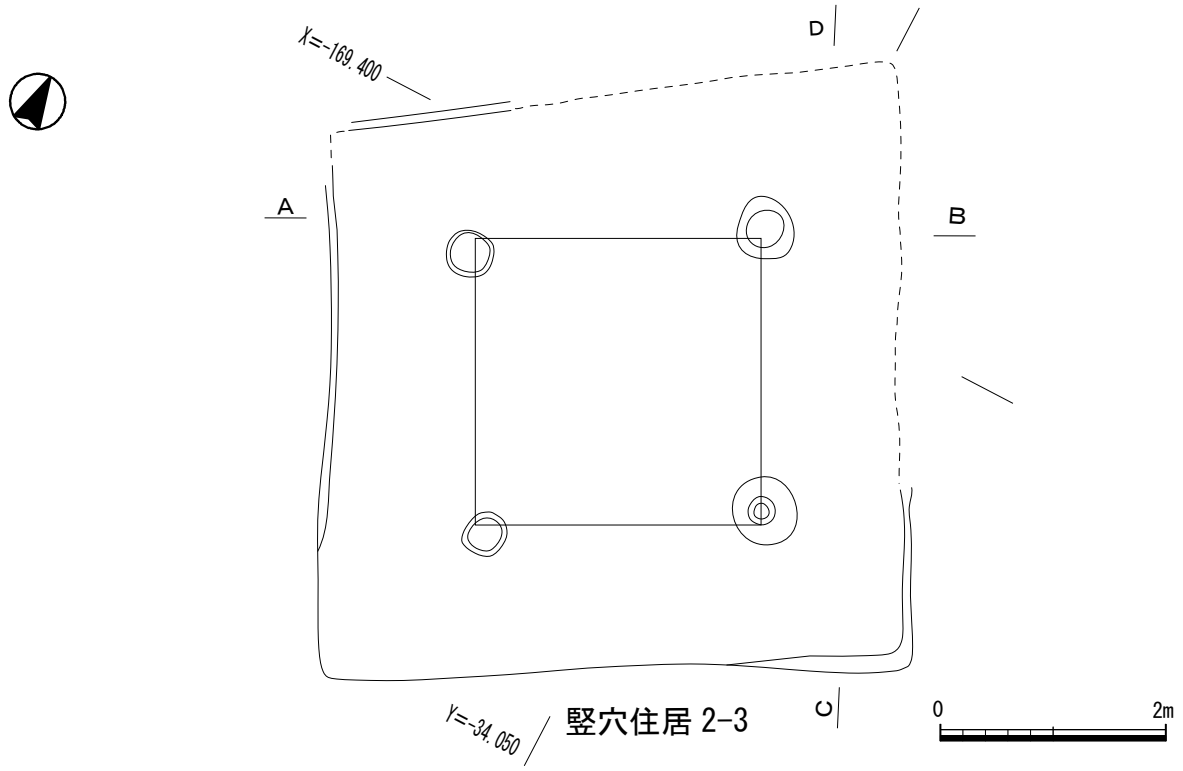
図８　２区竪穴住居



竪穴住居 2-2 上層出土土器



竪穴住居 2-2



竪穴住居 2-3

図９　２区竪穴住居２－２・２－３

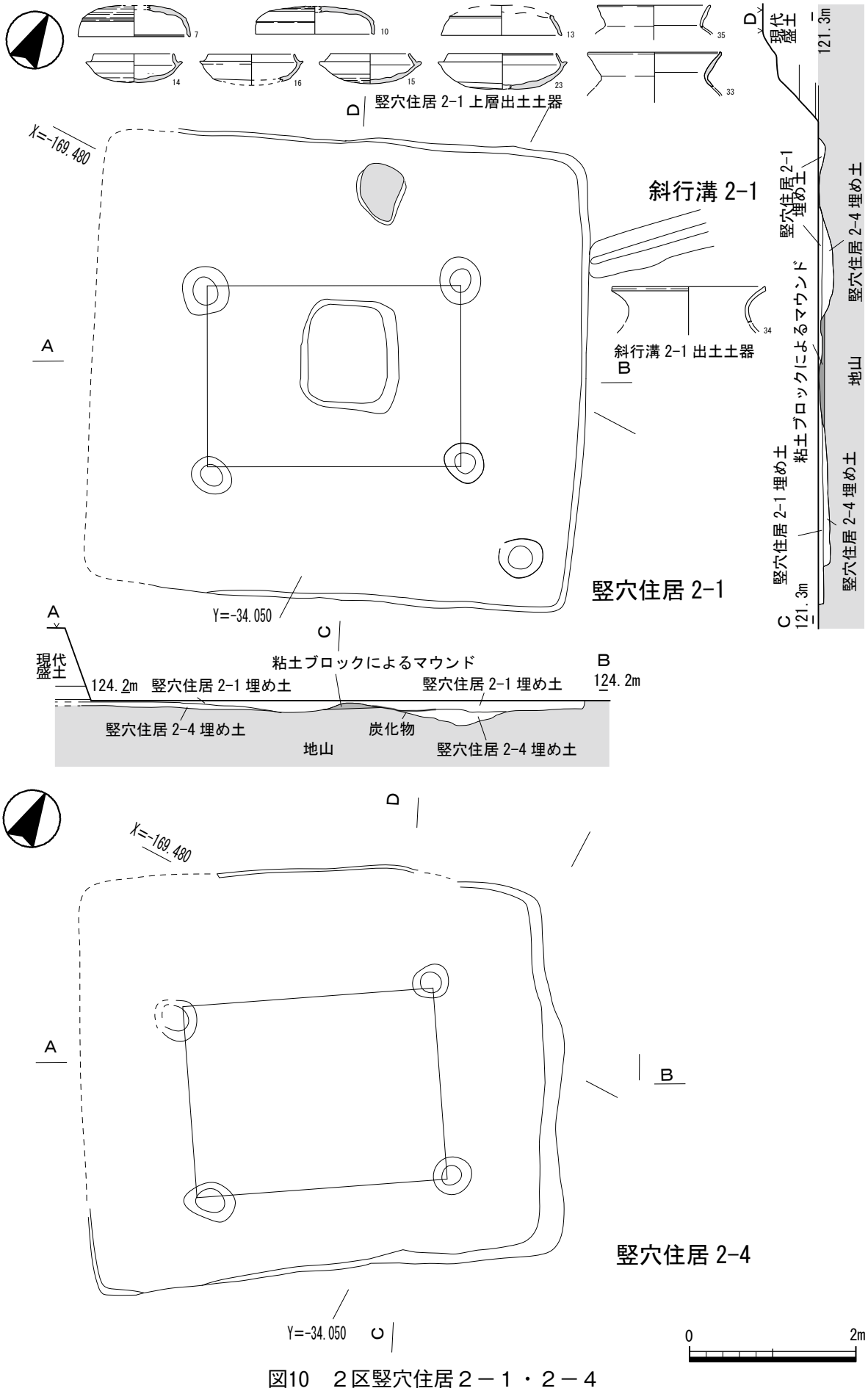


図10　２区竪穴住居２－１・２－４

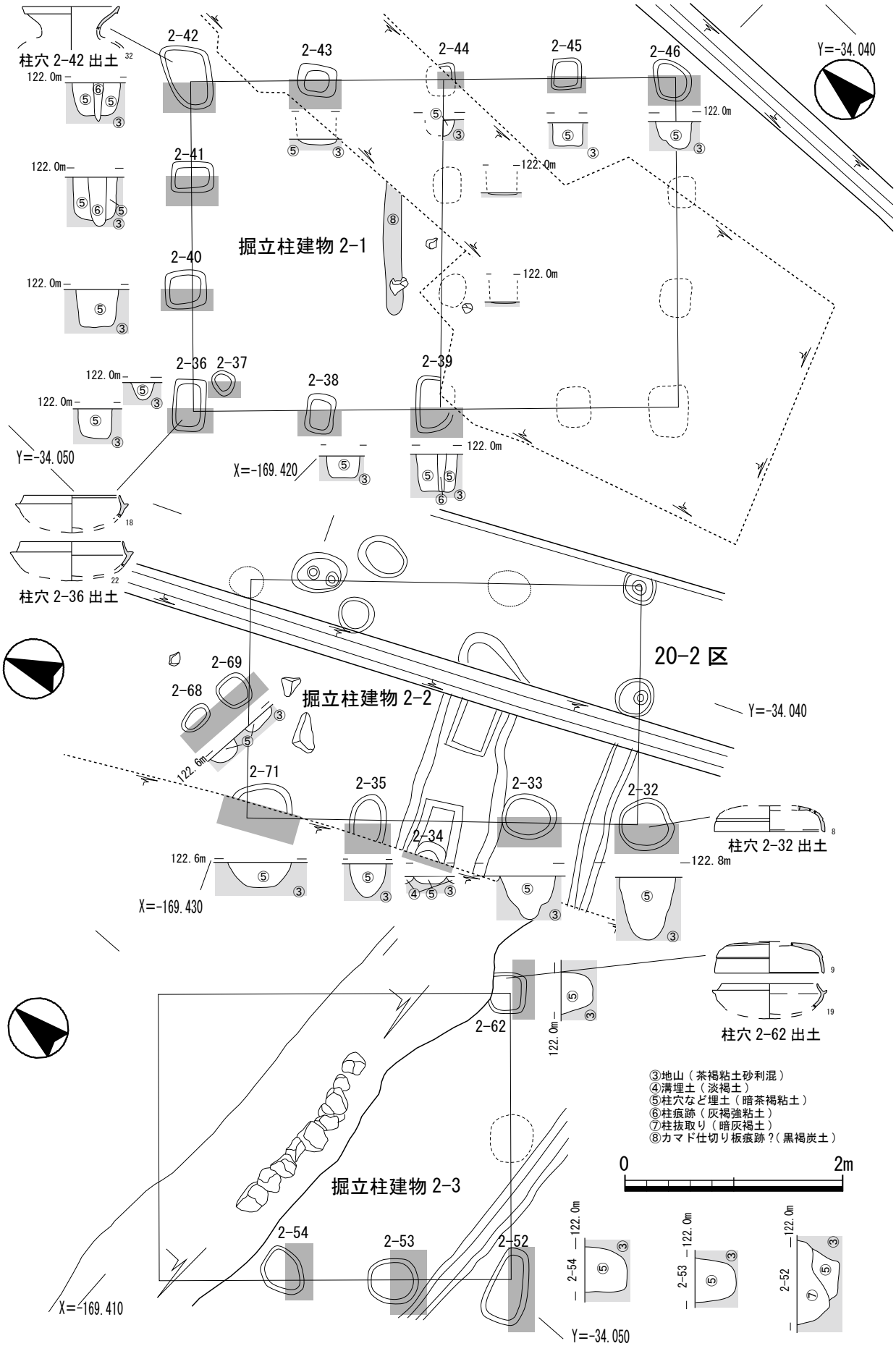

柱穴 2-42 出土
2-42
2-43
2-44
2-45
2-46
Y=-34.040
122.0m
2-41
掘立柱建物 2-1
2-40
2-36
2-37
2-38
2-39
Y=-34.050
X=-169.420
柱穴 2-36 出土
20-2 区
2-69
2-68
掘立柱建物 2-2
122.6m
2-71
2-35
2-33
2-32
2-34
柱穴 2-32 出土
122.8m
X=-169.430
2-62
柱穴 2-62 出土
③地山（茶褐粘土砂利混）
④溝埋土（淡褐土）
⑤柱穴など埋土（暗茶褐粘土）
⑥柱痕跡（灰褐強粘土）
⑦柱抜取り（暗灰褐土）
⑧カマド仕切り板痕跡？（黒褐炭土）
0
2m
掘立柱建物 2-3
2-54
2-53
2-52
X=-169.410
Y=-34.050

図11　２区掘立柱建物

ら、竪穴住居２－３が竪穴住居２－２に建て替えられたと考える。カマドは基底部の赤変部のみで、その上面構造は不明である。粘土塊がU字形にみられたが、中央は木の根によってかく乱されている。したがって、カマドの寸法や構造などは分からない。

この二つの住居も四隅に同規模の柱穴を伴い、やはり６世紀後半の須恵器・土師器片が発見された。

掘立柱建物２－１は調査区の北よりで発見された３×４間の建物である。長辺5.4ｍ、短辺3.8ｍを測る。軸線は北東から南西に向いており、竪穴住居の軸線と共通する。上面から古墳時代後期の須恵器片が発見された。柱穴は一辺0.6ｍ程度の方形で、顕著な抜き取り跡がみられず、一部に柱痕跡が確認された。住居内の中央で帯状の炭痕跡がみつかった。カマドの仕切り板痕跡かもしれない。北東と北西の妻柱の埋め土には須恵器杯身片・土師器壺片などの土器が混入していた。

掘立柱建物２－２は掘立柱建物２－１の南東で発見された２×３間の建物である。長辺4.2ｍ、短辺3.2ｍを測る。掘立柱建物２－１よりやや南北に軸線を振るものの同時期と思われる。南東の妻柱は平成20年度調査の２区で確認されている。南西の妻柱埋め土には須恵器杯蓋片が混入していた。

掘立柱建物２－３は掘立柱建物２－１の北西で発見された２×３間以上の建物である。短辺約2.8ｍを測る。北側は水田の段差で地山が削られている。南東妻柱埋め土に須恵器蓋杯片があった。

掘立柱建物２－４は２区のほぼ中央で発見された。柱穴の痕跡のみが残り、掘立柱建物になるかどうかは判然としない。上面は条里水田造営時の削平で失われ、遺物も残されていなかった。

東西溝群が調査区の北端、中央、南端などで発見されている。いずれも、１区同様に水田床土が0.1ｍ程度と薄い地域で、耕作痕跡と推定する。牛馬耕による鋤溝だろうか。同様に、地山削平の激しい地域には地山に含まれる礫を抜き取った跡と思われる不定形土坑が多数確認できた。

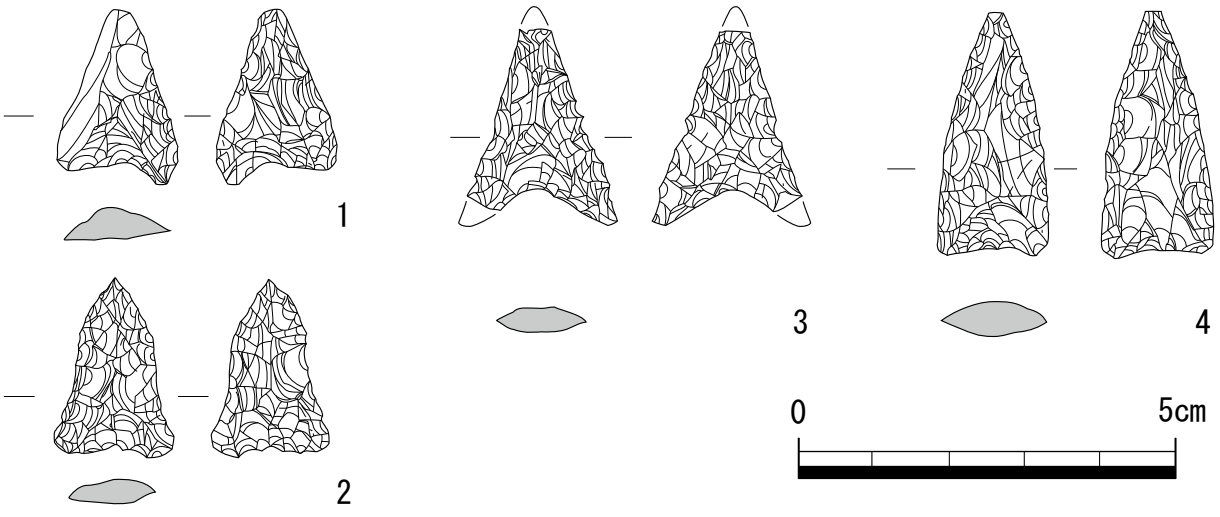


図12　打製石器

３節　出土遺物

出土遺物にはサヌカイト製打製石鏃、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器などがある(図12～14・図版16～18)。

サヌカイト製打製石鏃は４点あり､最大のものは長さ3.4㎝､最大幅1.4㎝厚さ0.4㎝を測る(４)。自然面は残さず、縦長の剥片を利用し、両辺を規則的に打ち欠き、形を整える。基部はやや凹形にする。最小のものは長さ2.4㎝、最大幅1.7㎝厚さ0.5㎝を測る(１)。自然面はなく、縦長の剥片を利用し、片面の一辺のみ打ち欠き形を整える。もう片面はほとんど加工がない。基部はやや凹形にする。黒褐色であまり風化しない。弥生時代まで降る可能性がある。その他、基部が凹基式のものは頂部が欠損し、現存長2.3㎝、最大幅2.0㎝を測る(３)。

古墳時代後期の土器には須恵器・土師器があり、概して須恵器が目立つ。須恵器には蓋杯・高杯・𤭯・壺・甕があり、土師器には甕・壺・高杯がある。

杯身は口径11.6～15.4㎝､高さは４㎝前後を測る。小片から復元したものは口径が明瞭でなく、口径のばらつきが大きくなってしまった。焼けひずみなど、いびつな製品が多かったのかもしれない。内面に径約5㎝の粘土円盤の痕跡が残るものがある（17)。立ち上がりは緩やかに内傾し、先端を丸く仕上げる。外面は丁寧にヘラ削りするものと（14・15・17・23)、簡略気味のものがある（16)。

杯蓋は口径12.8～17.1㎝、高さ１㎝前後を測る。杯蓋も、杯身同様に焼けひずみによる口径のばらつきが認められる。口縁部内面に沈線による段をつけるもの（５～９・11・12)、丸く仕上げるものがある（10・13)。外面は丁寧にヘラ削りし、天井部と口縁部の間に段をつける。

竪穴住居２－１からは埋め土上層を中心に杯身４点、杯蓋３点が発見された。いずれも破砕していた(図10)。

高杯は脚部の破片で、底径12.8㎝を測る（30)。脚端部は丸く仕上げ、すかし穴を施す。

𤭯は球形の体部にすぼまった頸部基部をもつ小片である（26・28)。

壺は口縁部を折り返して肥大化させるものと（27)、内側上方に屈曲させるものがある（25)。後者は外面を粗くカキ目仕上げする｡壺蓋と思われる薄手で乳頭状つまみをもつものがある(24)。口径・器高は分からない。

土師器甕は口縁部が短く、強く屈曲させ、口縁端部を丸くつまみあげる。いずれも、外面に刷毛目が残る(31・33～36)。外面が煤けるものもある。甕の把手はへん平で､上方に湾曲する(31・36・37)。

斜行溝２－１と竪穴住居２－１の埋め土から土師器壺片が出土し、接合した(34)。口縁部を緩やかに屈曲させ、端部外面に面をつくりだす(図10)。

竪穴住居２－２の埋め土上面から土師器高杯がみつかった(図９)。小片に破砕しており、口径や底径、高さなどは明瞭でない。口縁部は強く外反し、端部を丸く作りだす。脚端部は手づくね

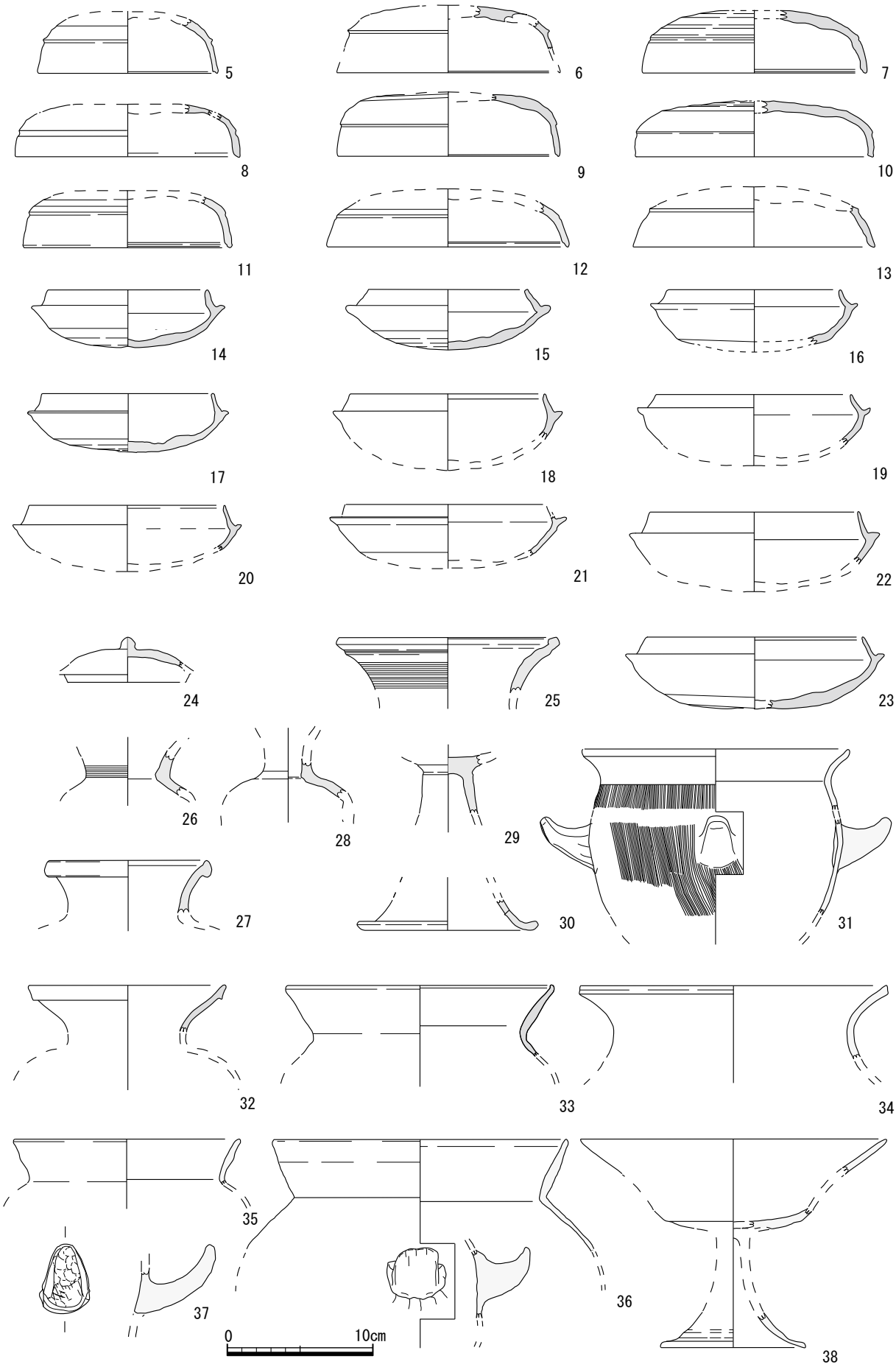


図13　古墳時代後期の土器

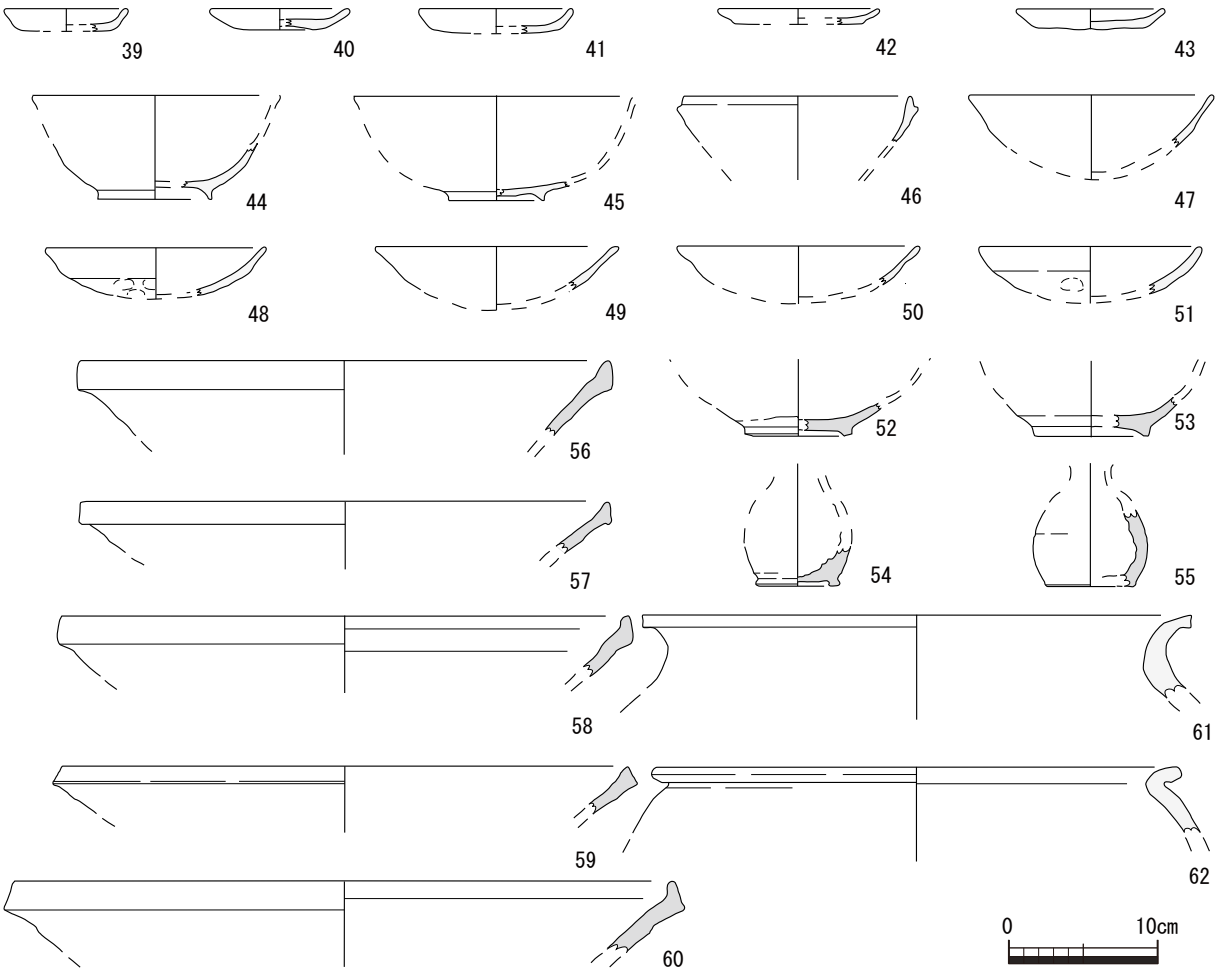


図14　古代・中世の土器

挿図番号	図版番号	実測番号	調査区	地区	遺構	器種
1	17	48	1	D6-15-1o-1b	暗褐土	打製石鏃
2	17	49	2	D6-15-1n-１j	竪穴住居2-2上層	打製石鏃
3	17	50	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	打製石鏃
4	17	51	1	D6-15-1n-1c	暗褐土	打製石鏃
5	17	32	1	D6-15-1n-1e	暗褐土	須恵器杯蓋
6	17	57	2	D6-15-1n-１j	竪穴住居2-2上層	須恵器杯蓋
7	16	1	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	須恵器杯蓋
8	16	62	2	D6-15-1o-１c	掘立柱建物2-2穴2-32	須恵器杯蓋
9	16	66	2	D6-15-1o-１a	掘立柱建物2-3穴2-62	須恵器杯蓋
10	16	2	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	須恵器杯蓋
11	17	34	2	D6-15-1o-1a	暗褐土	須恵器杯蓋
12	17	35	2	D6-15-1o-1b	暗褐土	須恵器杯蓋
13	16	52	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	須恵器杯蓋
14	16	5	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	須恵器杯身
15	16	3	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	須恵器杯身
16	16	4	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	須恵器杯身
17	17	30	2	D6-15-1n-1j	暗褐土	須恵器杯身
18	16	63	2	D6-15-1o-１b	掘立柱建物2-1穴2-36	須恵器杯身
19	16	67	2	D6-15-1o-１a	掘立柱建物2-3穴2-62	須恵器杯身
20	17	58	2	D6-15-1n-１j	竪穴住居2-2上層	須恵器杯身
21	17	36	1	D6-15-1n-1f	暗褐土	須恵器杯身
22	16	64	2	D6-15-1o-１b	掘立柱建物2-1穴2-36	須恵器杯身
23	16	53	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	須恵器杯身
24	17	31	2	D6-15-1o-1b	暗褐土	須恵器壺蓋
25	17	43	1	D6-15-1n-１f	暗褐土	須恵器壺
26	17	41	2	D6-15-1n-１j	暗褐土	須恵器ハソウ
27	17	42	1	D6-15-1n-１f	暗褐土	須恵器壺
28	17	40	1	D6-15-1n-１b	暗褐土	須恵器ハソウ
29	17	39	2	D6-15-1n-1j	暗褐土	須恵器高杯
30	17	45	2	D6-15-1o-1b	暗褐土	須恵器高杯
31	17	60	2	D6-15-1n-１j	竪穴住居2-2上層	土師器甕
32	16	65	2	D6-15-1o-１b	掘立柱建物2-1穴2-42	土師器壺
33	16	55	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	土師器甕
34	16	56	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	土師器甕
35	16	54	2	D6-15-1o-1h	竪穴住居2-1上層	土師器甕
36	17	59	2	D6-15-1n-１j	竪穴住居2-2上層	土師器甕
37	17	47	2	D6-15-1n-1j	暗褐土	土師器甕把手
38	17	61	2	D6-15-1n-１j	竪穴住居2-2上層	土師器高杯
39	18	6	1	D6-15-1n-1ｆ	暗褐土	土師質土器皿
40	18	9	2	D6-15-1o-１e	暗褐土	土師質土器皿
41	18	7	2	D6-15-1n-1ｊ	暗褐土	土師質土器皿
42	18	8	1	D6-15-1n-1ｃ	溝１－２３	土師質土器皿
43	18	10	1	D6-15-1n-1b	暗褐土	土師質土器皿
44	18	18	1	D6-15-1n-1f	暗褐土	黒色土器椀
45	18	19	2	D6-15-1o-1d	暗褐土	黒色土器椀
46	18	20	1	D6-15-1n-1e	暗褐土	瓦質土器鉢
47	18	11	2	D6-15-1o-1e	暗褐土	瓦器椀
48	18	15	1	D6-15-1n-1b	暗褐土	瓦器椀
49	18	12	1	D6-15-1n-1b	溝１－18	瓦器椀
50	18	13	2	D6-15-1n-1ｊ	暗褐土	瓦器椀
51	18	14	2	D6-15-1o-1e	暗褐土	瓦器椀
52	18	26	2	D6-15-1o-1b	暗褐土	闇南沿海窯系白磁椀
53	18	24	1	D6-15-1n-1b	暗褐土	東播系山茶碗
54	18	37	1	D6-15-1n-1c	暗褐土	須恵器小壷
55	18	38	2	D6-15-1o-１h	暗褐土	須恵器小壷
56	18	25	2	D6-15-1n-1j	暗褐土	東播系すり鉢
57	18	21	2	D6-15-1o-1h	暗褐土	東播系すり鉢
58	18	16	1	D6-15-1n-1f	暗褐土	東播系すり鉢
59	18	22	2	D6-15-1o-1h	暗褐土	東播系すり鉢
60	18	23	2	D6-15-1n-1j	暗褐土	瓦質すり鉢
61	18	28	1	D6-15-1n-1b	暗褐土	瓦質土器甕
62	18	46	1	D6-15-1n-1f	暗褐土	土師器甕
a	18	17	1	D6-15-1n-1f	暗褐土	黒色土器椀
b	17	33	1	D6-15-1n-1f	暗褐土	須恵器杯蓋
c	17	44	2	D6-15-1o-1b	暗褐土	須恵器高杯

図15　実測遺物対照表

で形成され、端部は丸い(38)。

平安時代の土器には黒色土器・須恵器がある(図14　図版18上)。出土量はごくわずかである。黒色土器は高台径　6.0㎝と5.2㎝のものがあり、内面のみ炭素を付着させる、いわゆる「内黒」である (44・45)。

須恵器小壺は底部に高台をつけるものと、糸きり底のままのものがある(54・55)。前者は底径4.0㎝、後者は4.6㎝を測る。陶邑産だろう。

中世の土器には土師質土器・瓦質土器・東播系陶器・中国製磁器がある(図14　図版18)。小片が多く、細部の特徴を欠くが、いずれも南北朝期頃と考える。また、中国製磁器の出土は居住者の社会的身分を復元する上で重視できる。

土師質土器には皿(39～43)、小鉢(46)、甕(62)がある。皿は直径6.4～7.7㎝、口縁端部のみ緩やかに立ち上げ、器高１㎝程度に仕上げる。すべて小型、赤褐色である。地元で焼かれたものだろう。

小鉢は口縁部の小片で径約12㎝を測る(46)。外面に蓋との合わせ口の段がある。乳白色で緻密な胎土である。

羽釜は口縁部の小片で、肩部を内傾させ、端部を強く屈曲させる(62)。暗赤褐色で胎土は粗く、砂礫を多数含む。口径は28㎝程度と推定する。

瓦質土器には碗 (47・48～51)・すり鉢(60)・甕(61)がある。瓦器椀は口径10㎝前後を測る。底部の残存するものはなかったが、内外面ともに暗紋のほとんど省略され、高台もない末期のものと考える。

瓦質土器のすり鉢は黒褐色で口縁部の小片である(60)。端部を丸く仕上げ、上方にやや屈曲させる。直径は不詳だが大型になるだろう。

瓦質土器甕は口縁部の小片で、短い口縁部を強く屈曲させ、端部外面に面をつくりだす(61)。

東播系陶器にはすり鉢(56～59)と椀(53)がある。すり鉢は小片ばかりで、口縁部は概して薄手で丸く仕上げる末期的様相が多い。体部の小片は内外面共丁寧にナデ仕上げし、粘土ひもの痕跡をよく残す。椀は内外面ともに乳白色で、底部を糸きりした後、丁寧にナデ仕上げする。内面にはわずかに灰釉が付着する (53)。口径・器高は不明である。13世紀前半の神出・魚住窯系椀とされる。

中国製磁器に白磁(52)と青磁(図版18下)がある。白磁は底部の小片で、浅く削り出して高台を形成する。胎土は灰白色で、釉薬は乳白色である。12世紀後半から末の福建省閩南(びんなん)沿岸窯系白磁碗で、わが国にもたらされた白磁の最終段階とされる。

青磁は碗のみである。すべて小片で、緑白色の釉が厚くかかり、福建省同安窯系のものはなく、浙江省龍泉窯産と考える。外面に凌ぎ蓮弁を刻む13世紀中頃から後半のものもある。中国製磁器には製作年代にばらつきが見られ、いずれも南北朝期まで伝世して廃棄されたものだろう。

第Ⅲ章　まとめ

１節　今回調査の成果

今回の調査では芹生谷遺跡の北側で南北約170ｍにわたって、2100㎡の調査を行った。その結果、以下の遺構・遺物が発見された。

もっとも古いものは、縄紋時代後期・弥生時代前～中期と思われる打製石鏃である。遺跡地周辺に縄紋時代の人々の定着があったかどうかは遺構が発見されておらず、判然としないが、狩猟活動の場として利用されていたことがうかがえる。

古墳時代前～中期の遺構・遺物は発見されなかった。古墳時代後期（６世紀後半）では、竪穴住居（竪穴建物）・掘立柱建物が発見された。調査区全域から該当期の須恵器・土師器片が発見されたことより、もともと集落は広域に存在したと考える。水田開発などの削平で遺構が失われ、遺物が散在したのだろう。

調査区から発見された須恵器はTK43段階にほぼ限られる。集落の存続期間は比較的短かったようだ。

発見された建物は竪穴住居と掘立柱建物がある。発見された竪穴住居は合計４棟で、２棟がほぼ同じ位置・規模で、建て替えられていた。建て替えられた竪穴住居も隅丸方形のほぼ同形で一辺約5.4ｍの大型である。

竪穴住居は、その埋土にTK43段階の須恵器蓋杯と土師器甕を伴った。また、その北壁内側中央には焼土痕跡があり、粘土塊が散在した。移動式のカマドでなく、造り付けカマドの残骸と推定する。

竪穴住居と掘立柱建物は軸線を北西から南東に向け、金山古墳の軸線とほぼ同じくする。つまり、芹生谷遺跡の集落は金山古墳造営段階のもので、集落の人達は古墳造営に関わった可能性がある。金山古墳は今回調査区の南約200ｍに位置する。

集落内で二種類の建物のどちらが主流だったかは分からない。近畿では、竪穴住居の終焉段階にあたり、伝統的建物が建設された背景には、その機能、あるいは住人の階層差かもしれない。

また、今回調査区の東約150ｍには石塚古墳群があり、小規模な石材による横穴式石室を主体部とする。調査された４基の造営時期は出土遺物からTK209段階で、その規模などから在地有力者の墓と考えられる。

今回調査で発見された遺物にTK209段階まで降るものがなく、TK43段階のものしかみられない。集落の消長からみて、芹生谷遺跡集落の人々がこの地で水田開発をして生産を高め、有力者を台頭させて石塚古墳群を造営したとは考えにくく、もしそう考えるなら、集落は近隣で移動を繰り返したとすべきだろう。

一方、金山古墳の小円丘主体部やその前庭からはTK209段階の須恵器が出土している。金山古墳は主体部の家形石棺が奈良県藤の木古墳と同質・相同でTK43段階に造営・完成し、TK209段

階まで追葬や祭祀の継承があったと考えられている。

古墳時代の集落は条里水田による土地改編で、著しく削平されていた。条里区割りの時期は明瞭でなく、表土の畦畔中には近世初頭の肥前陶器片が含まれることから、現在の景観は太閤検地以降の可能性もある。

調査区の北側で南北朝期の掘立柱建物が一棟発見された。調査区内からは広範囲に瓦器・土師質土器・中国製磁器などが発見されており、条里区割りに沿って、中世の住居が散在的にあったと思われる。

２節　芹生谷遺跡の竪穴住居（竪穴建物）について

大和や河内では縁辺部をのぞき、おおよそ５世紀後半には掘立柱建物を主流とした集落が普遍化する。ただし、竪穴住居がなくなるわけではなく、主柱穴が４本の隅丸方形の平面形で、北側にカマドを配するものが一般化し、５世紀をとおしてみられる。

府内では竪穴住居を中心とする集落が掘立柱建物を中心とする集落に変化する時期に、ばらつきがみられ、全国的にみれば先進的に移行するとされる。例えば、高石市大園遺跡集落では５世紀後半から７世紀にかけての100棟をこえる建物が確認されているが、すべて掘立柱建物である。このような掘立柱建物のみで構成される集落には堺市陶器南遺跡・辻之遺跡・小角田遺跡などがある。

集落の竪穴住居と掘立柱建物が、長期にわたって併設され、徐々に竪穴住居が淘汰される場合がある。また、竪穴住居から掘立柱建物へ斉一的に移行する場合がある。比較的斉一的に移行する集落でも、その移行時期にはばらつきがある。

大阪市山内遺跡は竪穴住居が６世紀前半を最後とし、以降８世紀まで掘立柱建物の集落が継続する。羽曳野市河原城遺跡は７世紀初頭まで竪穴住居のみの集落構成であったものが､それ以降､斉一的に掘立柱建物へと建て替えられる。

茨木市総持寺遺跡では７世紀前半までは竪穴住居が主体となる一角が調査されており、近接地で７世紀後半以降に掘立柱建物が主体となる一角が発見されている。同様の例は、貝塚市秦廃寺遺跡の集落にもみられ、７世紀前半までは竪穴住居が主体だったのに、８世紀になると掘立柱建物が主体となり、竪穴住居はなくなる。

いずれにせよ、飛鳥時代のうちに府内の集落遺跡は竪穴住居から掘立柱建物へと移行していったのだろう。これは、寺院や宮都建設による技術革新、文筆や机の普及など、外来文化の影響によるとされる。なるほど、出土する土器も平底化し、高台がつくなど、食文化を含めた生活の変革を看取することが出来る。平城京内や飛鳥古京に竪穴住居が営まれることがない所以である。

ところが、奈良市では春日山の数キロメートル東の水間や柳生で奈良時代の竪穴住居による集落が発見されているし、明日香村では奈良時代以降に再び竪穴住居が復活することが発掘調査で確かめられている。そうすると、国家の中心部では意図的に、伝統的竪穴住居を規制したとも考

えられる。竪穴住居が残存する地域はその規制から外れた地域と考えることもできる。

竪穴住居を伝統的建物と考える案に対し、集落内にごく少数の竪穴住居が残存する場合がある。例えば、松原市観音寺遺跡は平野部に位置する奈良時代集落で、掘立柱建物群に１棟だけ竪穴住居が残存する形態が確認された。発見された遺物より、竪穴住居は奈良時代初頭まで降る可能性がある。この竪穴住居について、調査者は住居ではなく、工房の可能性を指摘する。

同様の例が、藤井寺市はざみ山遺跡にもみられる。この遺跡も街道や古代寺院に近く、郡衙か渡来系氏族の集落と考えられている。集落は掘立柱建物を基本とするが、散在的に数棟の竪穴住居が発見されている。いずれも、７世紀前半から中ごろに位置づけられる。

近年、大規模に調査された第２京阪自動車道関連事業では、北河内地域の飛鳥・奈良時代の集落の実態を明らかにした。寝屋川市高宮遺跡・大尾遺跡・太秦遺跡・寝屋南遺跡では、やはり掘立柱建物を主体とする集落内に、ごく少数の竪穴住居が残存することがわかった。

枚方市禁野本町遺跡の場合も、掘立柱建物を主体とする集落からいくつかの竪穴住居が発見されている。そのうちの一つには鍛冶関連遺物が伴った。竪穴住居による鉄器製作が推測される事例である。和泉市寺田遺跡集落は５世紀代の集落で、竪穴住居と掘立柱建物が併存する。このうちいくつかの竪穴住居には、鍛冶関連遺物が残されていた。また、床面が焼けるなど、竪穴住居が鍛冶工房として機能していたことが明確にわかる例である。

陶邑窯跡群に近接する生産工房の集落は導入期をのぞけば、掘立柱建物を基本とする。これに対し、高槻市新池埴輪窯に関連する工房集落では竪穴住居と掘立柱建物が併存する。新池埴輪窯の操業は５世紀代に数回あり、６世紀前半の操業に対応する集落は発見されていない。５世紀代の埴輪窯に近接し、円筒埴輪製作のアトリエとされる超大型の竪穴住居が３棟発見されていることがよく知られる。

古墳と竪穴住居との関連を示唆する調査例も増加しつつある。羽曳野市駒ヶ谷で新発見された蔵塚古墳は６世紀後半の飛鳥戸氏に関わる墳墓と注目されているが、その脇から１棟の竪穴住居が発見された(図15右)。住居の埋土には同時期の土器とともに円筒埴輪片が発見され、古墳造営に関わる建物と推定される。

また、河南町神山丑神遺跡でも６世紀後半の群集墳の周辺から、同時期の人達が居住した掘立柱建物を含む居住地があり、４棟の竪穴住居が発見されている(図15左)。古墳と建物の関係は明瞭ではないが、遺跡から発見された遺物を見る限り、古墳造営以前・以後の時期のものはなく、これも古墳造営に伴う造墓集団の造営キャンプではないだろうか。

芹生谷遺跡に近接する金山古墳の造営主体がどのような人たちだったのかは推測の域を出ない。しかし、６世紀代の河内に限り、郡ごとに徴発されたという「鑊丁(くわよぼろ)」と呼ばれる人達が注目される。門脇禎二氏によると「鑊丁」とは河内平野北・中部の大規模灌漑・土木による開拓と、それに伴う多くの屯倉設置が、このような徴発を必要とした、という。直木孝次郎氏も優れた鉄グワを持つ役夫を意味する言葉として河内の「鑊丁」に注目する。また、彼らを支

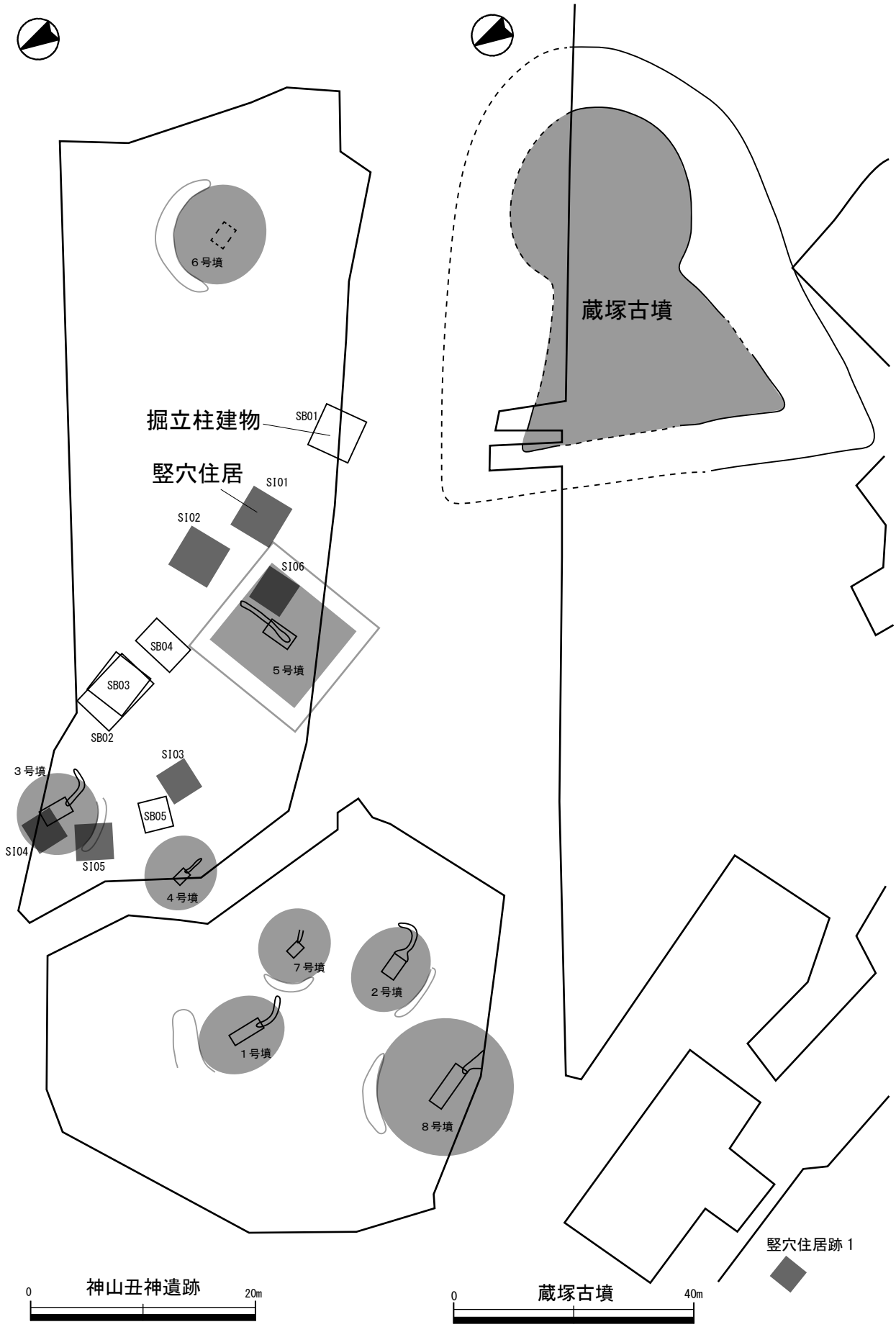

６号墳
掘立柱建物
SB01
竪穴住居
SI01
SI02
SI06
５号墳
SB04
SB03
SB02
SI03
３号墳
SB05
SI04
SI05
４号墳
７号墳
２号墳
１号墳
８号墳
神山丑神遺跡
0
20m
蔵塚古墳
蔵塚古墳
0
40m
竪穴住居跡１

図16　古墳と竪穴住居

配する豪族の所有する農具を一時的に貸与されて屯倉の労役に従った、と推定している。

このような人達が５世紀にさかのぼる巨大古墳造営や大溝や堤の造営の主体として遡るかはわからない。少なくとも、６世紀代には河内に限り、「鑁丁」役夫の仕組みが整い、古墳造営や水田整備に人を集めることができたようだ。

古墳造営に住居が伴うことは『日本書紀』に記述がある。舒明天皇即位前紀（628）は、蘇我馬子が没したあと、桃原での造墓を記す。この時、境部摩理勢は墓を造るべく墓所に宿っていたが、仲たがいをおこして、墓所の「廬(いおり)」を打ち壊して、蘇我の私有地に退去した、という。造墓に際し、各地から一族の役夫などが集まって墓所に宿って建設したという事例である。「廬」が竪穴住居かどうかはわからないが、有力豪族による大規模な造墓であるから、多くの部民が徴用されたと推測できる。

同様の事例は皇極元年条(642)にもある。蘇我蝦夷と入鹿は国中の百八十の部曲(豪族私有民)を召し使って、今来に寿墓を建設した、という。その中には上宮王家の部民も含まれ、太子の娘は大いに憤慨した、と記されている。蝦夷・入鹿の大陵と小陵は所在が確定しないが、おおくの部民が集められ、造墓したようだ。

先の高槻市新池遺跡工人集落の上層遺構について、『日本書紀』欽明天皇二三年条（562）にある「摂津国三島郡の埴廬」に比定する案がある。新池遺跡工人集落の竪穴住居はカマドの焼成面が何層かあり、粘土壁も補修されていることから、埴輪生産の機会にだけ居住されたと考えられている。このような竪穴住居が「廬」と呼ばれたのだろうか。

また、『続日本紀』聖武天皇天平一七年条（745）には美濃国で大地震があり、三日間揺れが続いたという。それで、櫓館、正倉、仏寺、堂塔、百姓の廬舎が崩壊した、と記す。崩壊した百姓の廬舎とは竪穴住居ではないだろうか。

『日本書紀』仁徳天皇六二年条（420頃）には天皇が奈良の都介野で猟をしたとき､山中に「廬」形のものを見いだし、それが地面を掘りくぼめて萱で覆屋をした貯蔵施設「氷室」であることを知る。この説話が５世紀に遡らないとしても､竪穴住居が「廬」と呼称・認識されていたようだ。

ひるがえって、芹生谷遺跡今回調査区の建物群はどうだろうか。集落の全貌はわからないものの、竪穴住居と掘立柱建物が併存し、金山古墳の造営とほぼ同時期の短期間のみの居住だったことがわかる。ただし、竪穴住居は建て替えが認められる。これは金山古墳が造営開始から完成まで一気に作業されたのではなく、農繁期などの作業中断があったためかもしれない。あるいは、ほぼ同じ場所に建て替えられていることから、台風などによる倒壊かもしれない。

ちょうど、『日本書紀』推古天皇七年（599）は農繁期の夏四月二七日に地震があり、舎屋がことごとく壊れたと記す。羽曳野市河原城遺跡の竪穴住居が斉一的に掘立柱建物に移行することと合わせ、南河内地域の地震災害と関連するのかもしれない。いずれにせよ、芹生谷遺跡の建物群が短期的に営まれた一般集落なのか､古墳造営などに関わる特殊な集落なのか､今後の調査によって見極めたい。

(引用文献)

大阪府教育委員会1975～1988『大園遺跡』Ⅱ～Ⅷ

大阪府教育委員会2007『陶器南遺跡』

堺市教育委員会1988『小角田遺跡』

堺市教育委員会1982『辻之遺跡現地説明会資料』

石田修・十河稔郁1983「堺市辻之遺跡の調査」『考古学ジャーナル』214　ニューサイエンス社

大阪市文化財協会1999『山内遺跡』Ⅱ

大阪府文化財センター2000・2002『河原城遺跡』Ⅰ・Ⅱ

大阪府文化財センター2004『総持寺遺跡』

大阪府教育委員会1997『秦廃寺・麻生中下代遺跡発掘調査概要』

奈良市教育委員会2007「水間の飛鳥・奈良時代の竪穴建物」『奈良市埋蔵文化財センター速報展示資料』33

大阪府文化財調査研究センター1998『観音寺遺跡』

大阪府教育委員会1982『はざみ山遺跡』Ⅸ

大阪府文化財センター2005『はざみ山遺跡』

大阪府文化財センター2004『高宮遺跡』

大阪府文化財センター2005『大尾遺跡』

大阪府文化財センター2006『太秦遺跡・太秦古墳群』Ⅱ

大阪府文化財センター2007『寝屋南遺跡・奥山遺跡』

大阪府教育委員会2013『禁野本町遺跡』

大阪府教育委員会2007『寺田遺跡』

高槻市教育委員会1993『新池』

森田克行1990「新池遺跡」『古墳時代の研究』2　雄山閣

大阪府文化財調査研究センター1998『蔵塚古墳』

大阪府教育委員会1992『神山丑神遺跡発掘調査概要』Ⅰ

合田幸美2011「古代の竪穴建物」『大阪文化財研究』39　大阪府文化財センター

門脇禎二1957「鑵丁」『日本歴史大辞典』河出書房出版

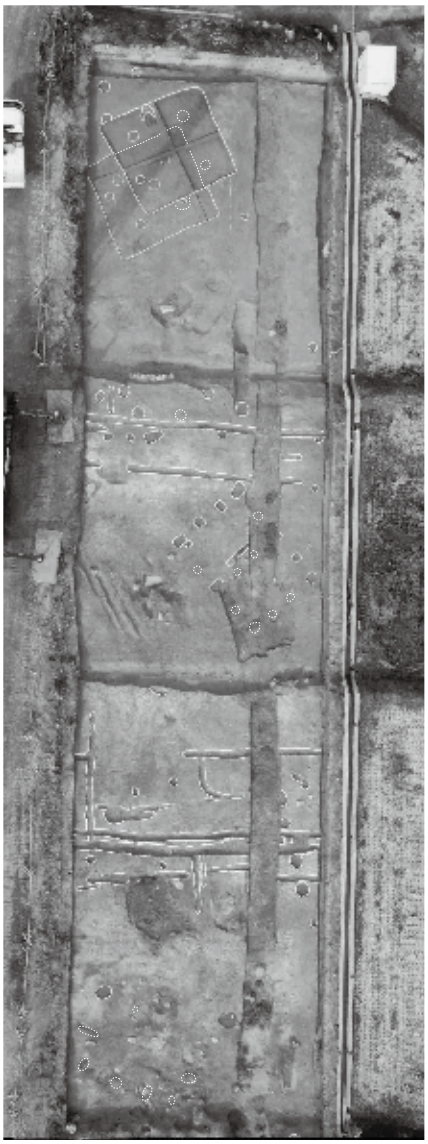
直木孝次郎1976「難波の屯倉」『古代国家の形成と展開』　大阪歴史学会編　吉川弘文館

図　　版

金山古墳と調査区周辺

図版1　全景

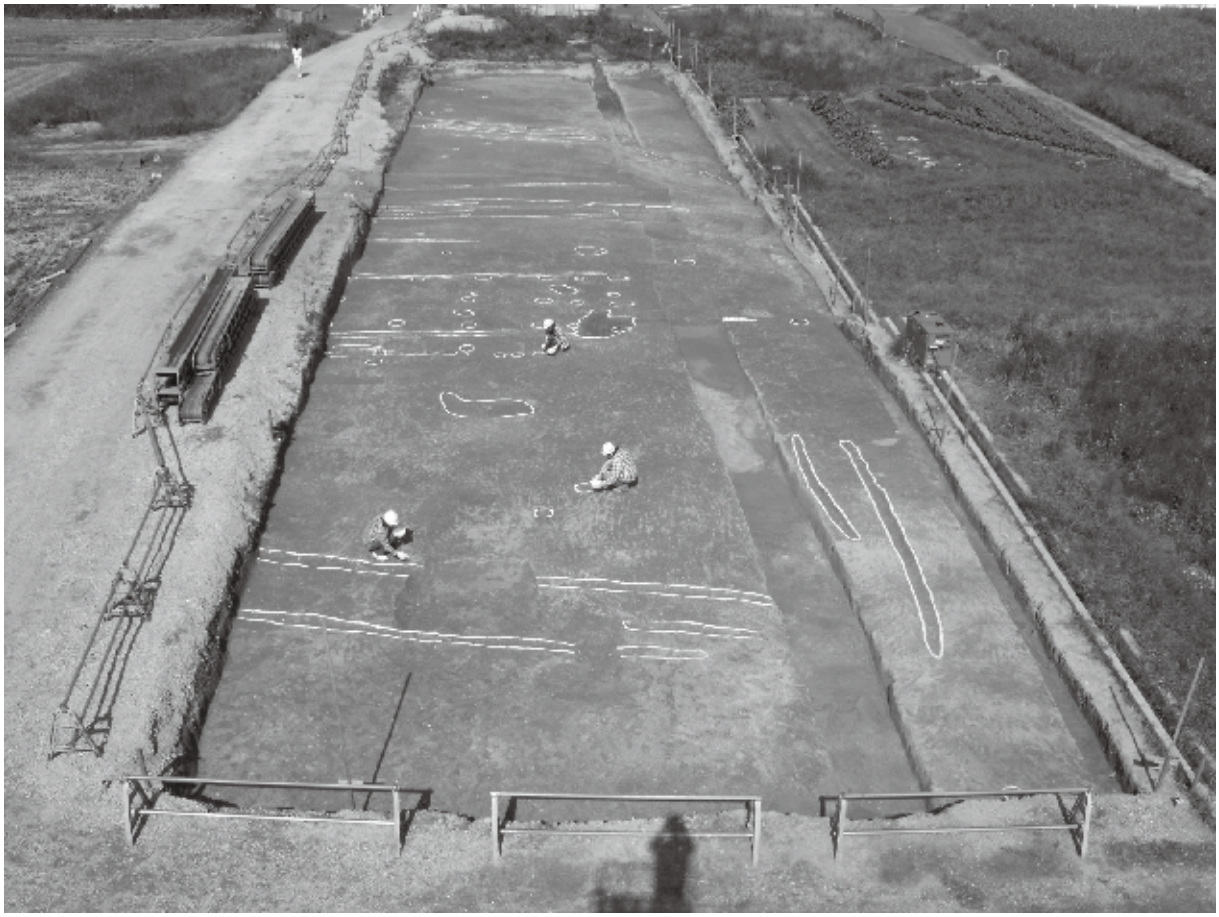
1区全景



2区南半全景

2区北半全景

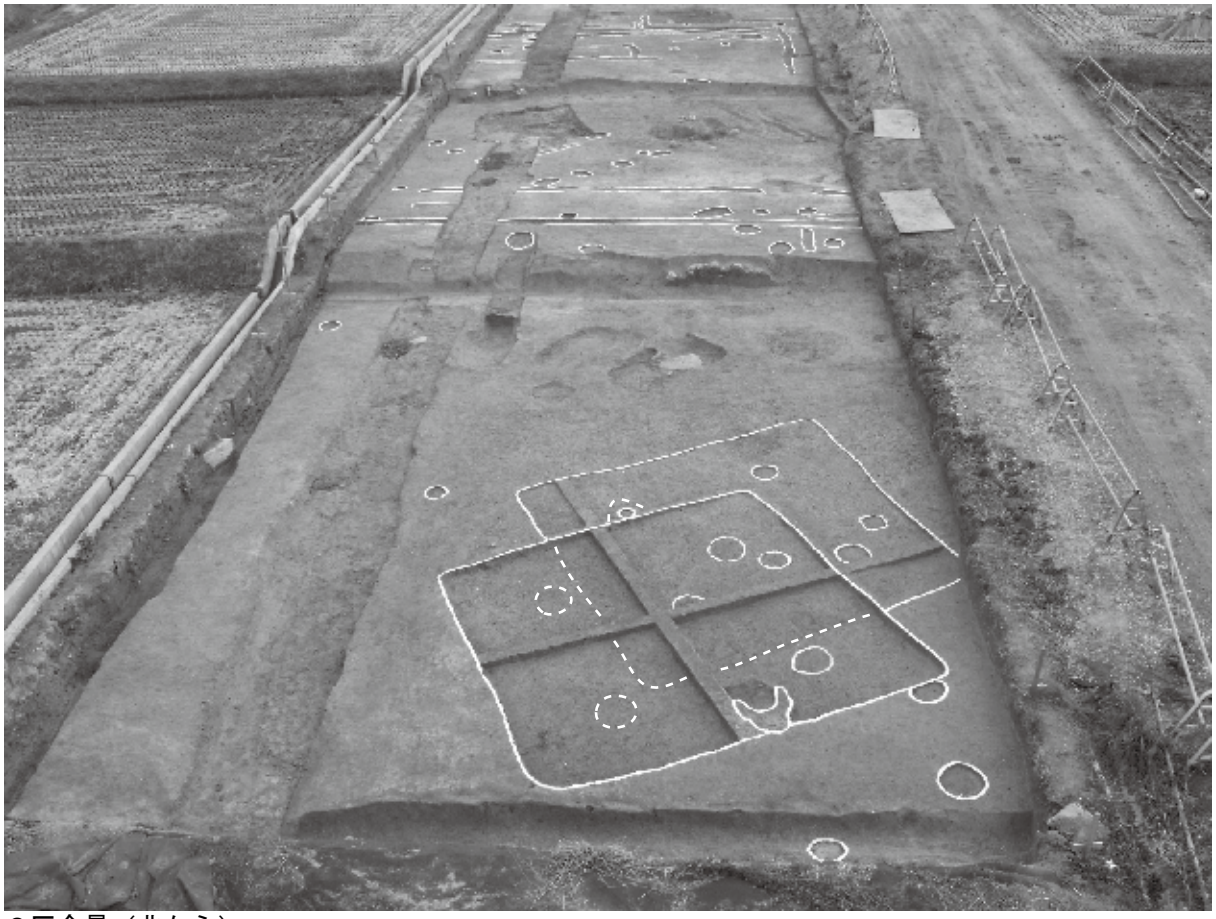
図版２　１区全景



１区全景（北から）

１区全景（南から）

図版３　２区全景

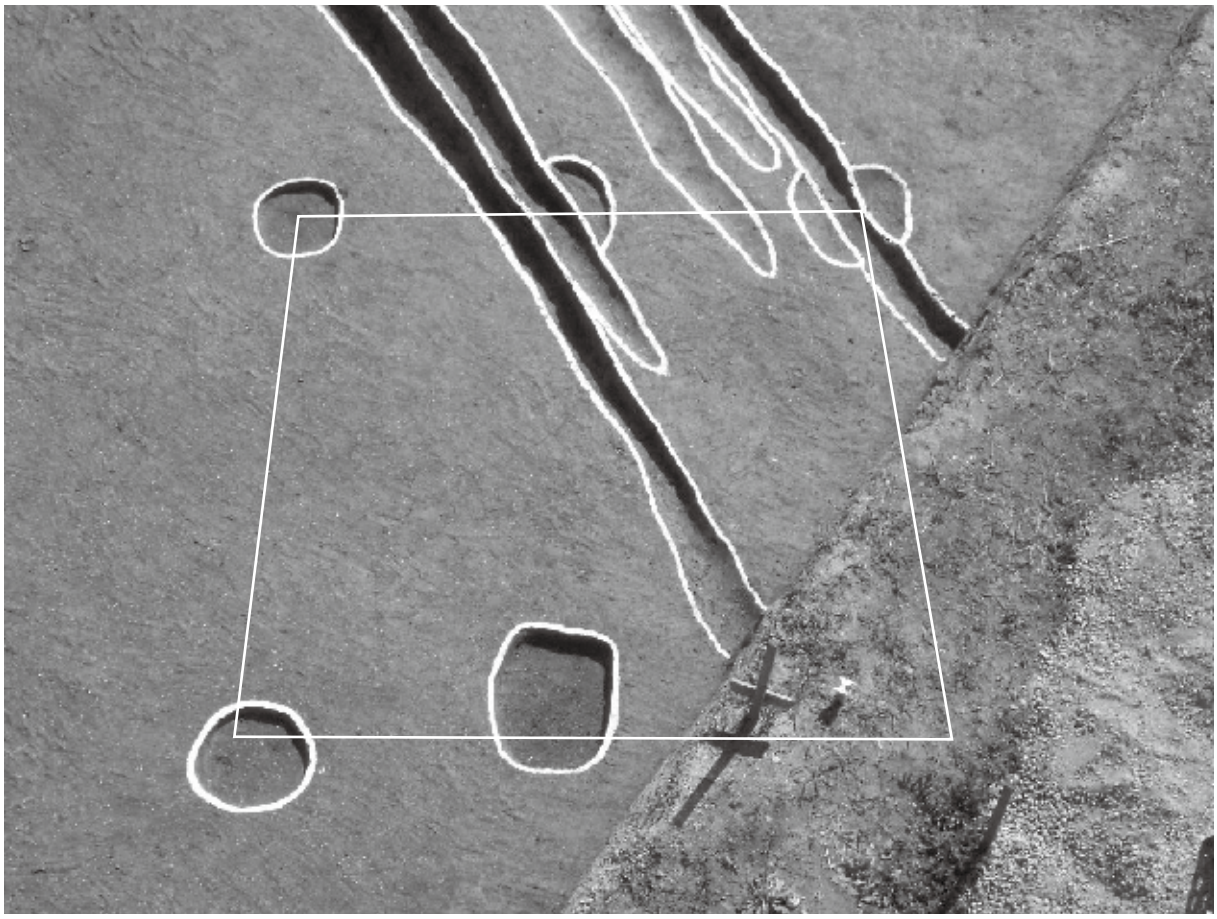


２区全景（北から）

２区全景（南から）

図版4　1区掘立柱建物1—1

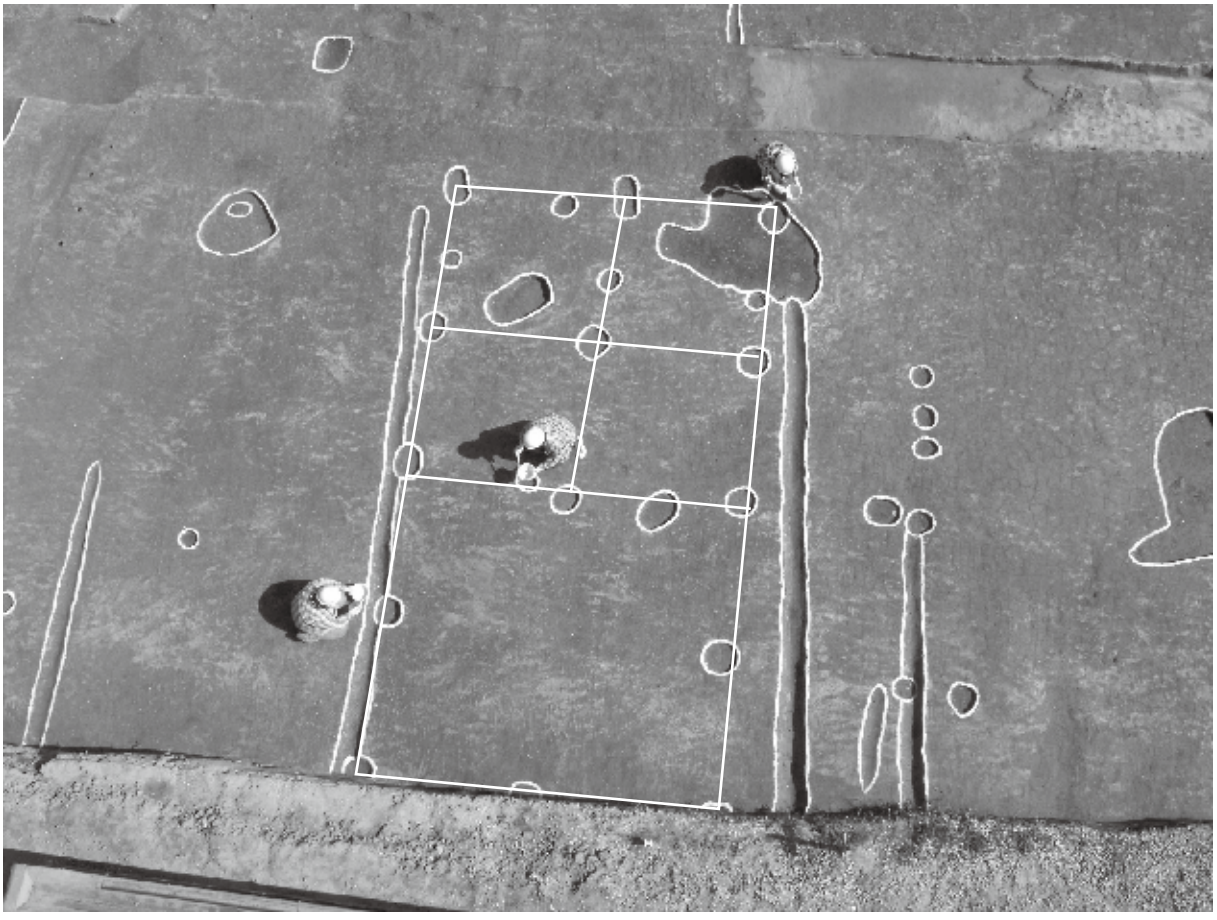
1区掘立柱建物 1-1 検出状況（北から）



1区掘立柱建物 1-1 検出状況（北西から）

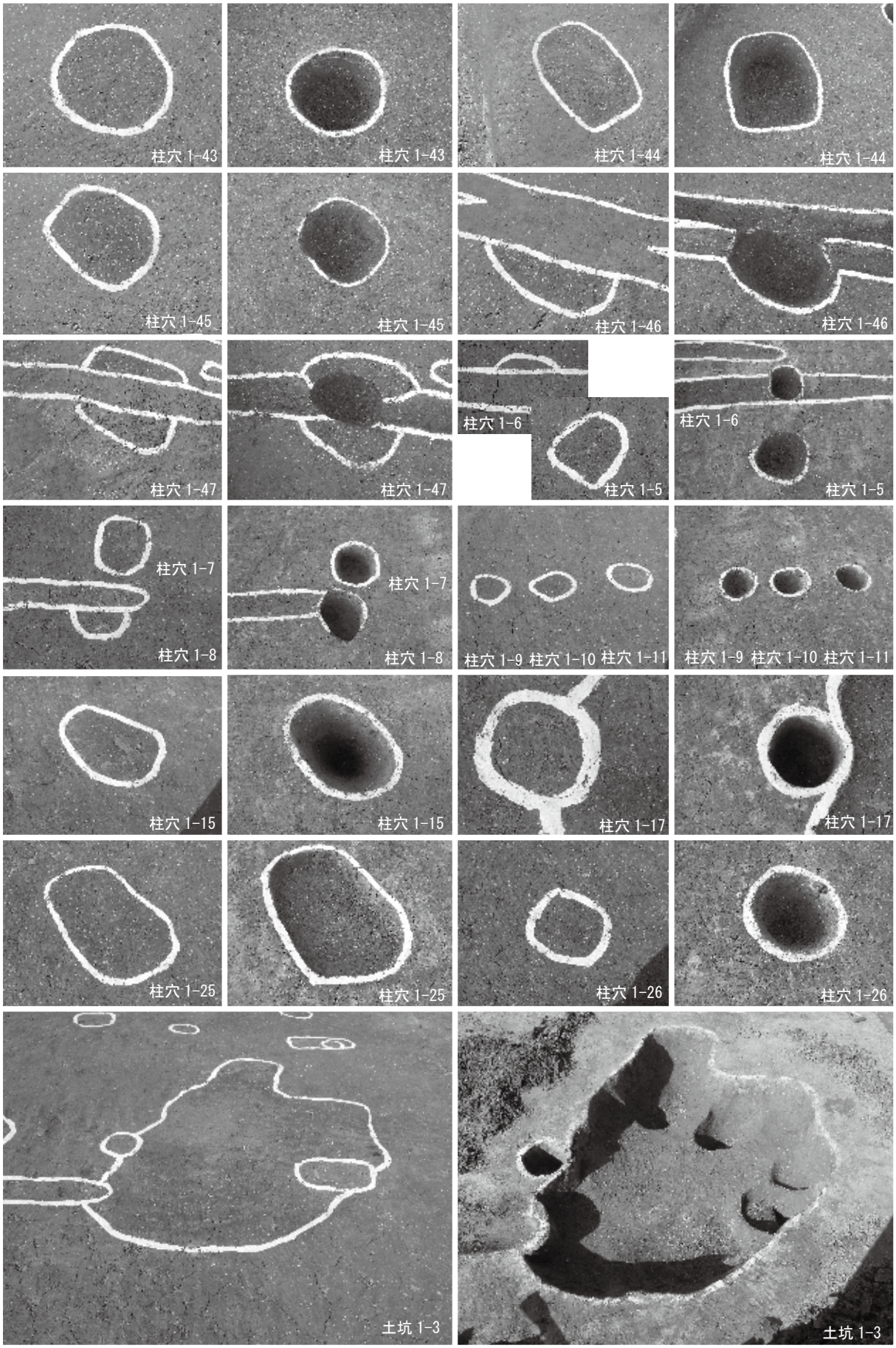
図版５　１区掘立柱建物１―２

１区掘立柱建物 1-2 検出状況（南から）



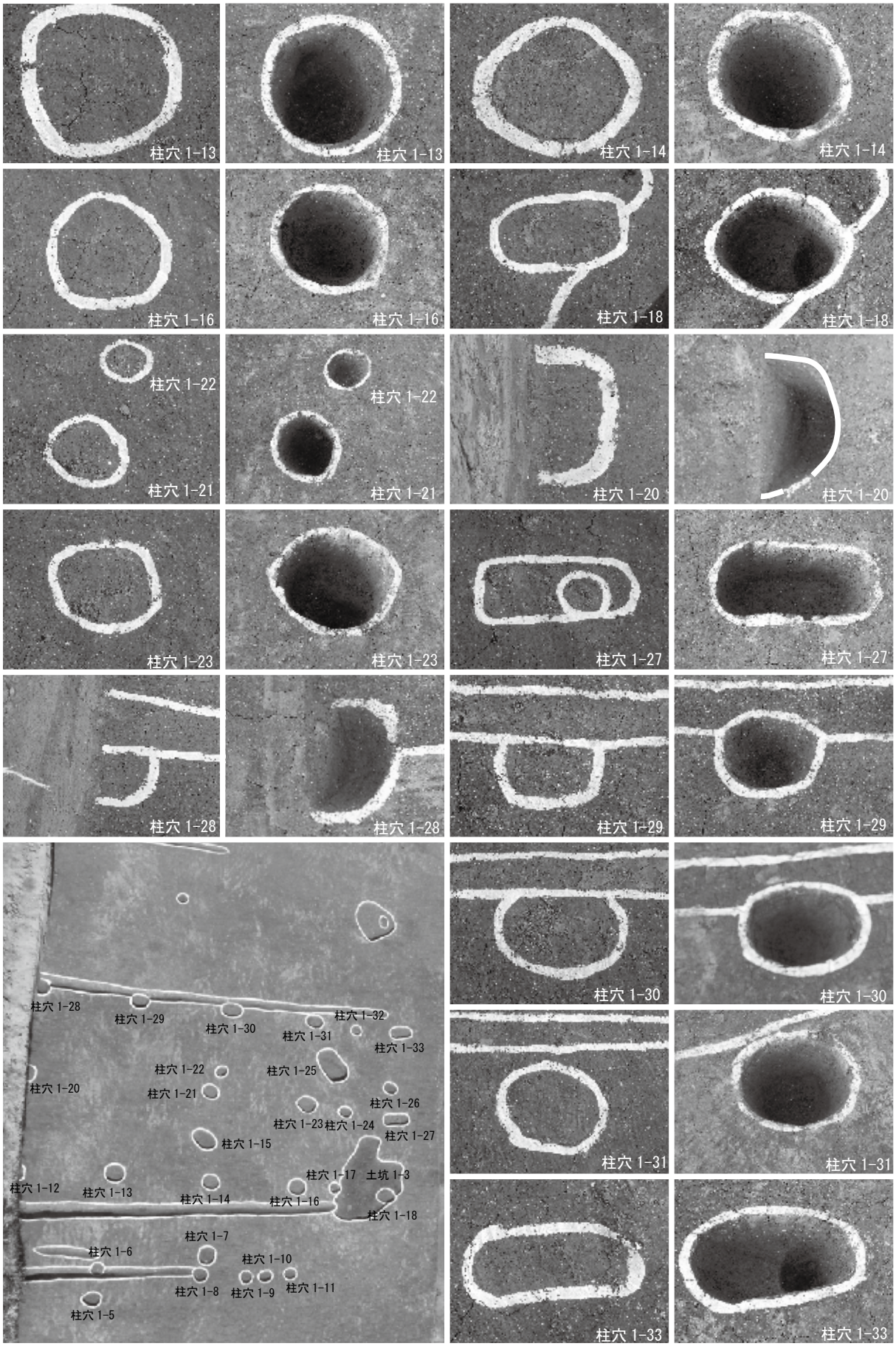
１区掘立柱建物 1-2 検出状況（西から）

図版６　１区掘立柱建物１―１柱穴・１―２柱穴



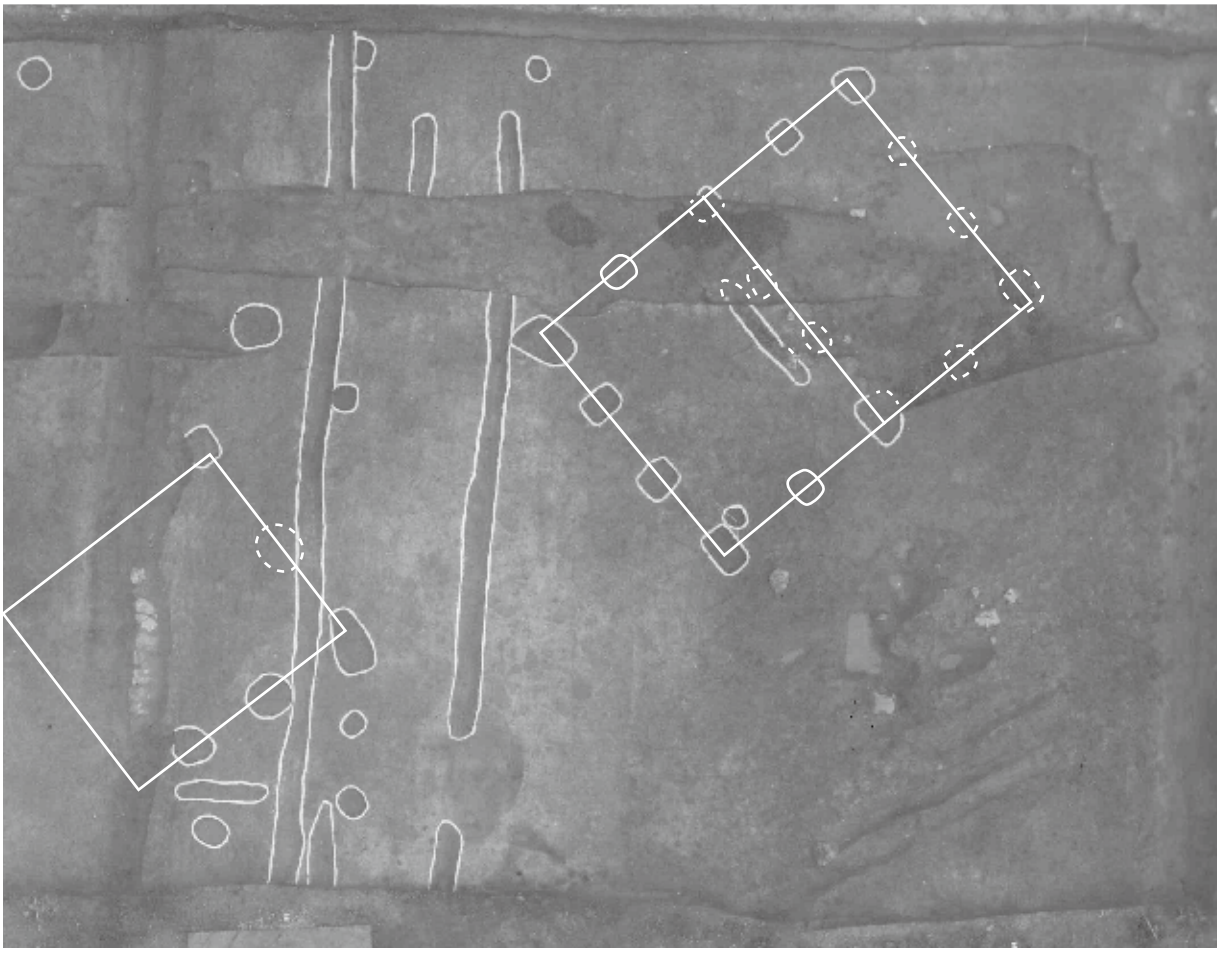
柱穴検出状況と完掘状況（すべて南から）

図版7　1区掘立柱建物1―2柱穴

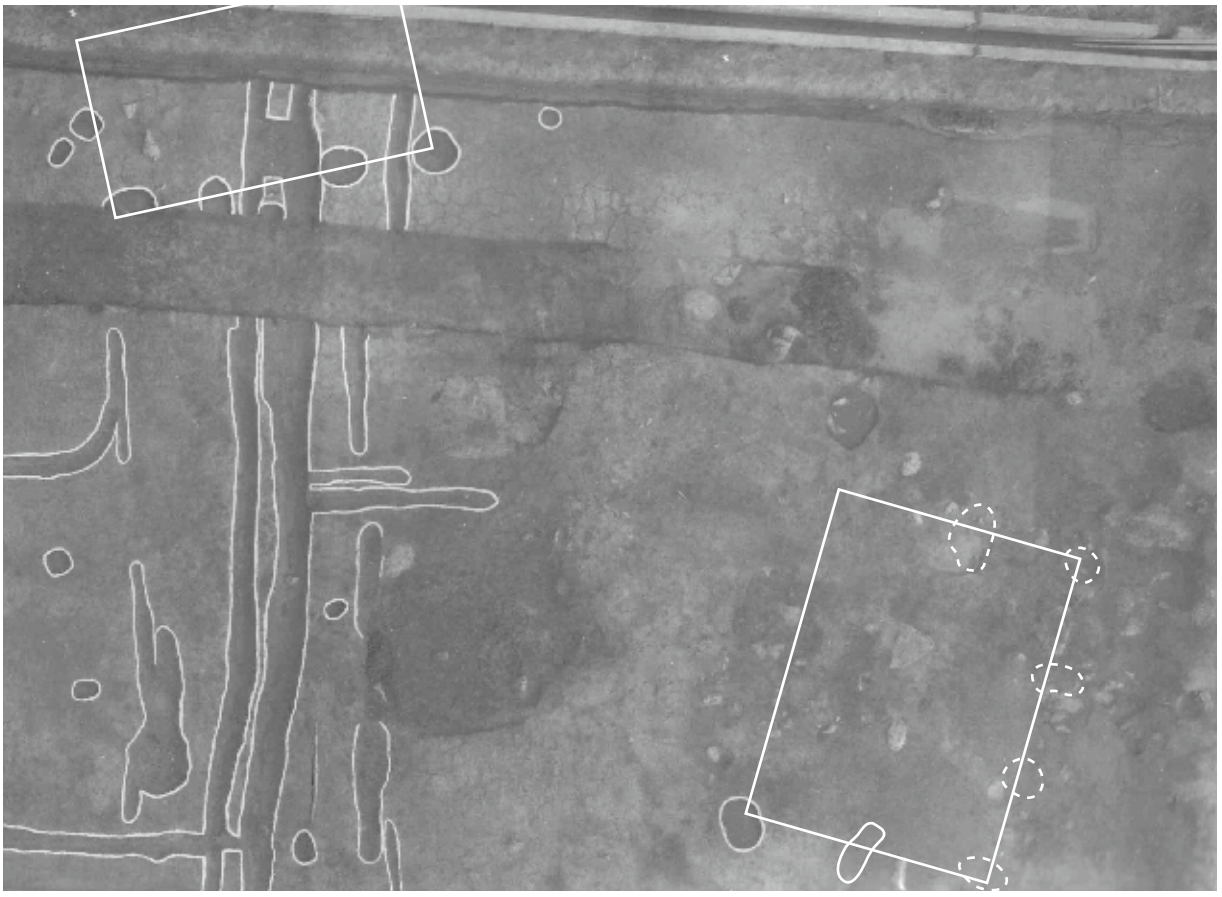


柱穴検出状況と完掘状況（すべて南から）

図版８　２区掘立柱建物

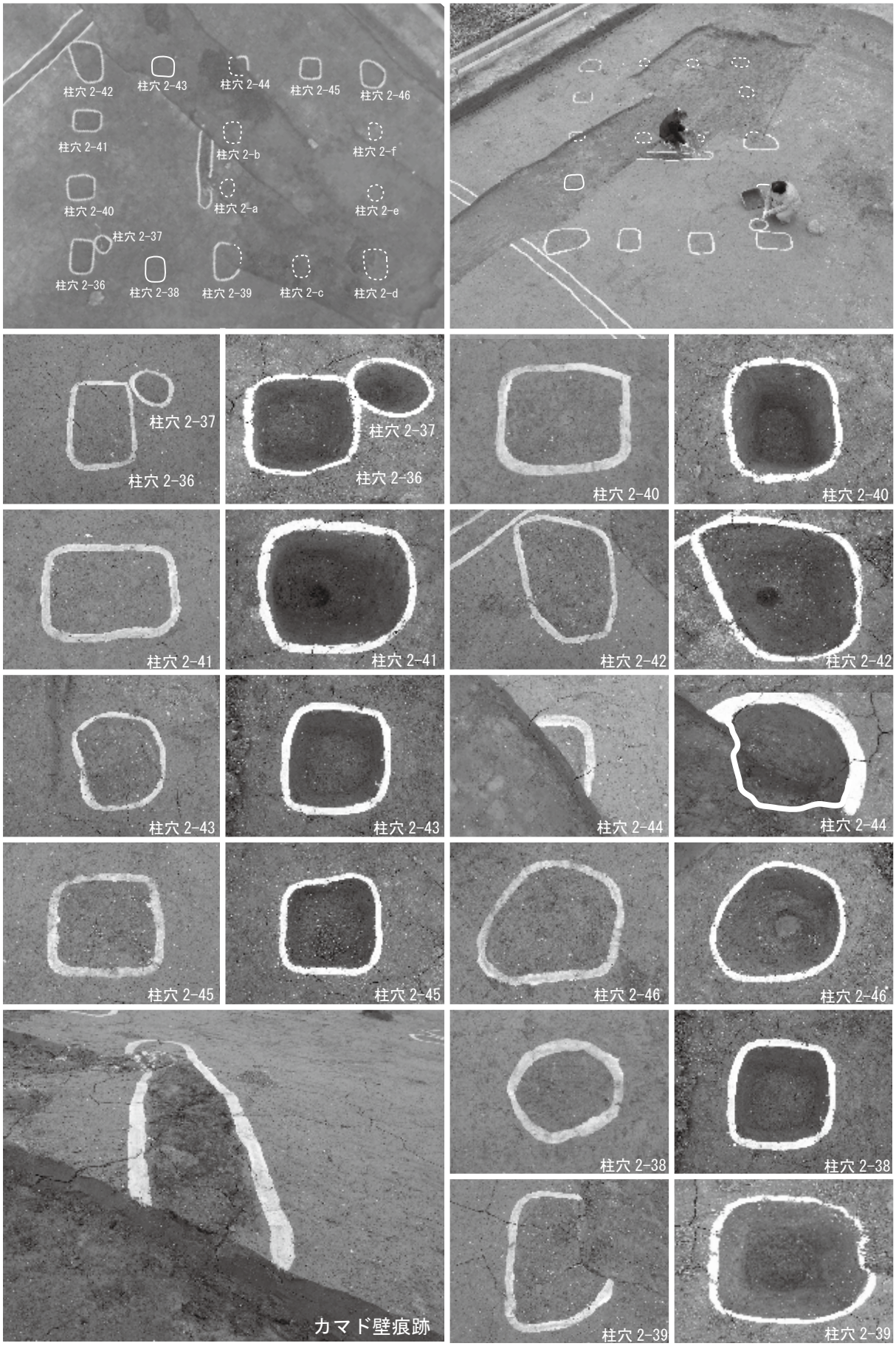


２区掘立柱建物 2-1・2-3 検出状況（西から）



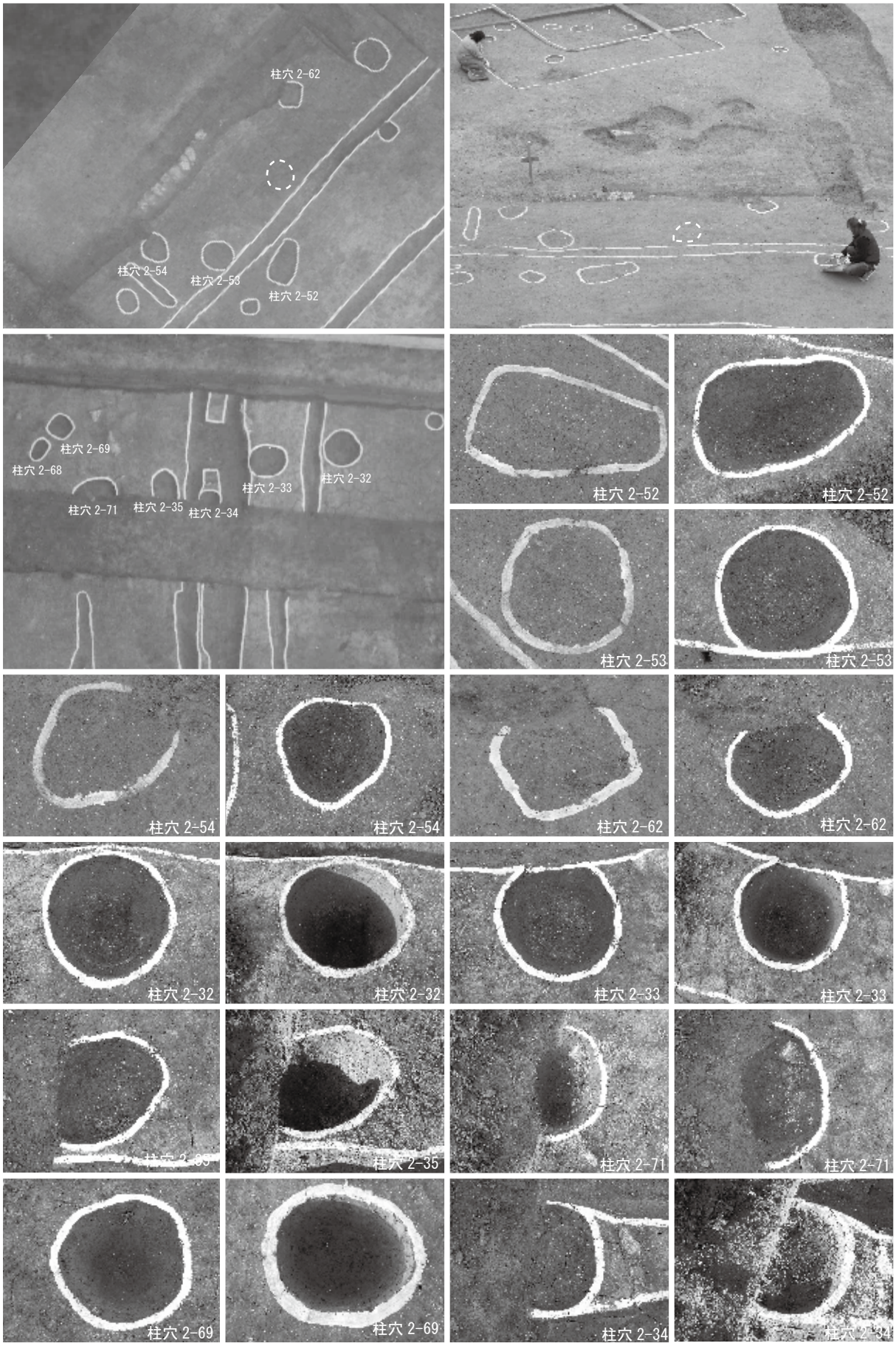
２区掘立柱建物 2-2・2-4 検出状況（西から）

図版９　２区掘立柱建物２―１柱穴



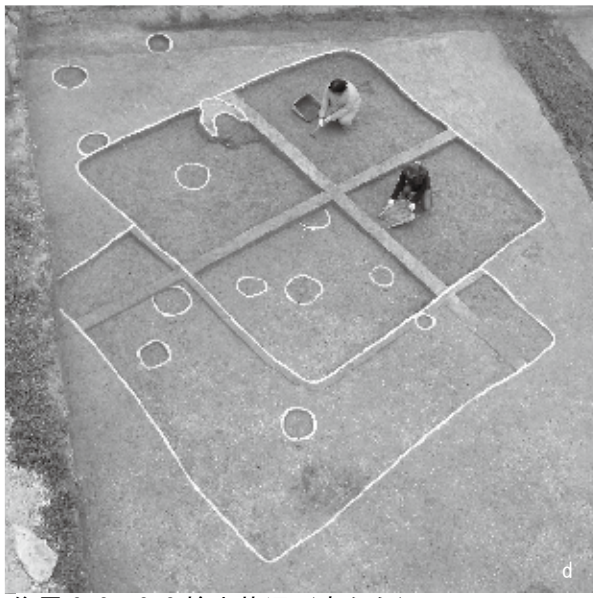
柱穴検出状況と完掘状況（すべて南西から）

図版10　2区掘立柱建物2―2・2―3柱穴



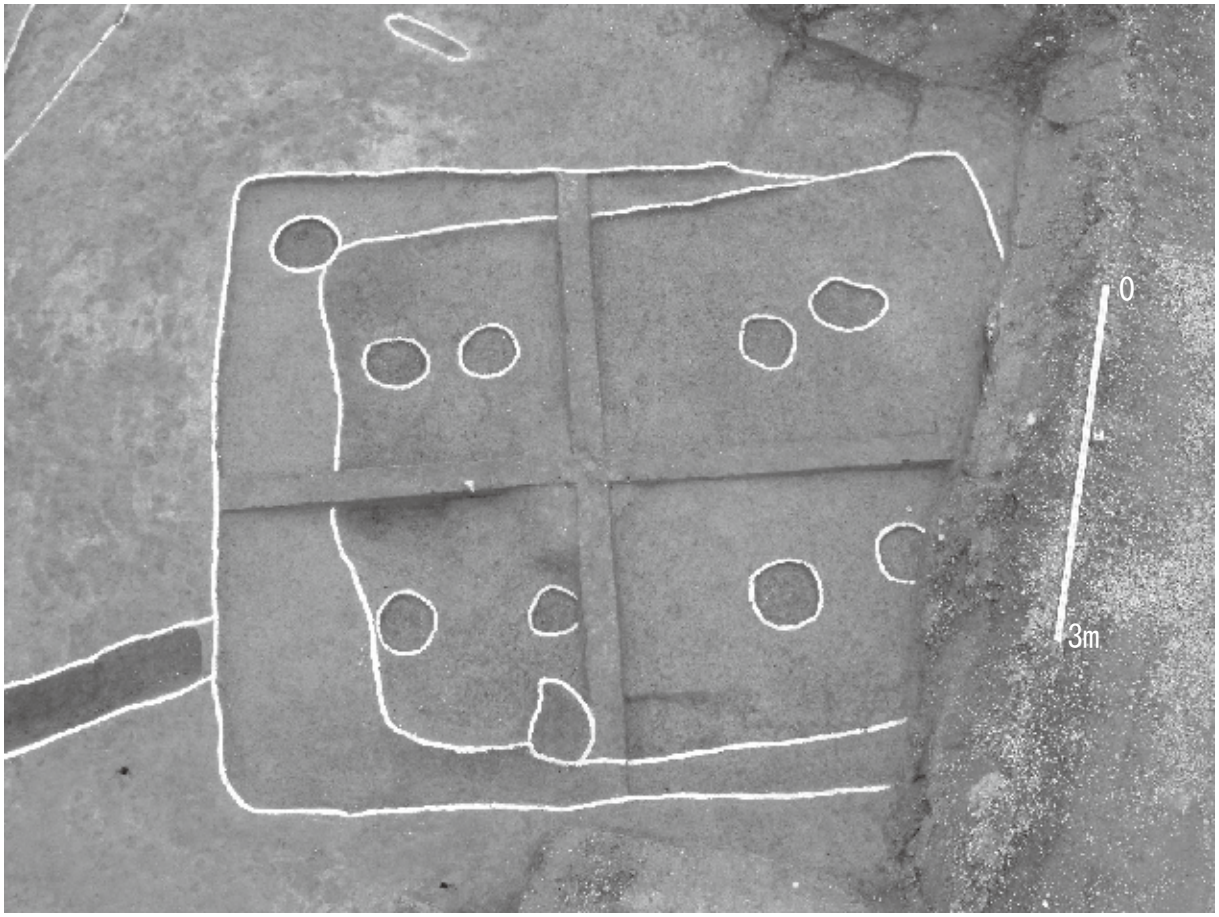
柱穴検出状況と完掘状況（すべて南東から）

図版11　２区竪穴住居検出状況

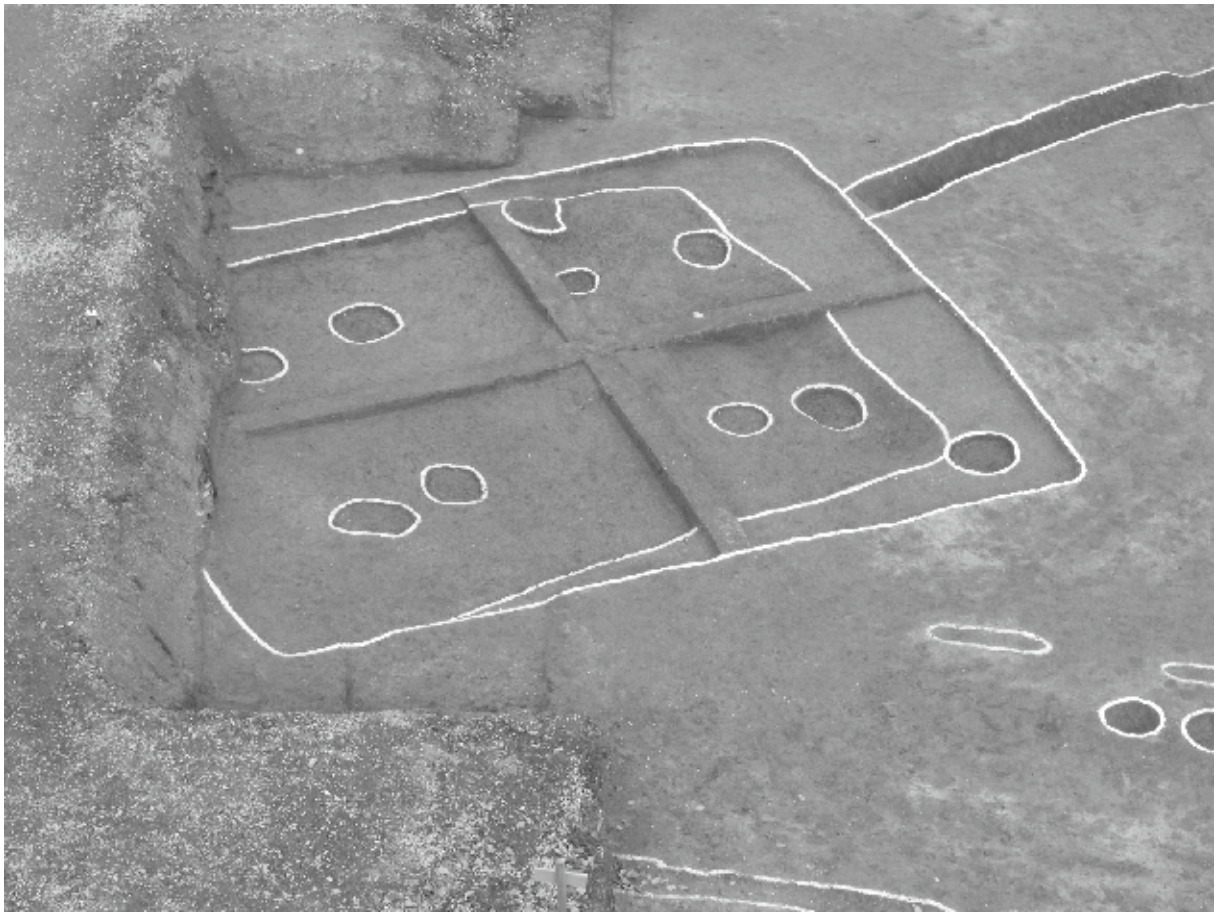


a. ２区竪穴住居 2-1 検出状況（南から）　b. ２区竪穴住居 2-2・2-3 検出状況（南から）
c. ２区竪穴住居 2-1・2-4 掘削状況（南から）　d. ２区竪穴住居 2-2・2-3 掘削状況（南から）

図版12　２区竪穴住居２―１・２―４

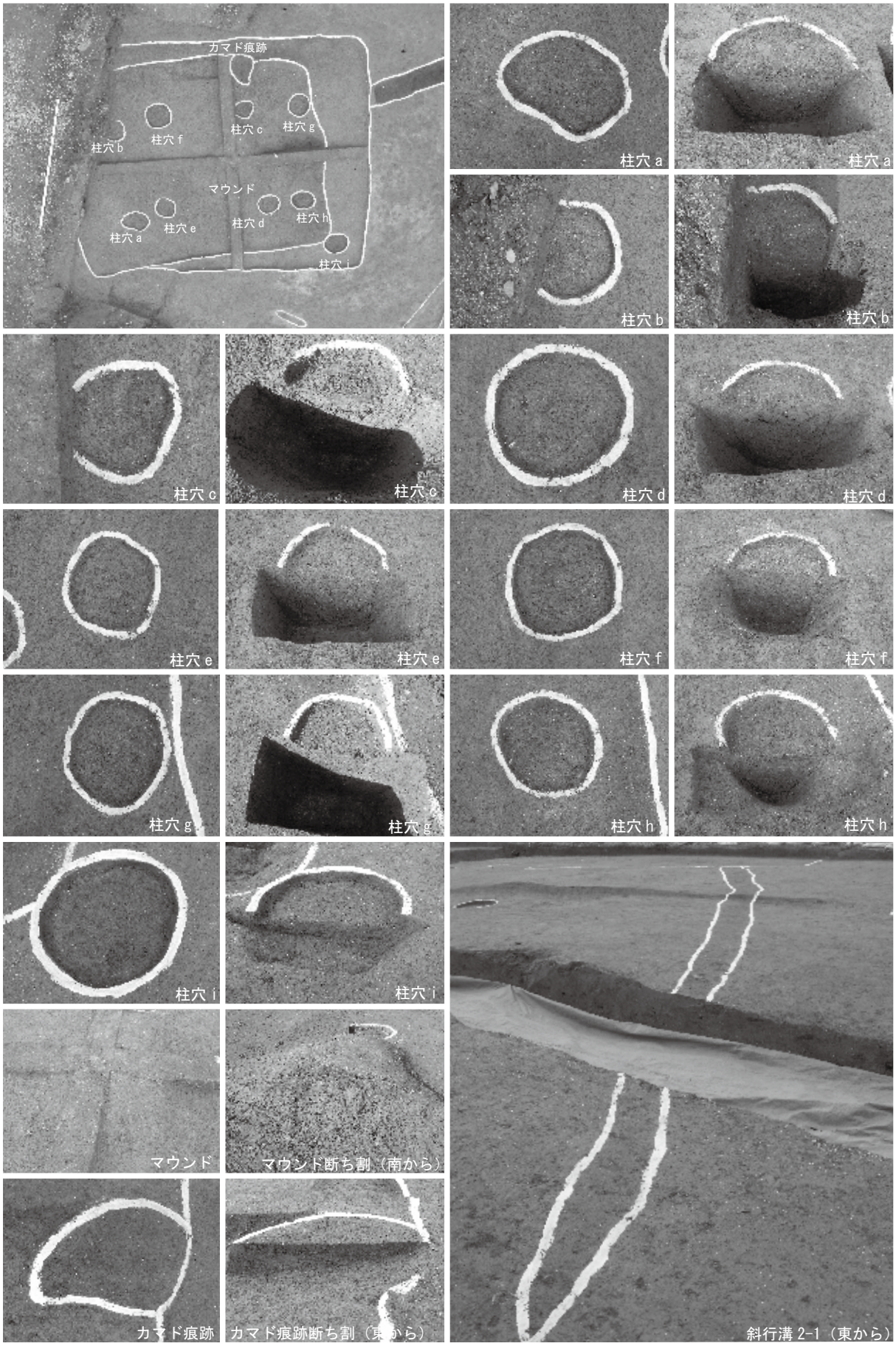


２区竪穴住居 2-1・2-4（北から）



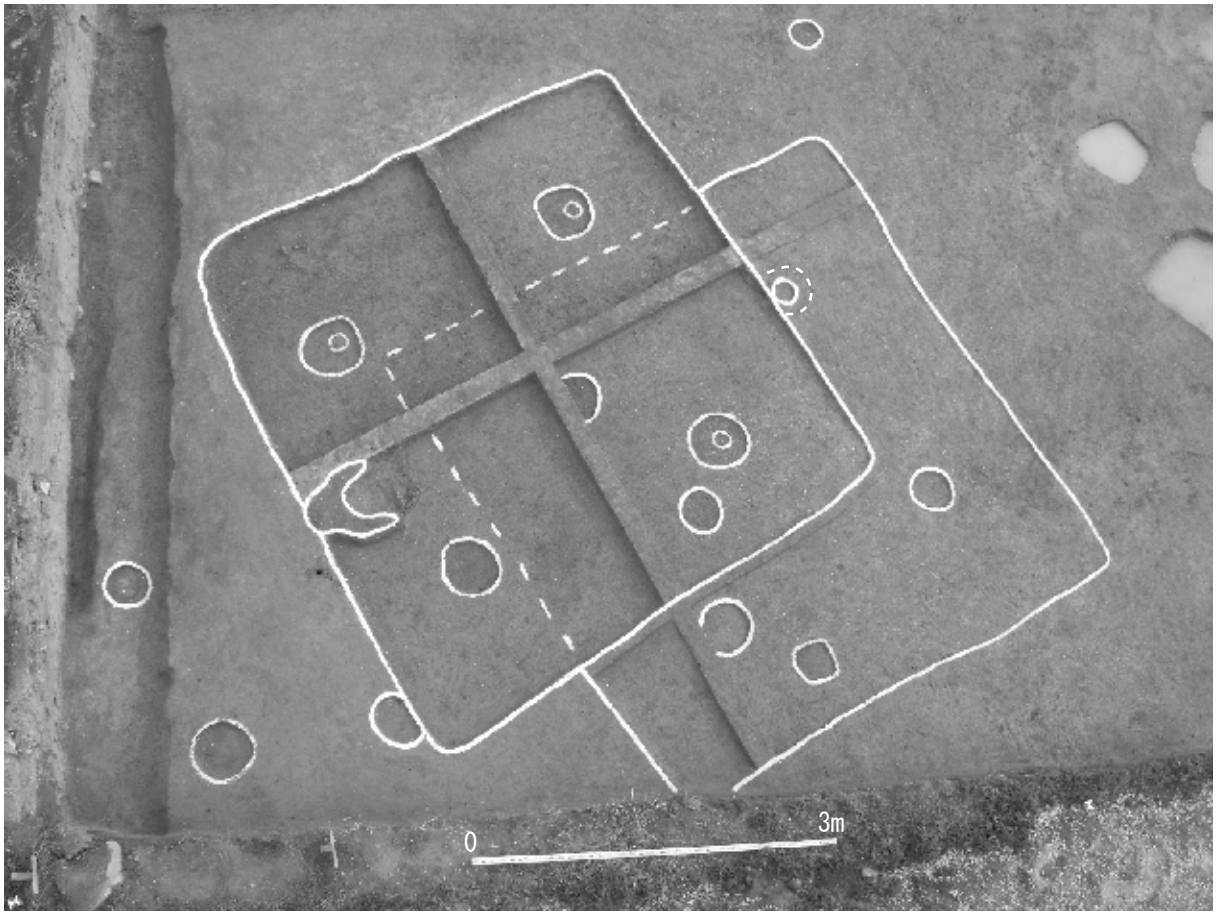
２区竪穴住居 2-1・2-4（南から）

図版13　2区竪穴住居2―1・2―4柱穴など

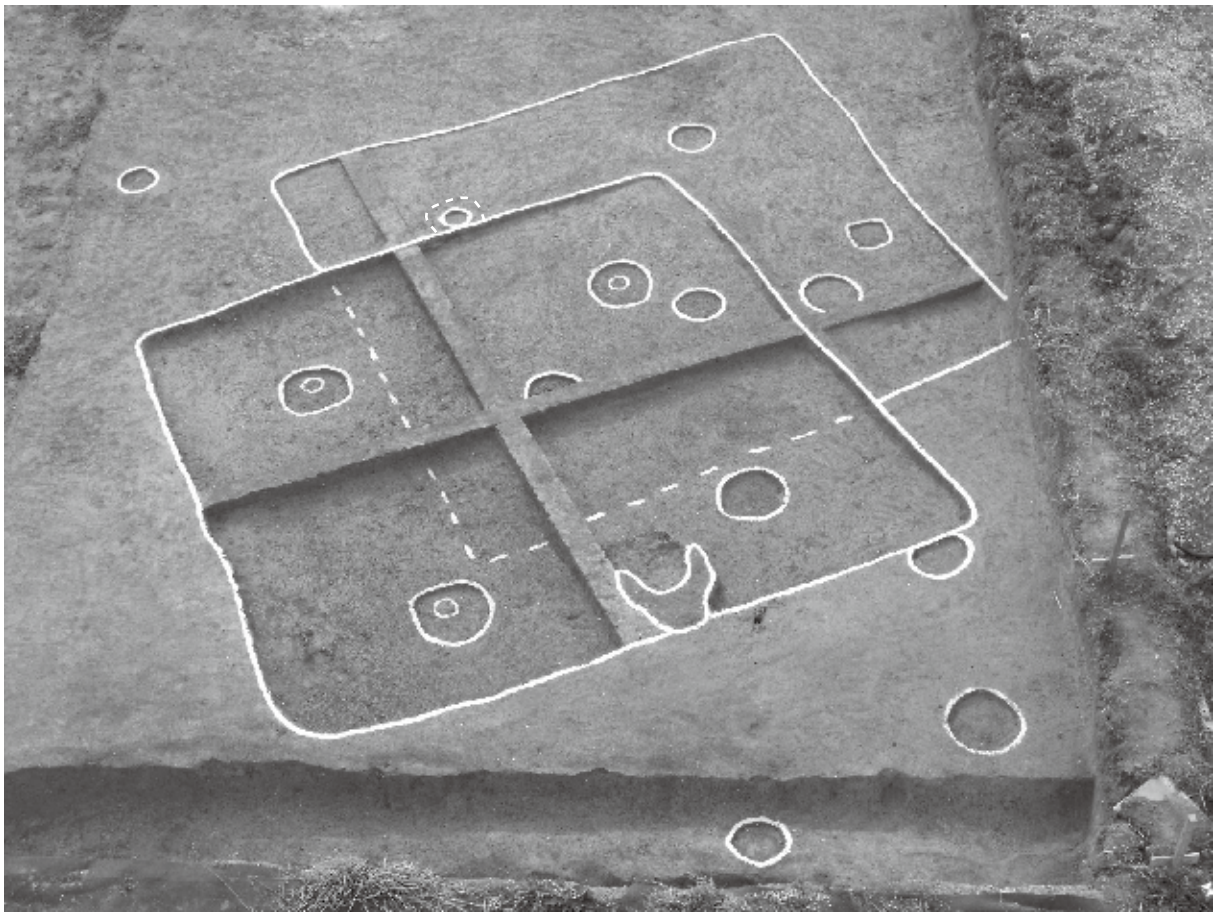


柱穴など検出状況と断ち割状況（すべて南から）

図版14　２区竪穴住居２―２・２―３

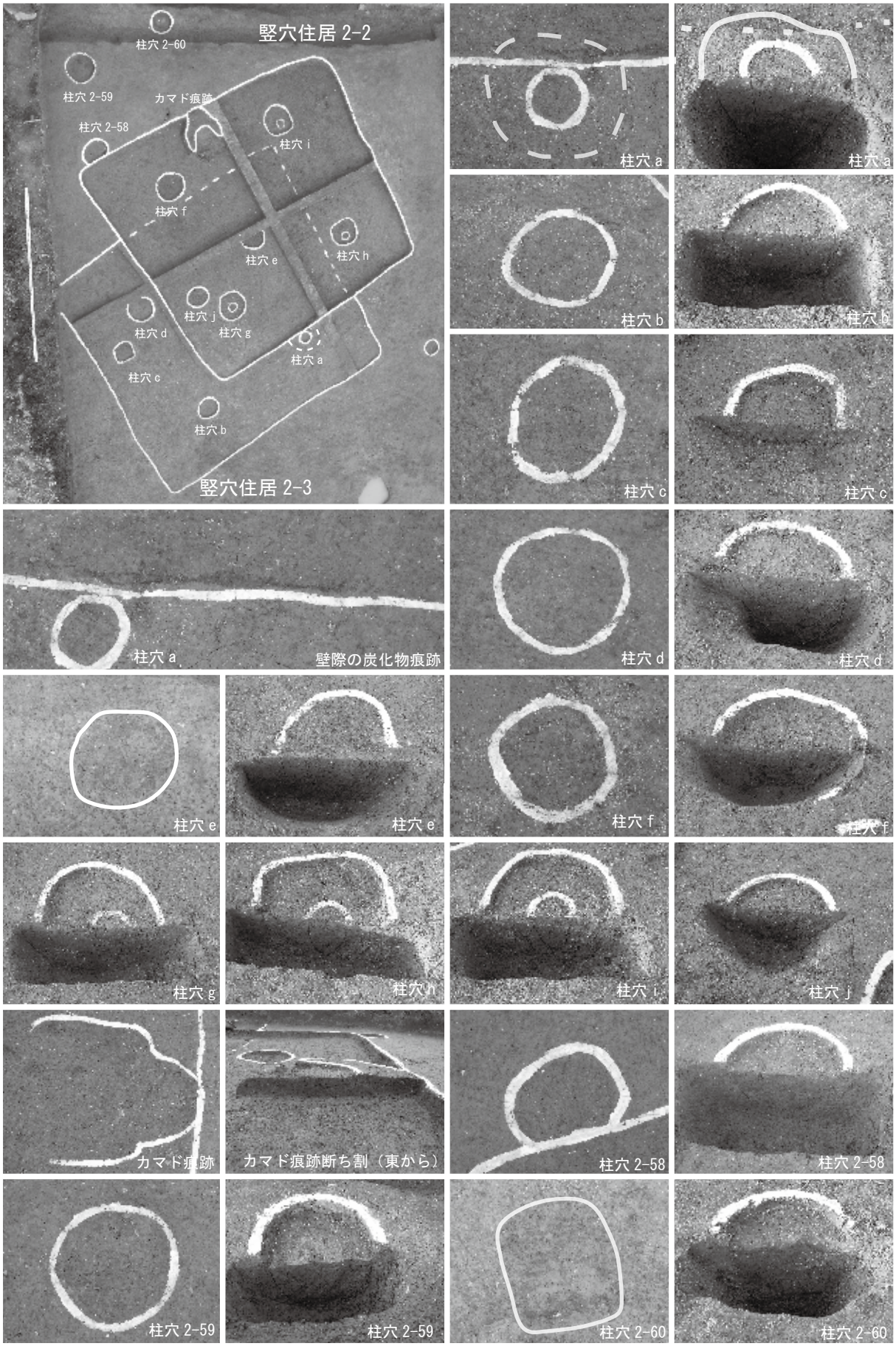


２区竪穴住居 2-2・2-3 完掘状況（西から）



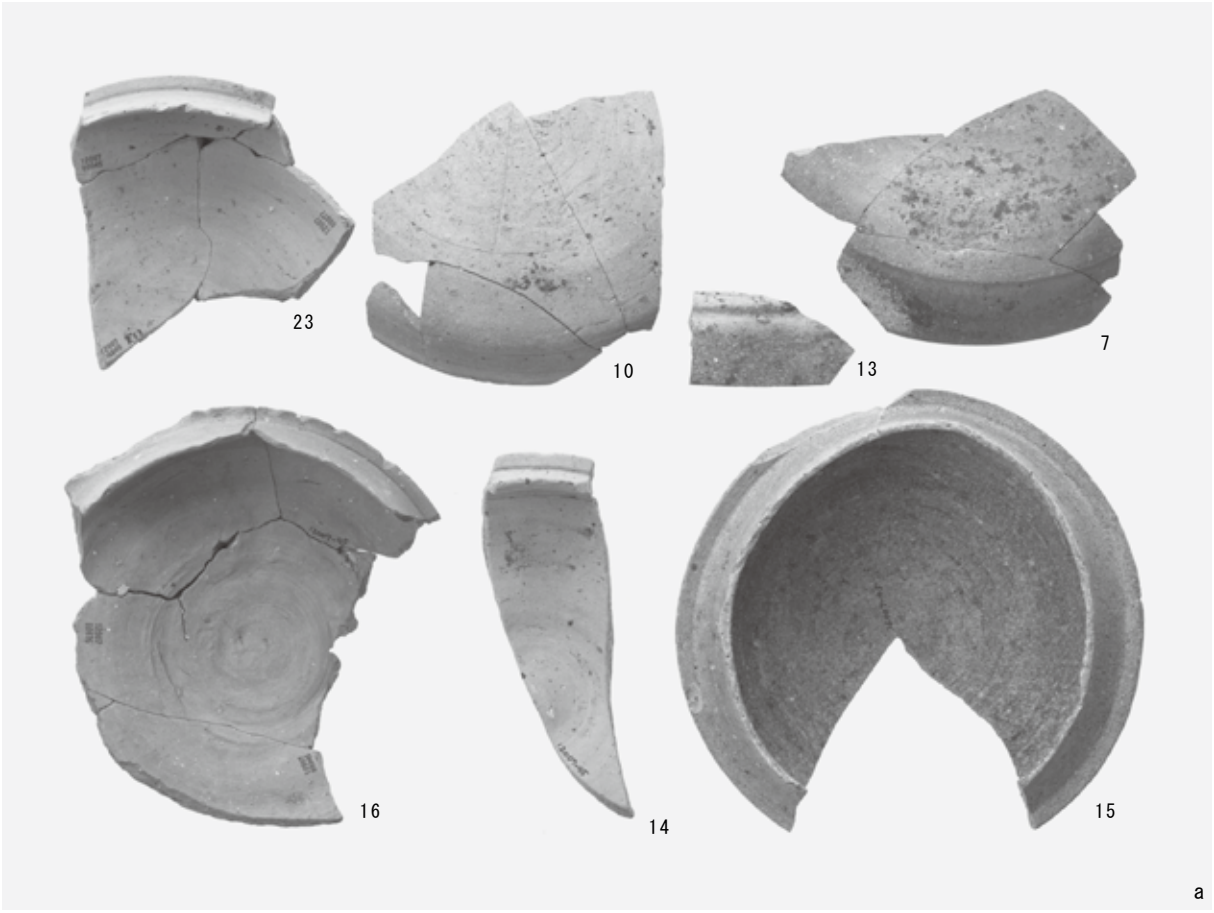
２区竪穴住居 2-2・2-3 完掘状況（北から）

図版15　2区竪穴住居2—2・2—3柱穴など

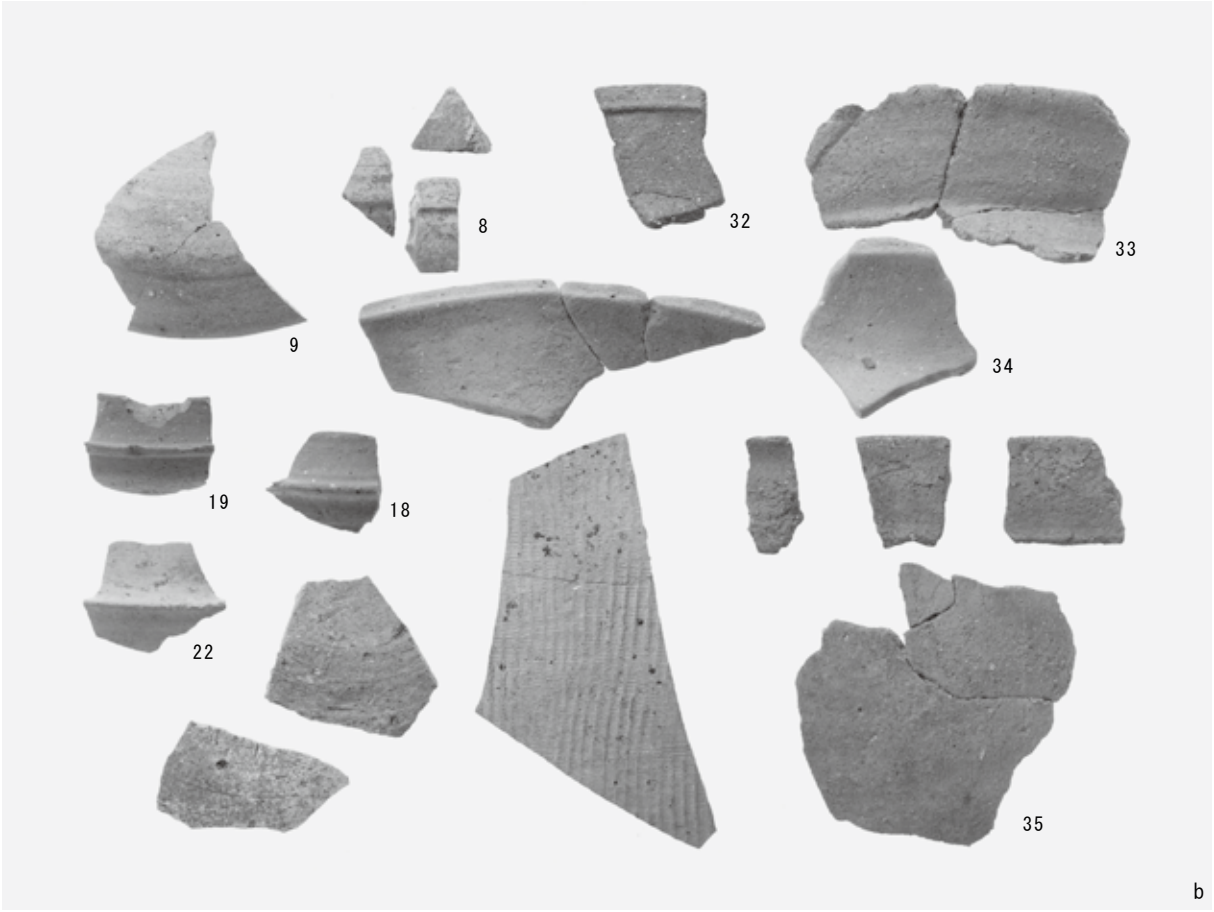


柱穴など検出状況と断ち割状況（すべて南から）

図版16　出土遺物1

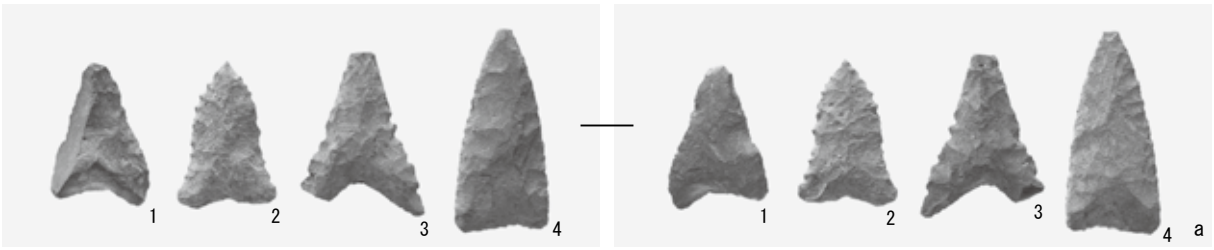


a. ２区竪穴住居2-1出土土器

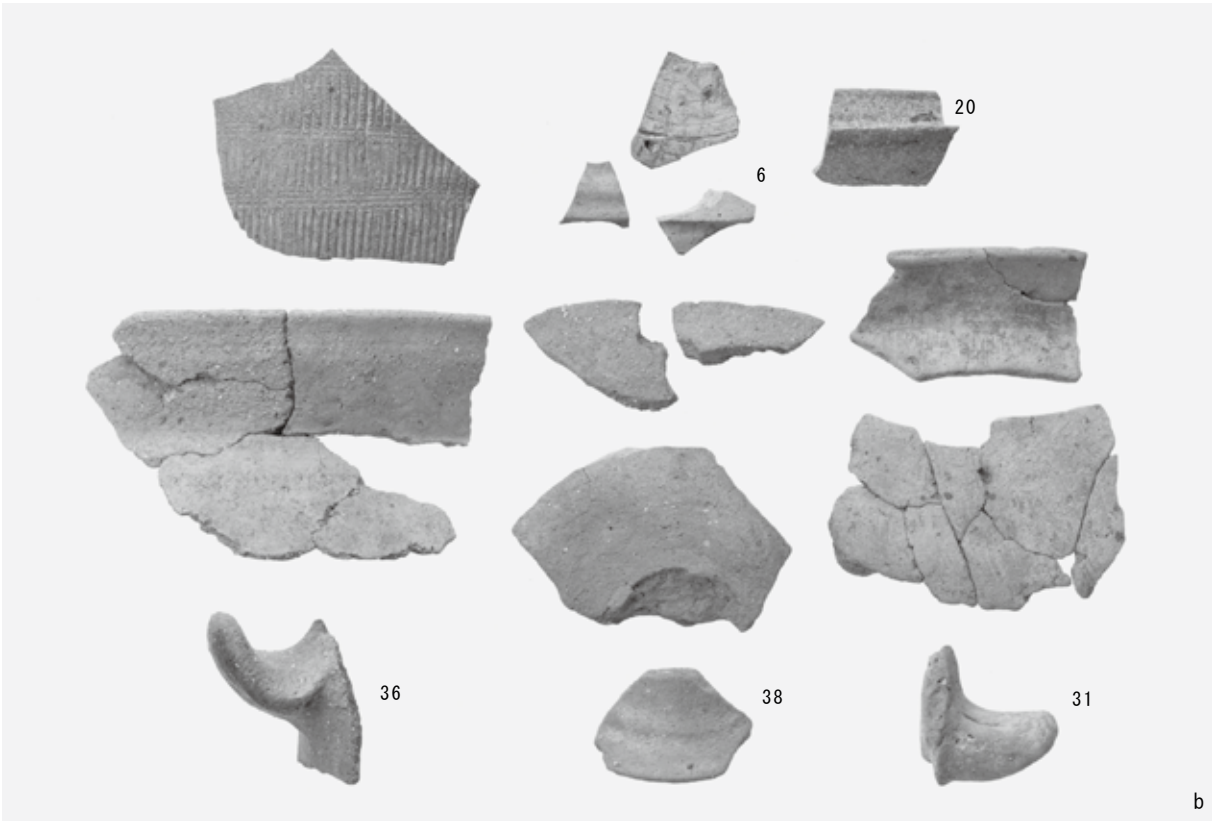


b. ２区竪穴住居2-1出土土器・掘立柱建物柱穴出土土器

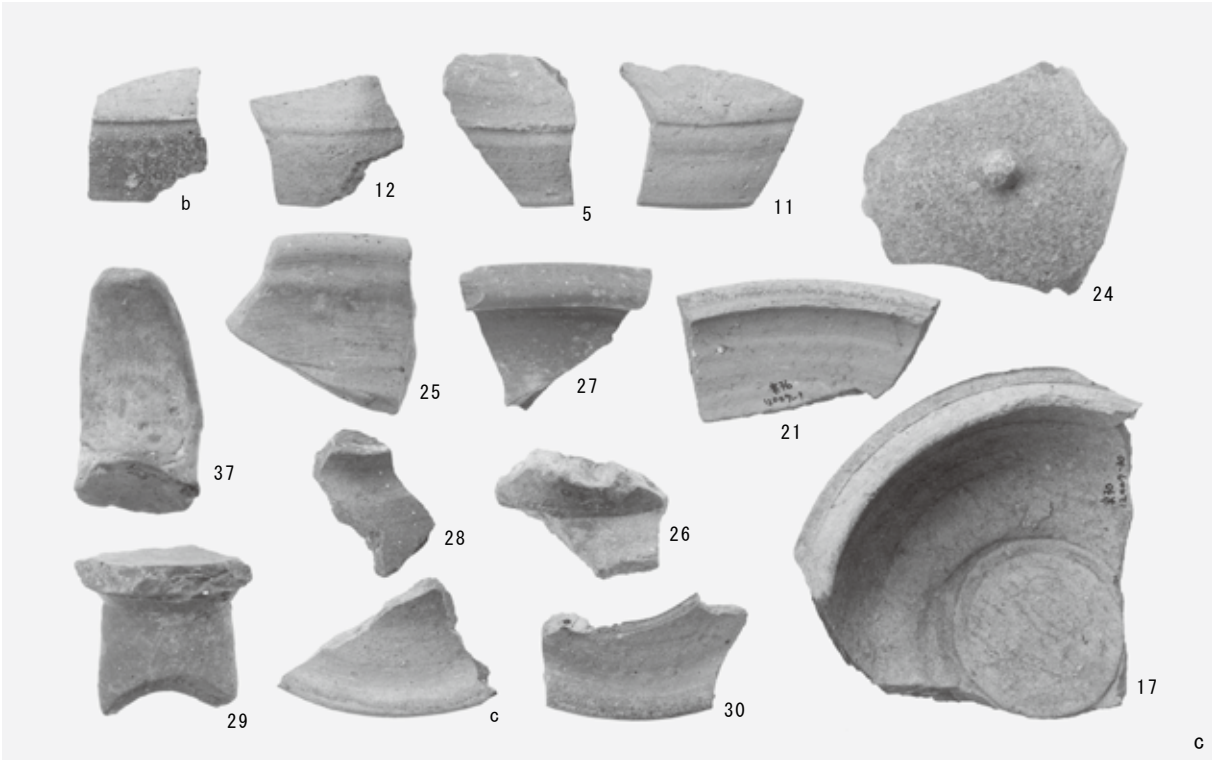
図版17　出土遺物2



a. 打製石器

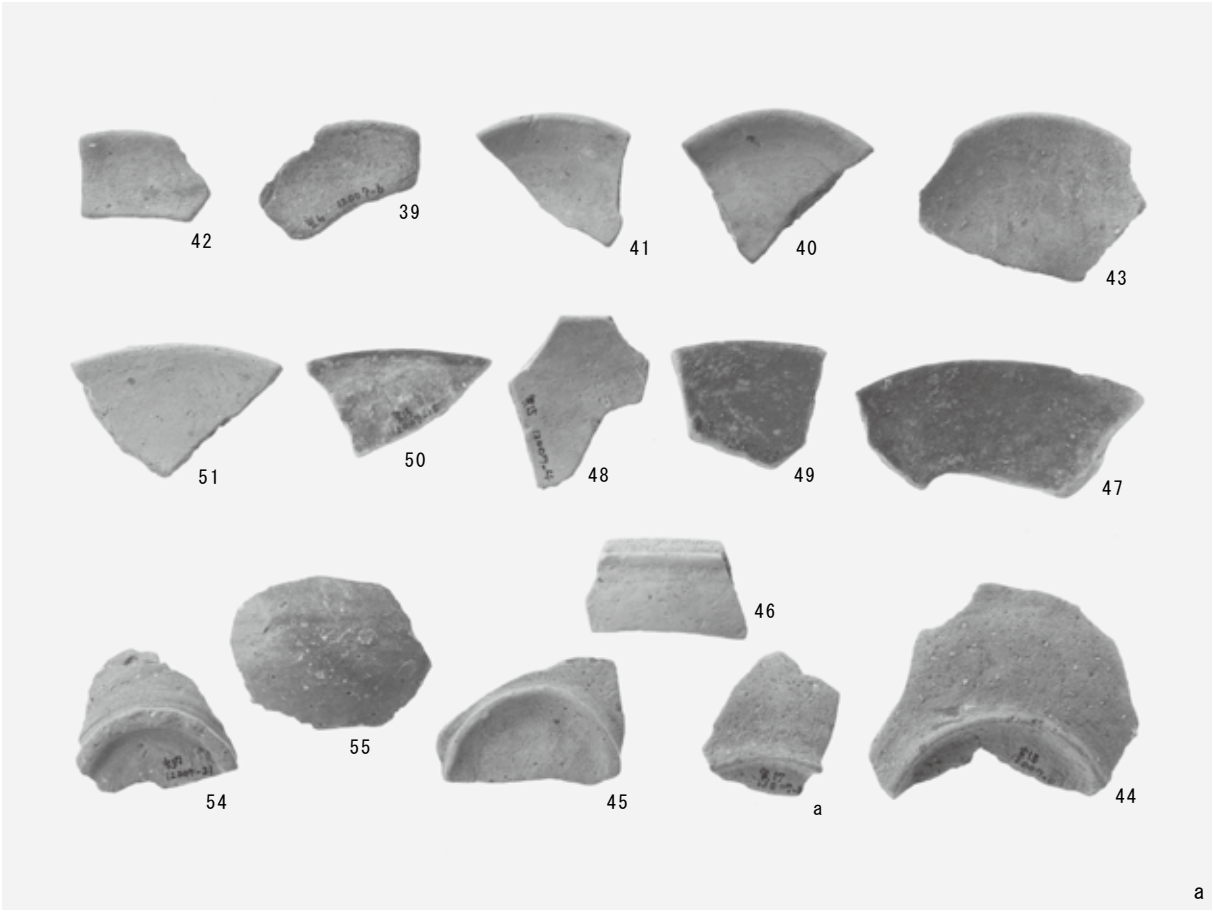


b. 竪穴住居2-2出土土器



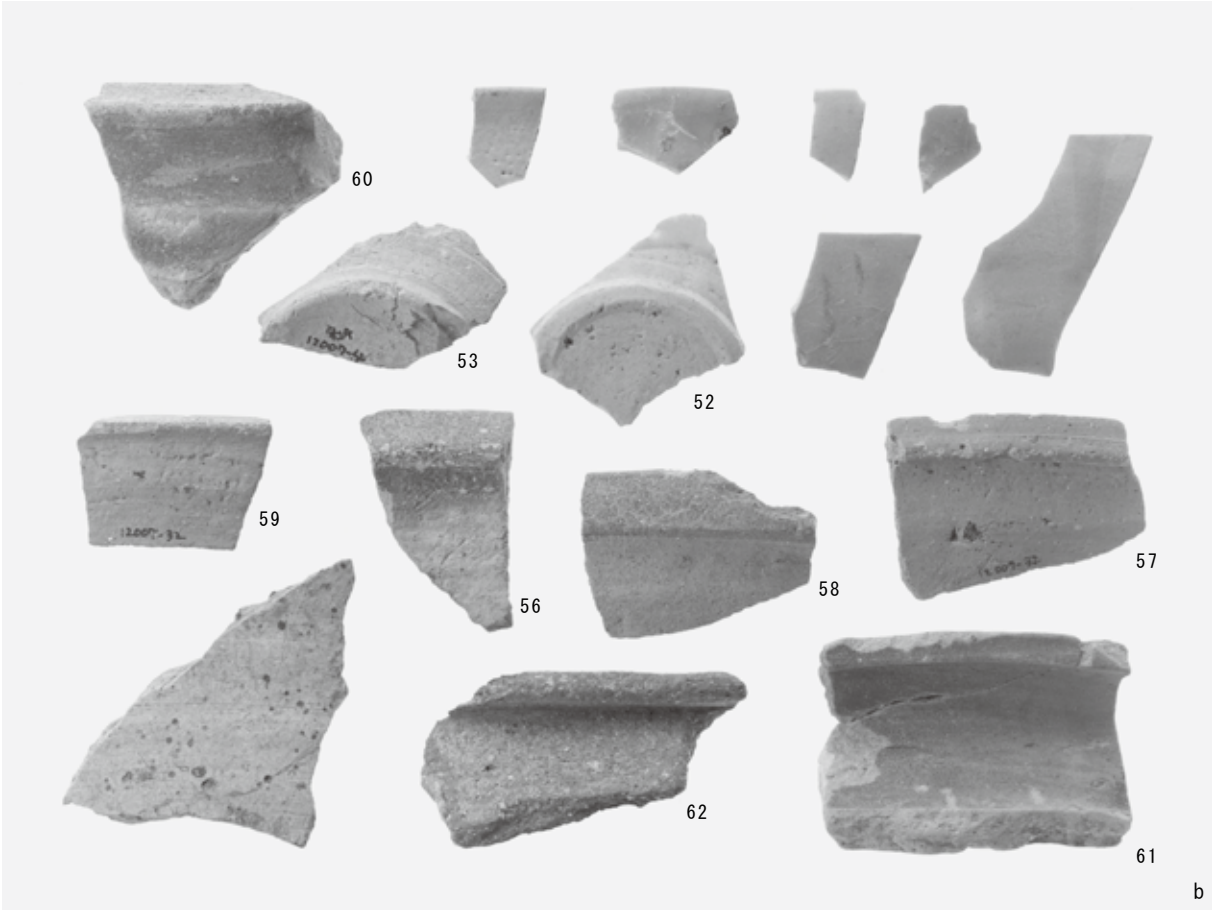
c. 遺物包含層出土、古墳時代後期の土器

図版18　出土遺物3



a

a. 遺物包含層出土土器



b

b. 遺物包含層出土土器・陶磁器

報　告　書　抄　録

ふりがな	せるたにいせき
書名	芹生谷遺跡Ⅲ
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	２０１３－１
編集著者名	西川寿勝
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL　06－6941－0351（代表）
発行年月日	平成25年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積(㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
芹生谷遺跡 （せるたにいせき）	大阪府南河内郡 芹生谷 （おおさかふみなみかわちぐん せるたに）	27219	35	34° 29′ 00″	135° 25′ 54″	平成24年９月３日 ～ 平成24年12月16日	総計2100㎡ １区 900㎡ ２区1200㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
芹生谷遺跡	集落跡	縄紋時代 古墳時代後期 南北朝時代	竪穴住居 掘立柱建物 土坑	打製石鏃 土師器・須恵器 土師質土器・瓦器	竪穴住居よりTK10段階の須恵器が出土。これは史跡金山古墳の造営段階にあたる。
要　約	史跡金山古墳の近隣でその造営期に営まれた竪穴住居・掘立柱建物などを確認した。 条里地割による水田開発の一端と、南北朝時代の居住域などを確認した。				

大阪府埋蔵文化財調査報告２０１３－１

芹 生 谷 遺 跡 Ⅲ

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成25年12月27日

印　刷　㈱近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷５丁目６番25号

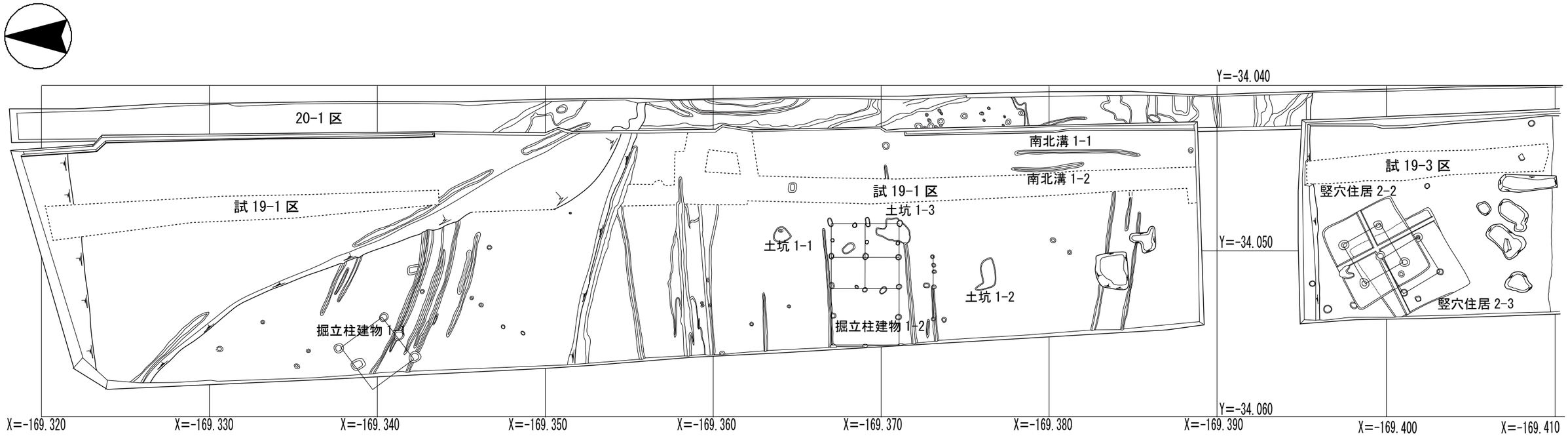

20-1 区
試 19-1 区
南北溝 1-1
南北溝 1-2
試 19-1 区
土坑 1-3
土坑 1-1
土坑 1-2
掘立柱建物 1-1
掘立柱建物 1-2
試 19-3 区
竪穴住居 2-2
竪穴住居 2-3
Y=-34.040
Y=-34.050
Y=-34.060
X=-169.320
X=-169.330
X=-169.340
X=-169.350
X=-169.360
X=-169.370
X=-169.380
X=-169.390
X=-169.400
X=-169.410
X=-169.410
X=-169.420
X=-169.430
X=-169.440
X=-169.450
X=-169.460
X=-169.470
X=-169.480
X=-169.490
X=-169.500
Y=-34.035
Y=-34.040
Y=-34.050
Y=-34.060
試 19-3 区
掘立柱建物 2-1
掘立柱建物 2-3
試 19-3 区
掘立柱建物 2-2
掘立柱建物 2-4
試 19-3 区
試 19-3 区
斜行溝 2-1
竪穴住居 2-1
竪穴住居 2-4
0
10m

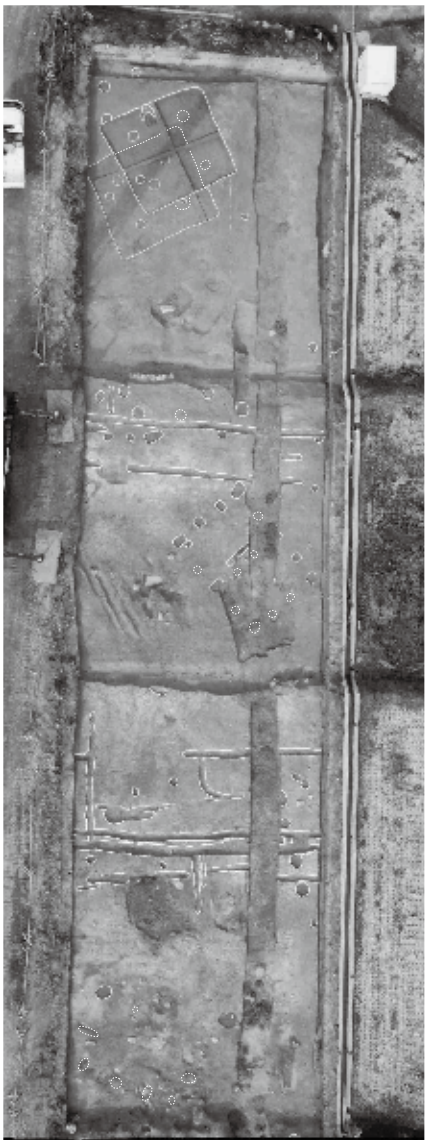
図４　調査区全体図

図　　版

金山古墳と調査区周辺

図版1　全景

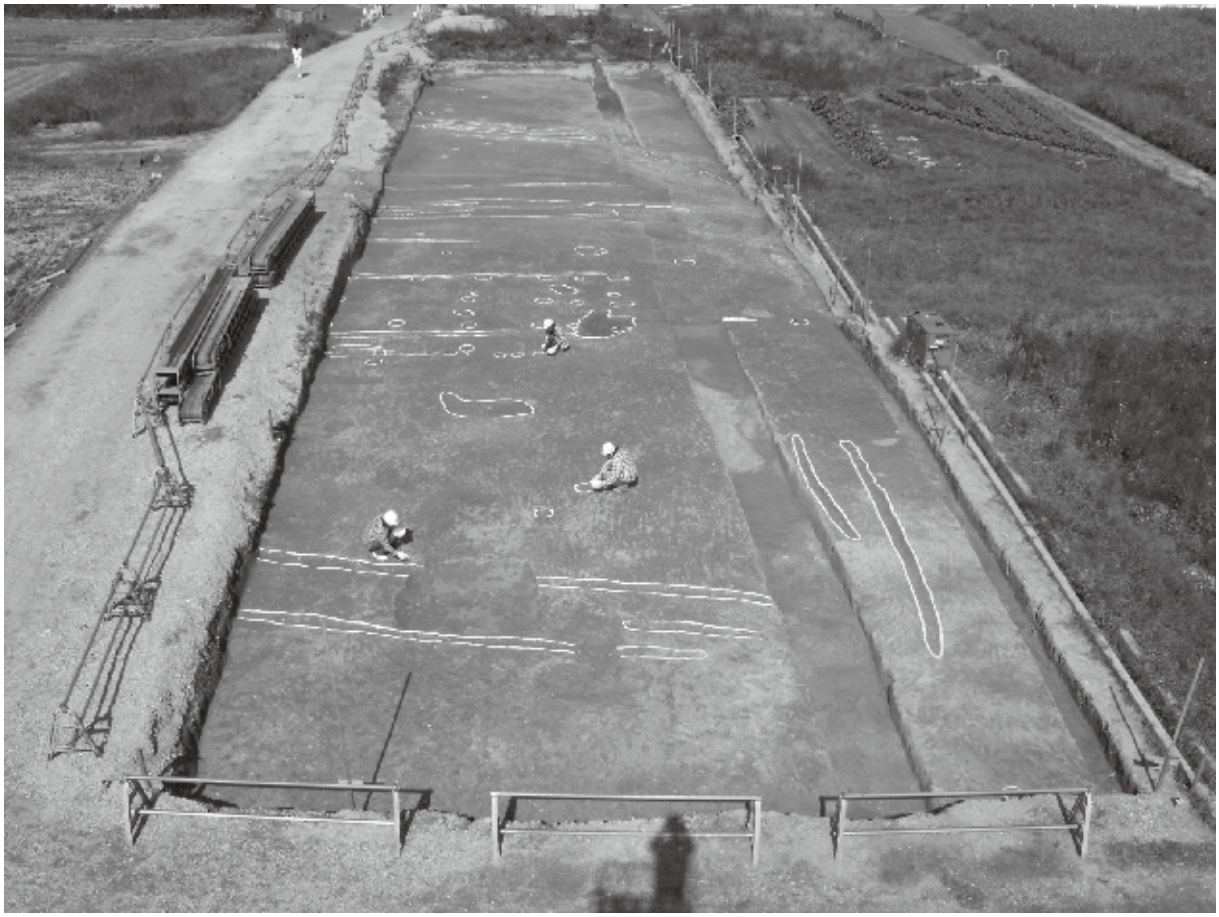
1区全景



2区南半全景

2区北半全景

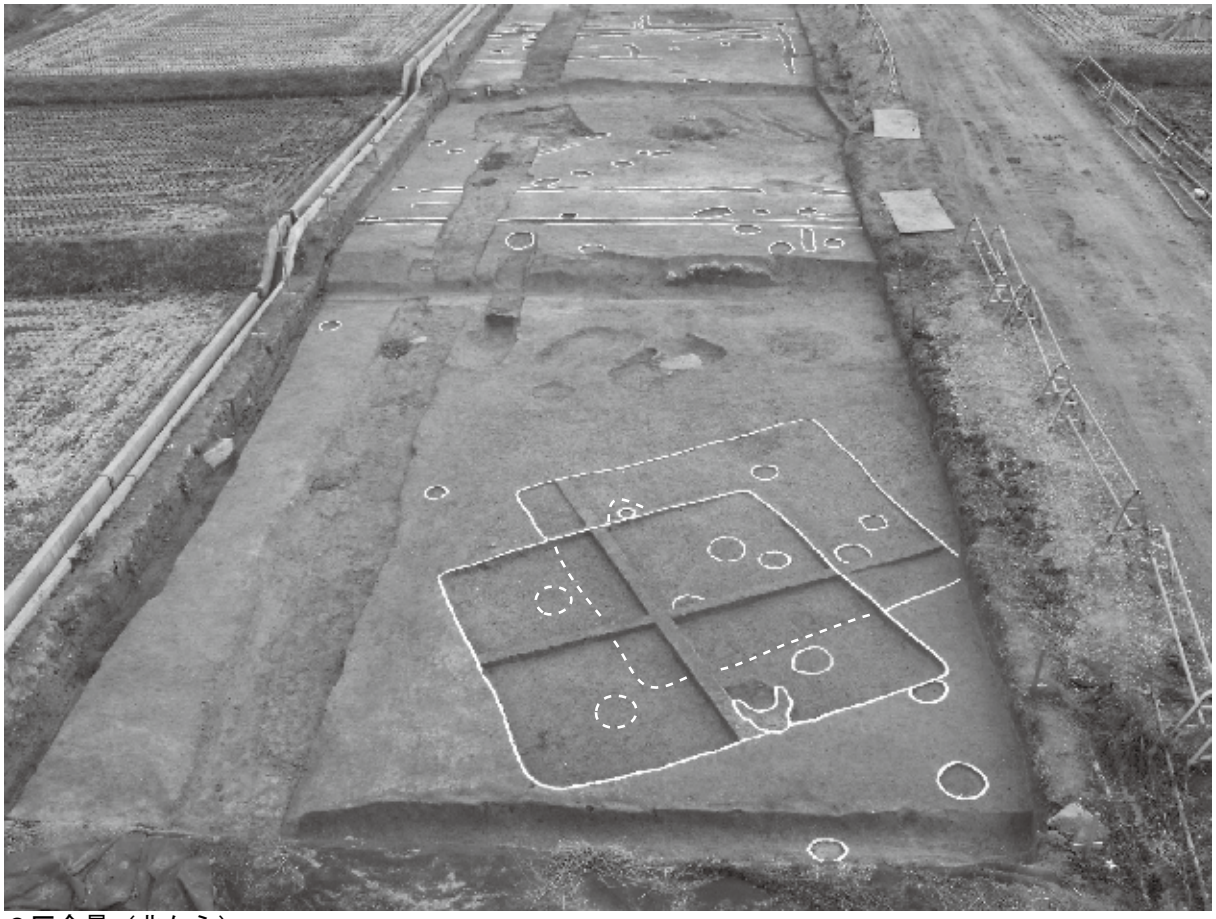
図版２　１区全景



１区全景（北から）

１区全景（南から）

図版３　２区全景

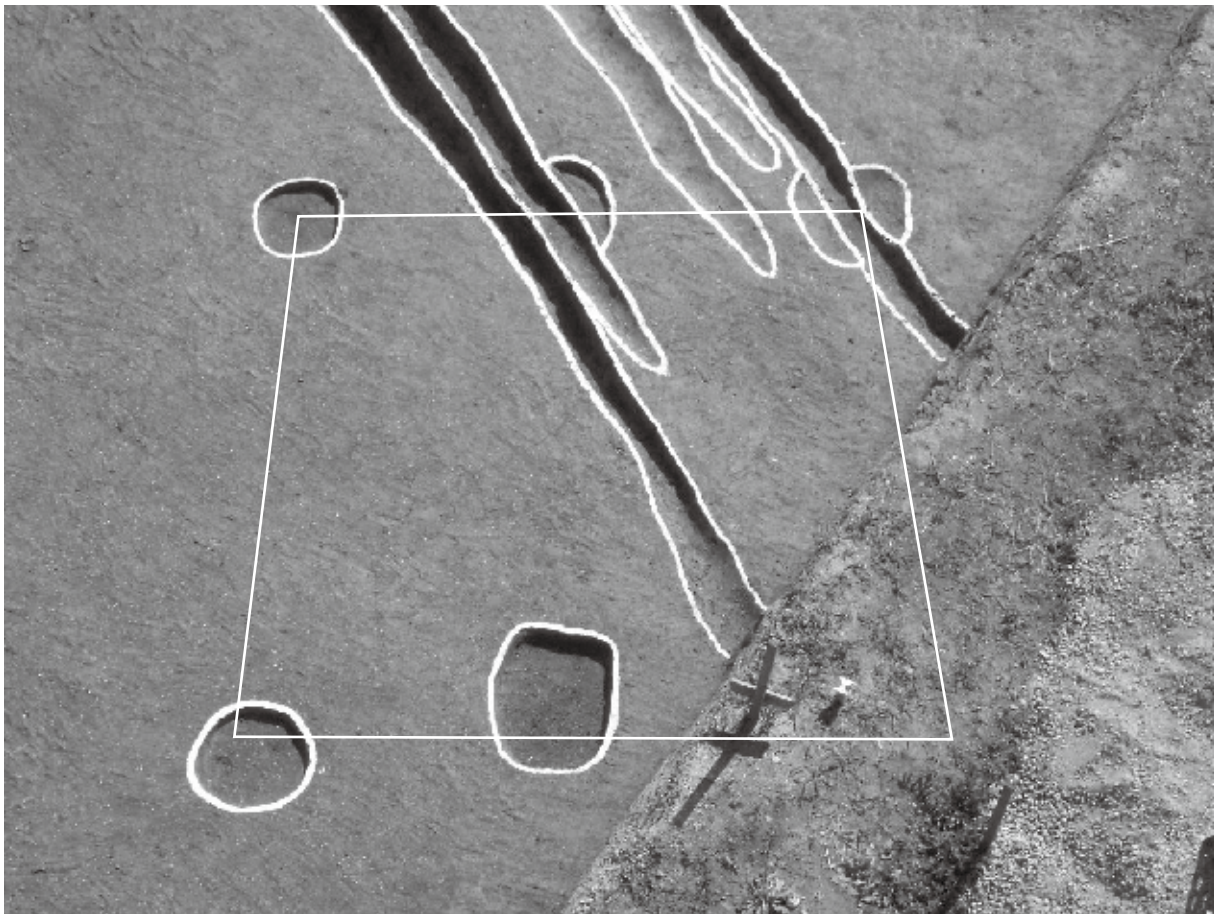


２区全景（北から）

２区全景（南から）

図版4　1区掘立柱建物1—1

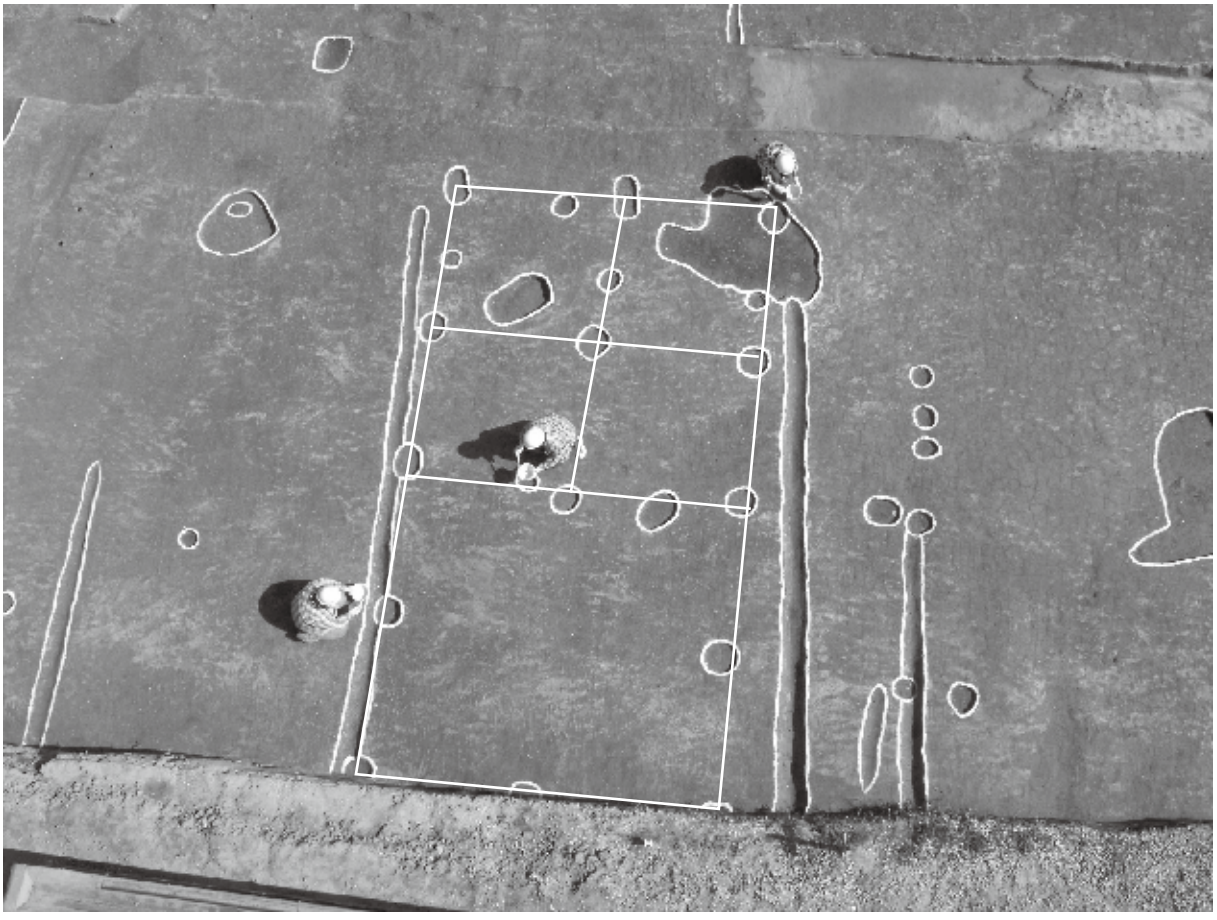
1区掘立柱建物 1-1 検出状況（北から）



1区掘立柱建物 1-1 検出状況（北西から）

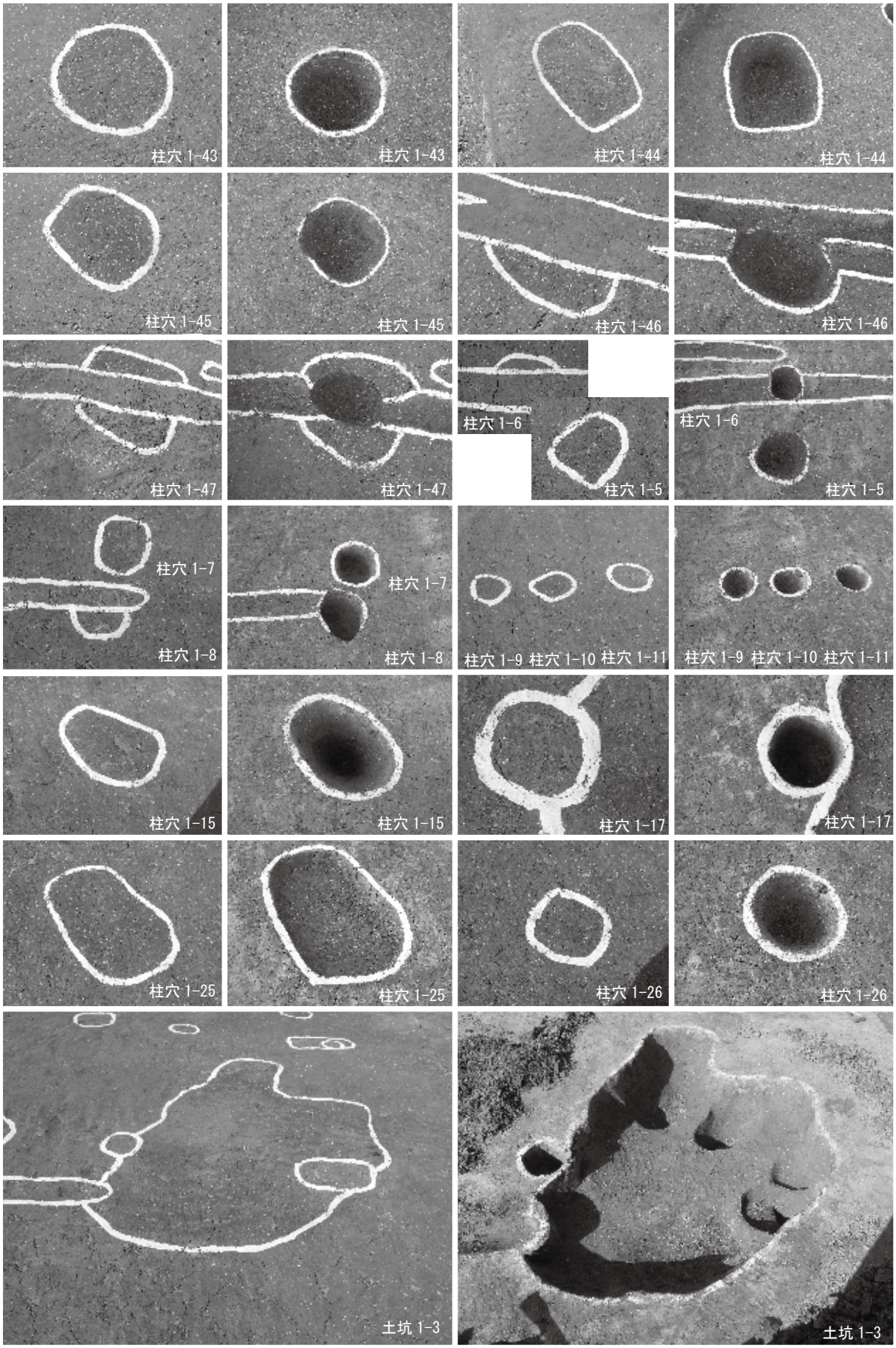
図版５　１区掘立柱建物１―２

１区掘立柱建物 1-2 検出状況（南から）



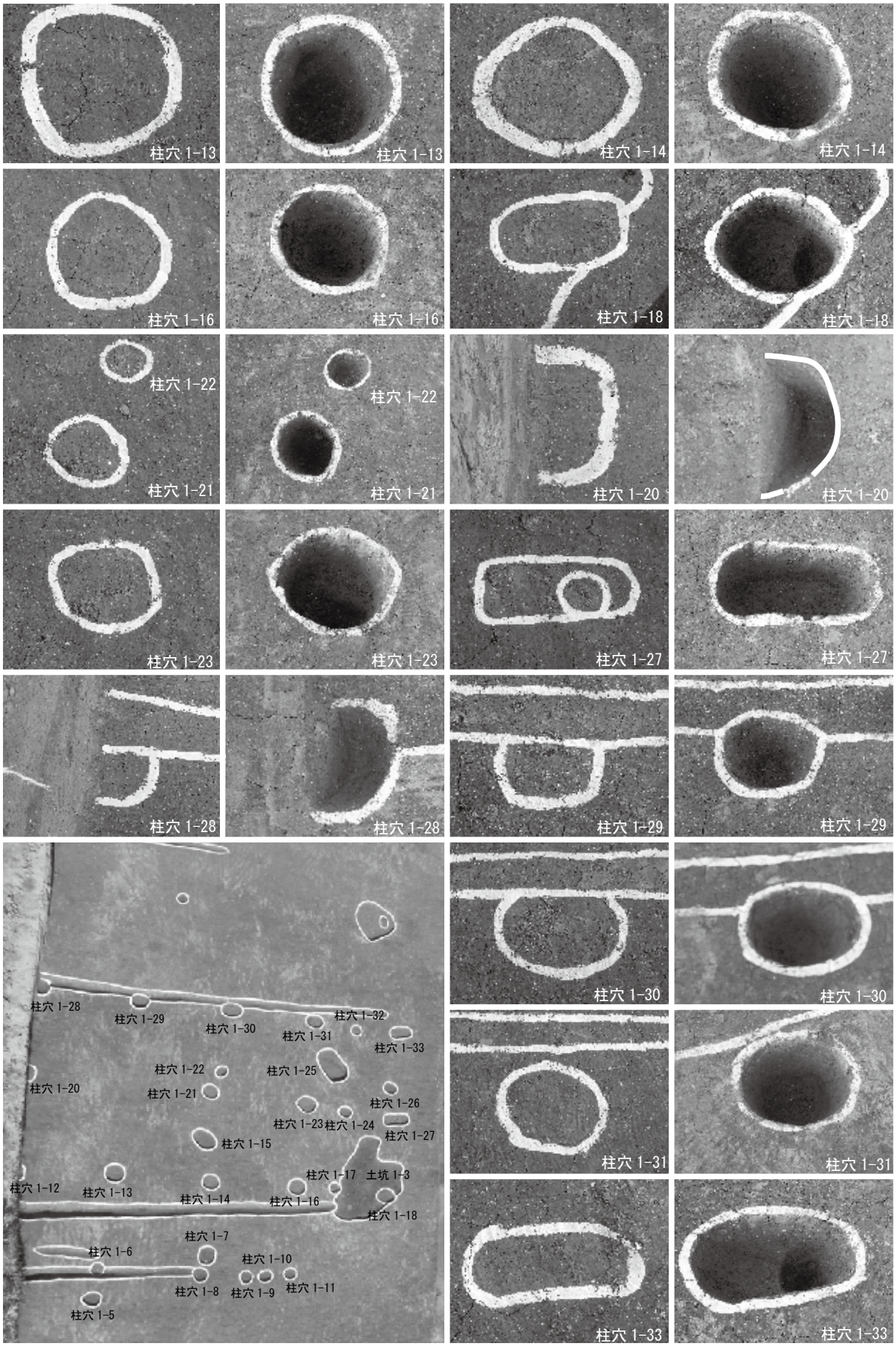
１区掘立柱建物 1-2 検出状況（西から）

図版６　１区掘立柱建物１―１柱穴・１―２柱穴



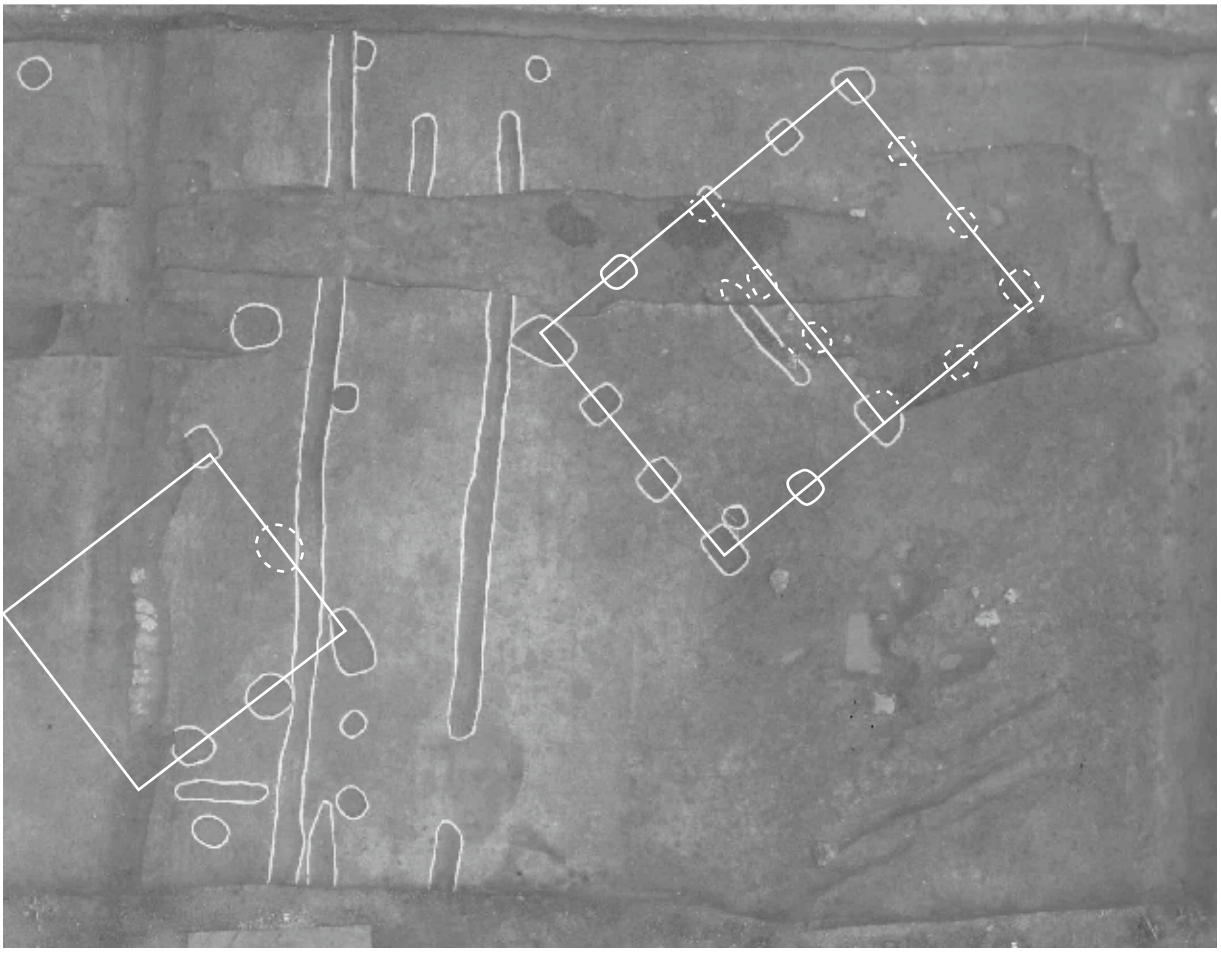
柱穴検出状況と完掘状況（すべて南から）

図版7　1区掘立柱建物1―2柱穴

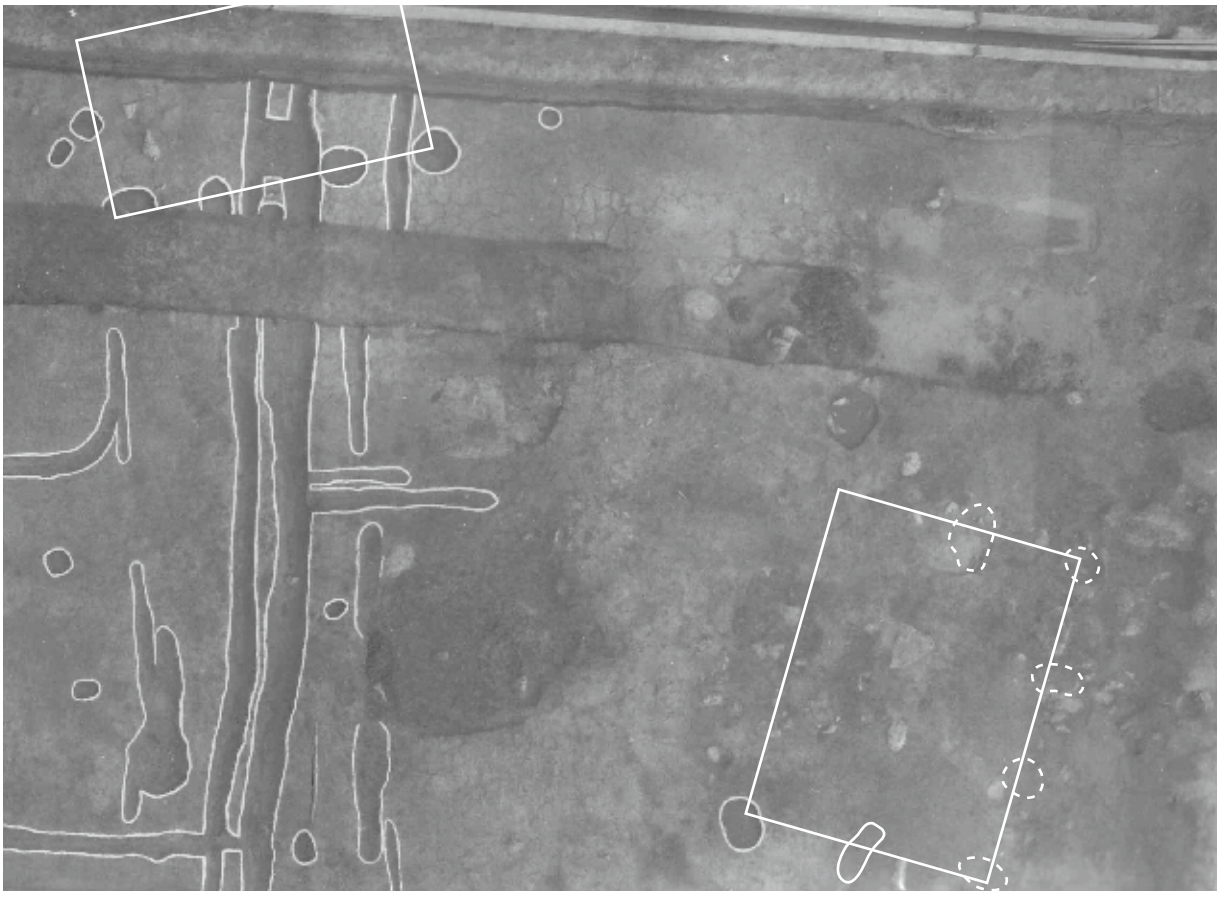


柱穴検出状況と完掘状況（すべて南から）

図版８　２区掘立柱建物

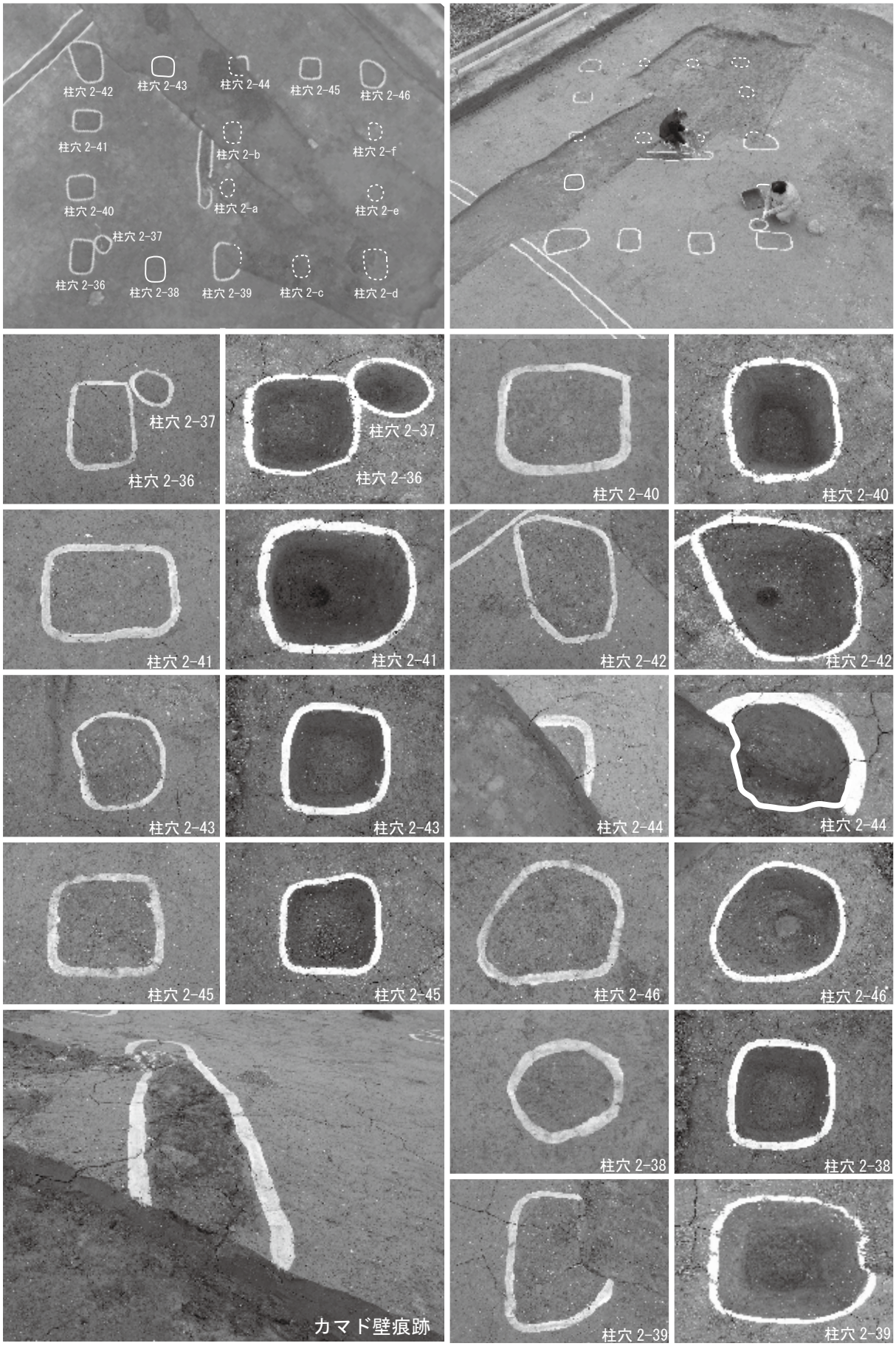


２区掘立柱建物 2-1・2-3 検出状況（西から）



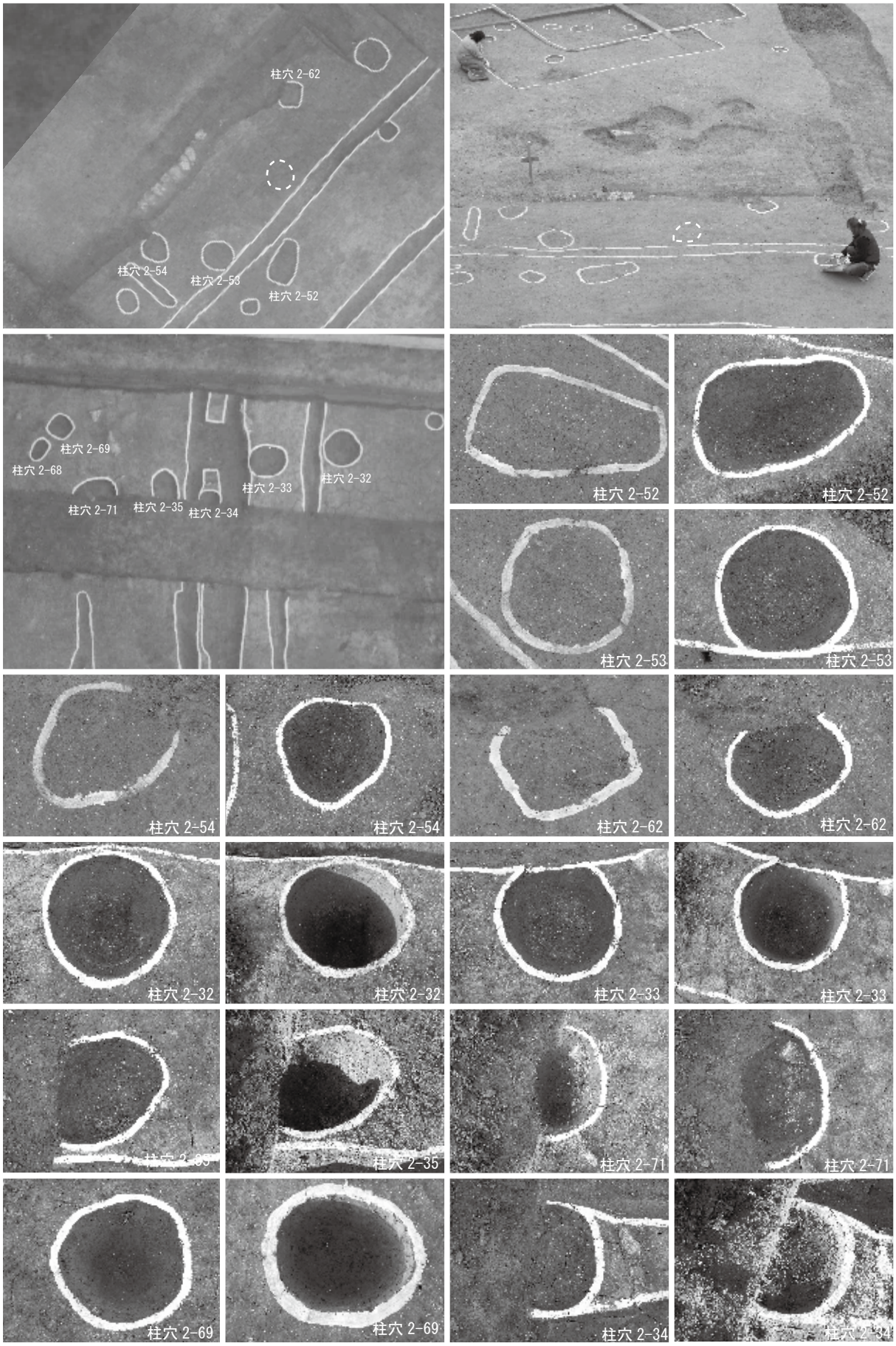
２区掘立柱建物 2-2・2-4 検出状況（西から）

図版９　２区掘立柱建物２―１柱穴



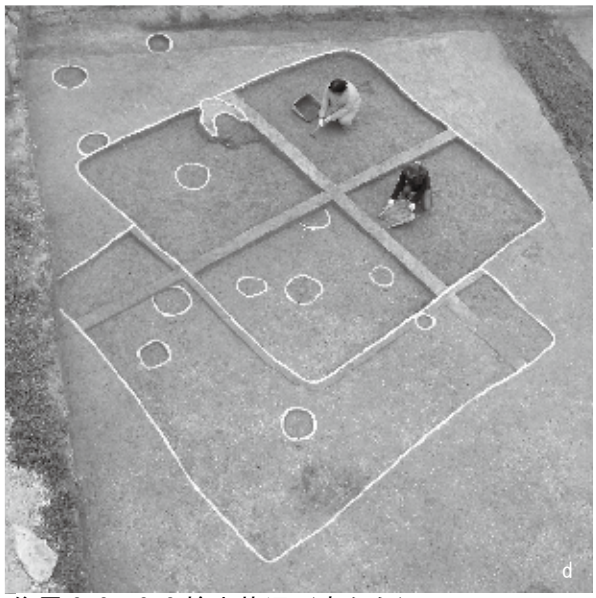
柱穴検出状況と完掘状況（すべて南西から）

図版10　2区掘立柱建物2―2・2―3柱穴



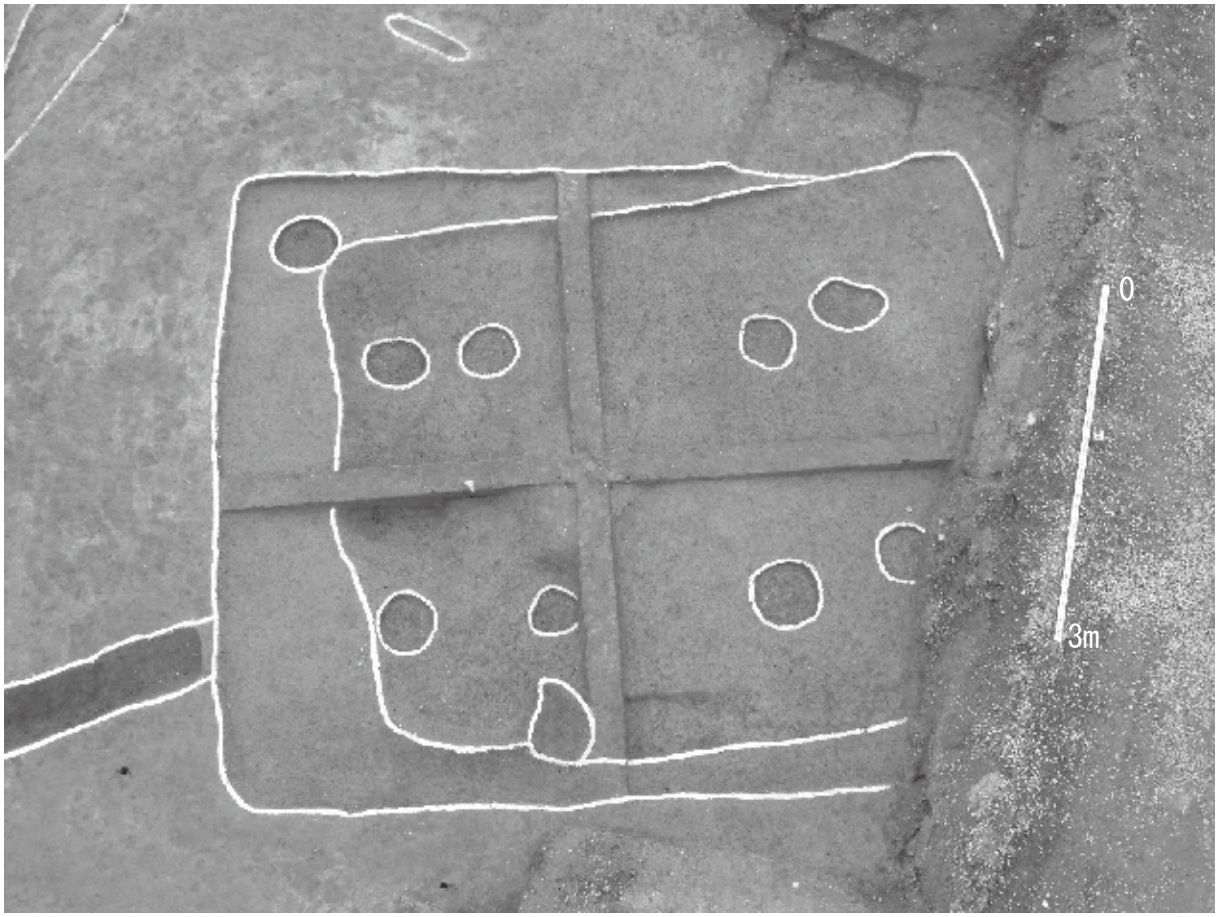
柱穴検出状況と完掘状況（すべて南東から）

図版11　２区竪穴住居検出状況

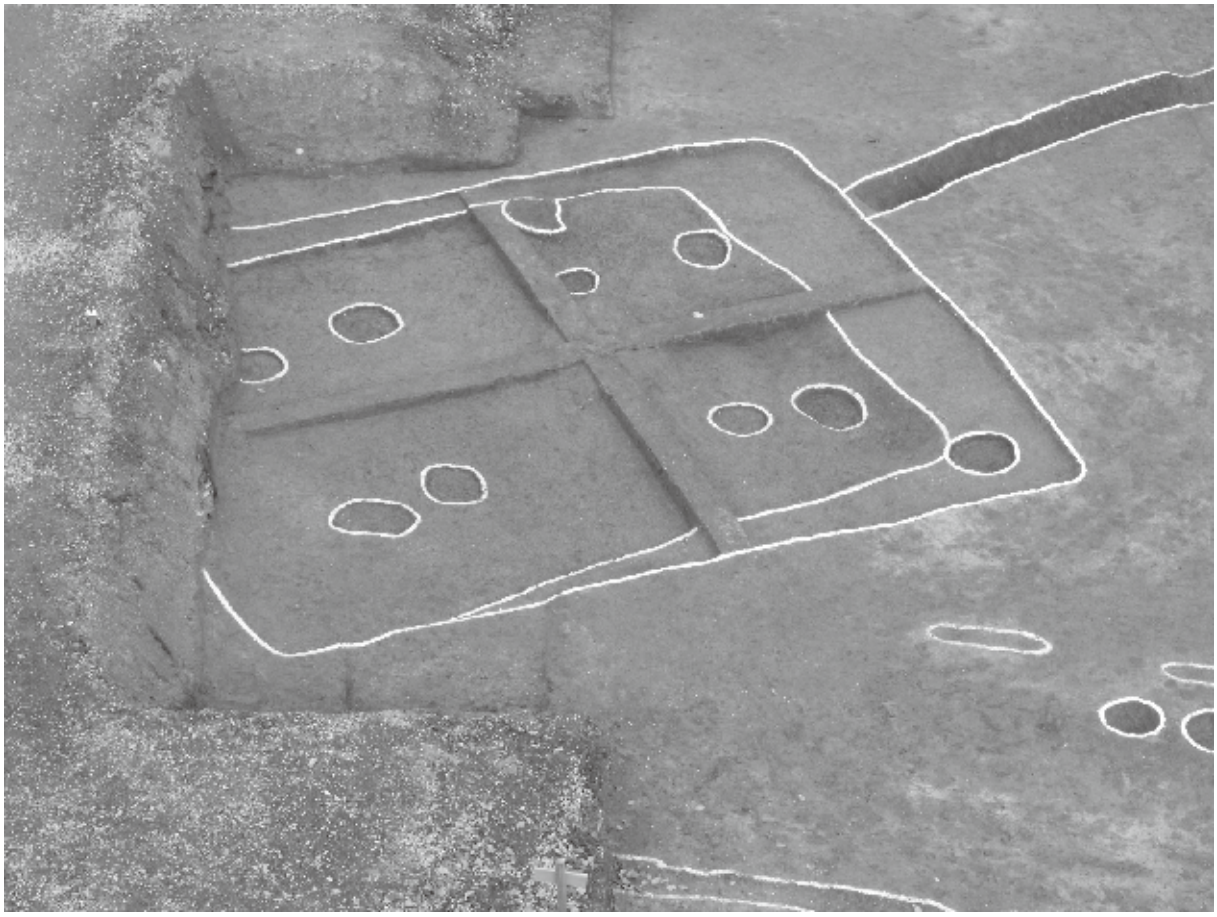


a. ２区竪穴住居 2-1 検出状況（南から）　b. ２区竪穴住居 2-2・2-3 検出状況（南から）
c. ２区竪穴住居 2-1・2-4 掘削状況（南から）　d. ２区竪穴住居 2-2・2-3 掘削状況（南から）

図版12　２区竪穴住居２―１・２―４

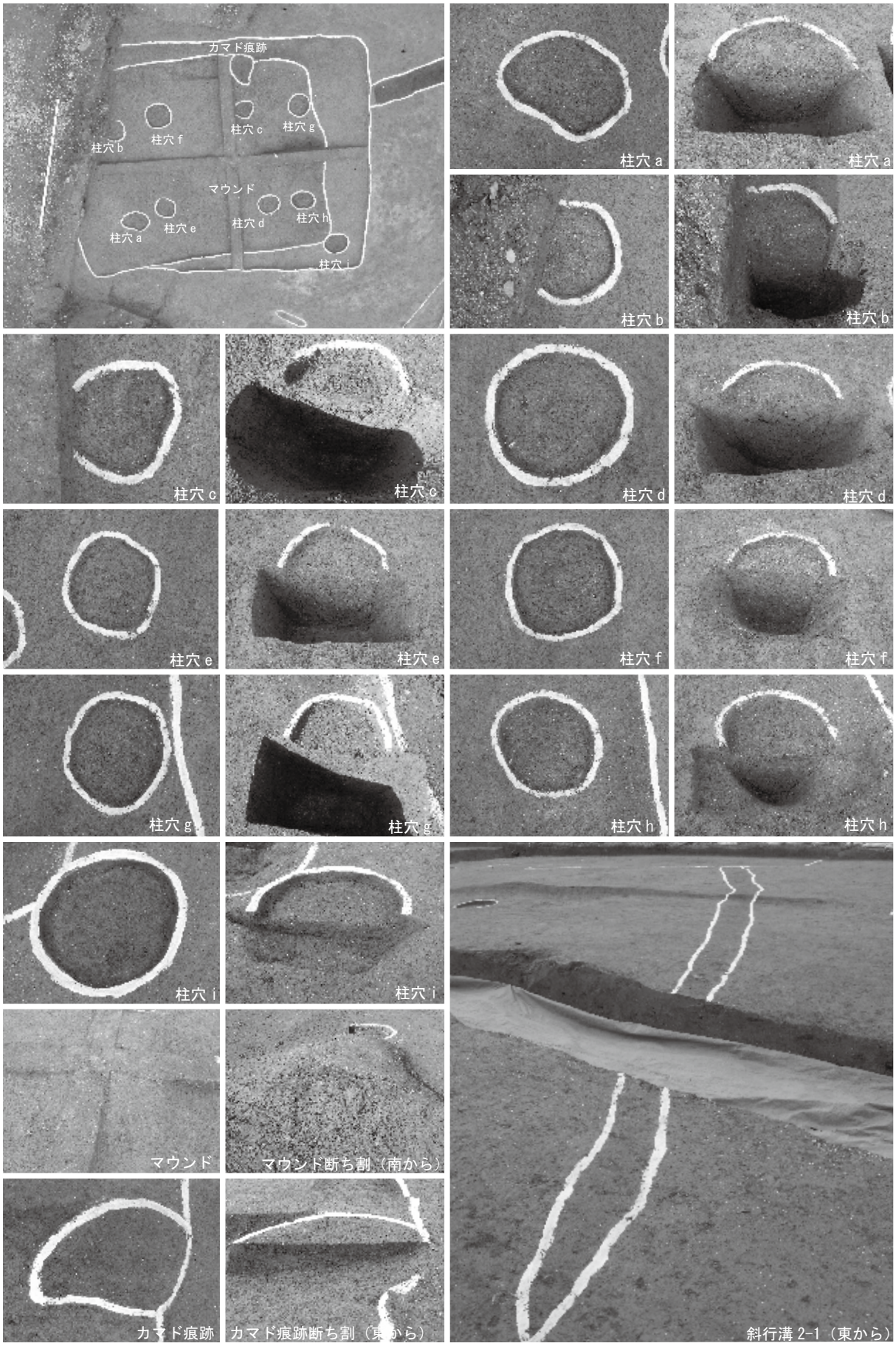


２区竪穴住居 2-1・2-4（北から）



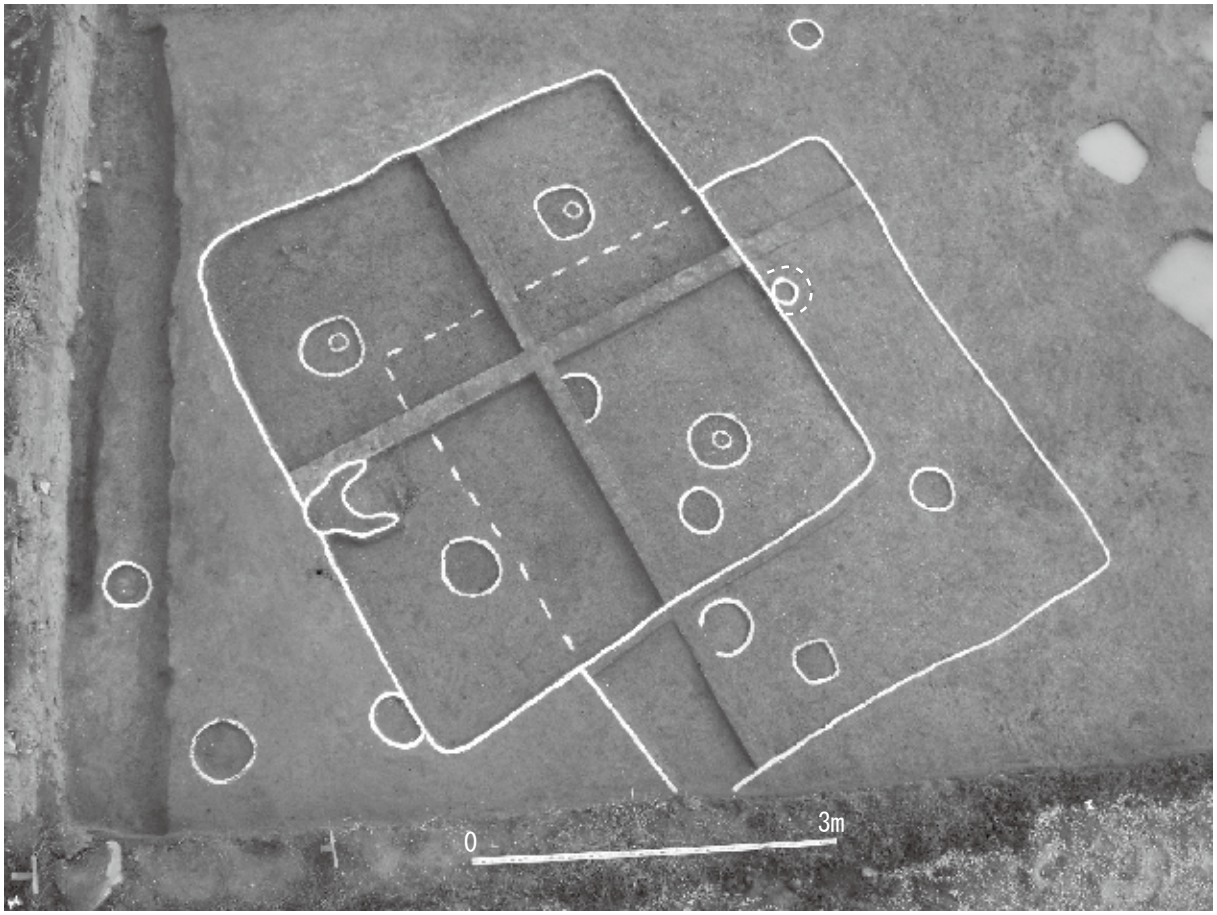
２区竪穴住居 2-1・2-4（南から）

図版13　2区竪穴住居2―1・2―4柱穴など

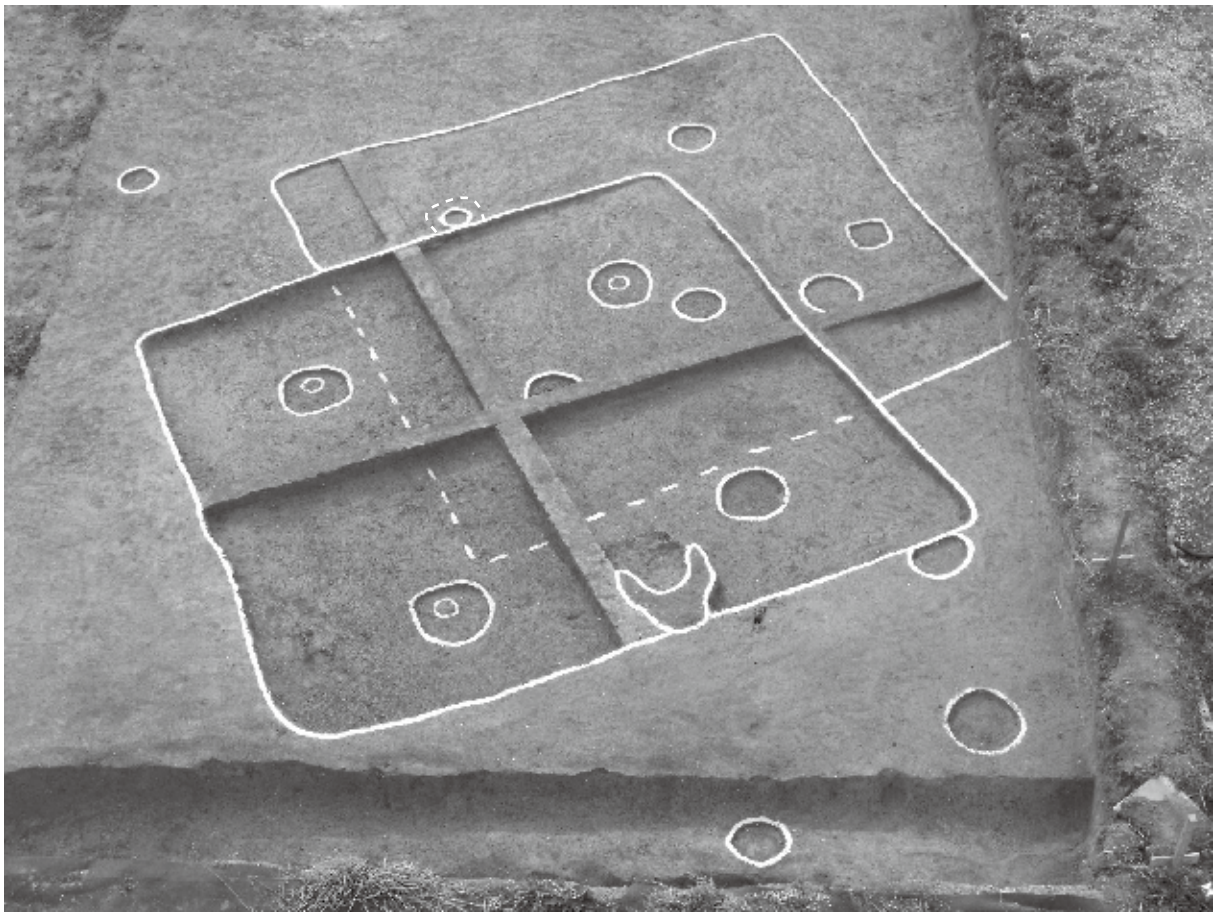


柱穴など検出状況と断ち割状況（すべて南から）

図版14　２区竪穴住居２―２・２―３

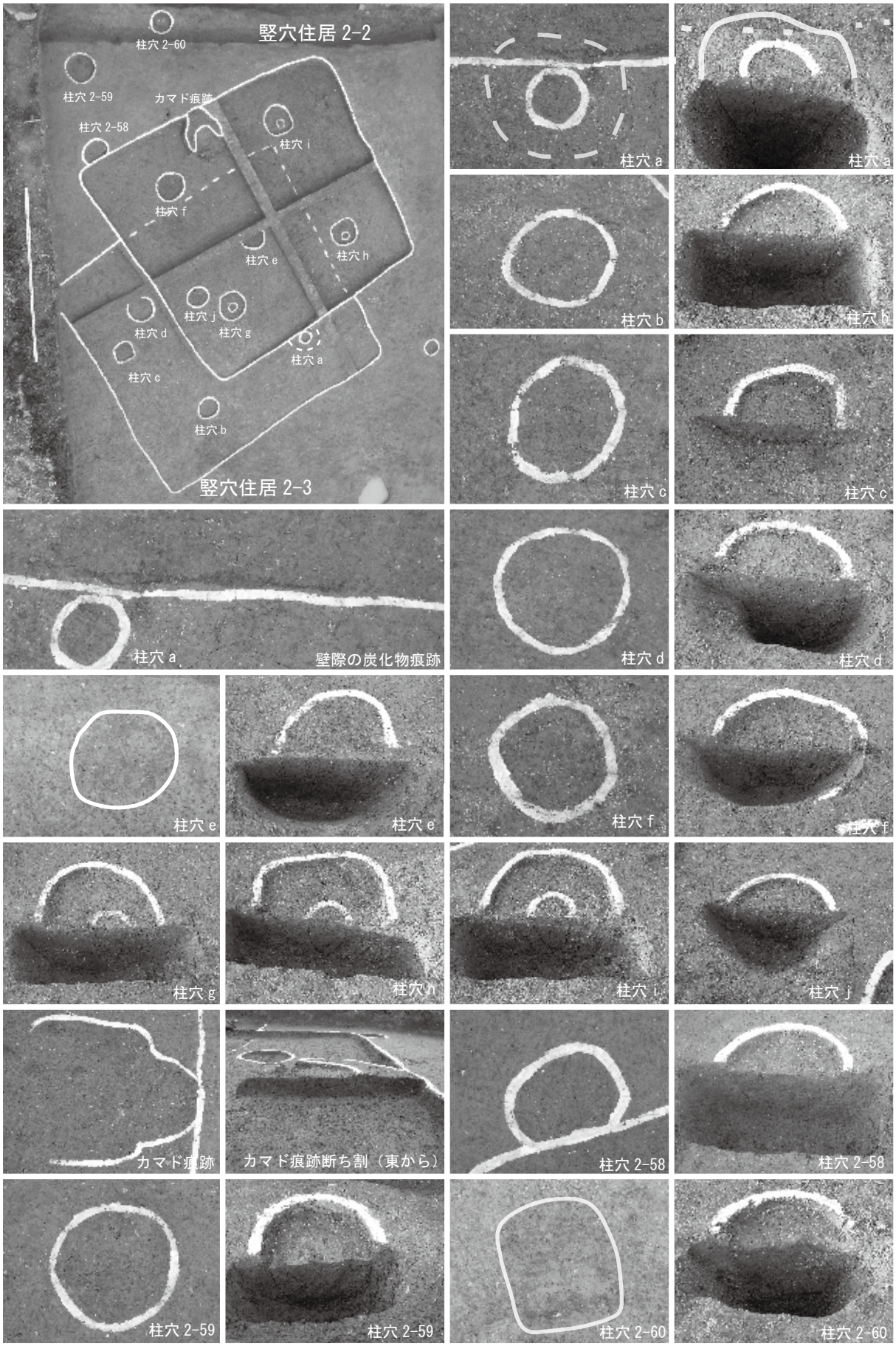


２区竪穴住居 2-2・2-3 完掘状況（西から）



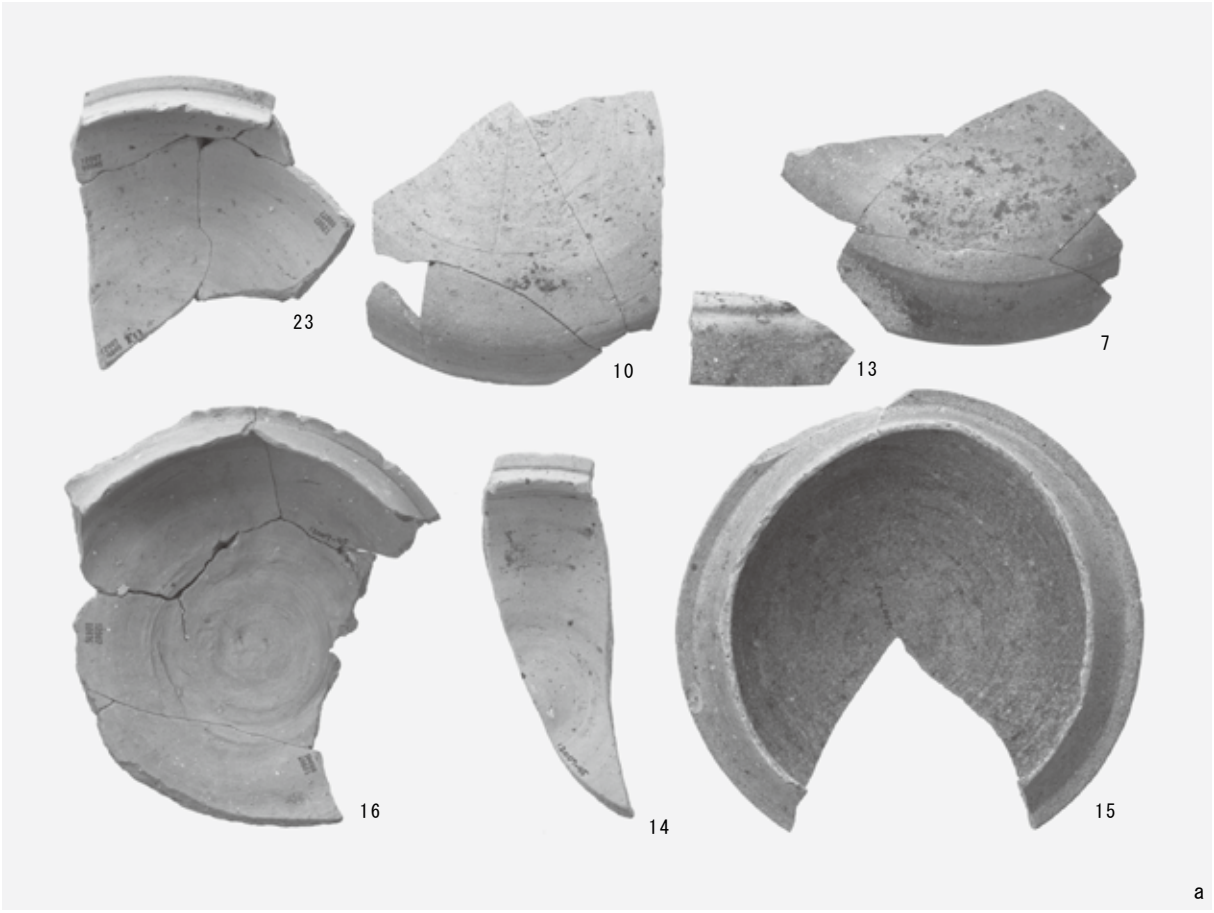
２区竪穴住居 2-2・2-3 完掘状況（北から）

図版15　2区竪穴住居2—2・2—3柱穴など

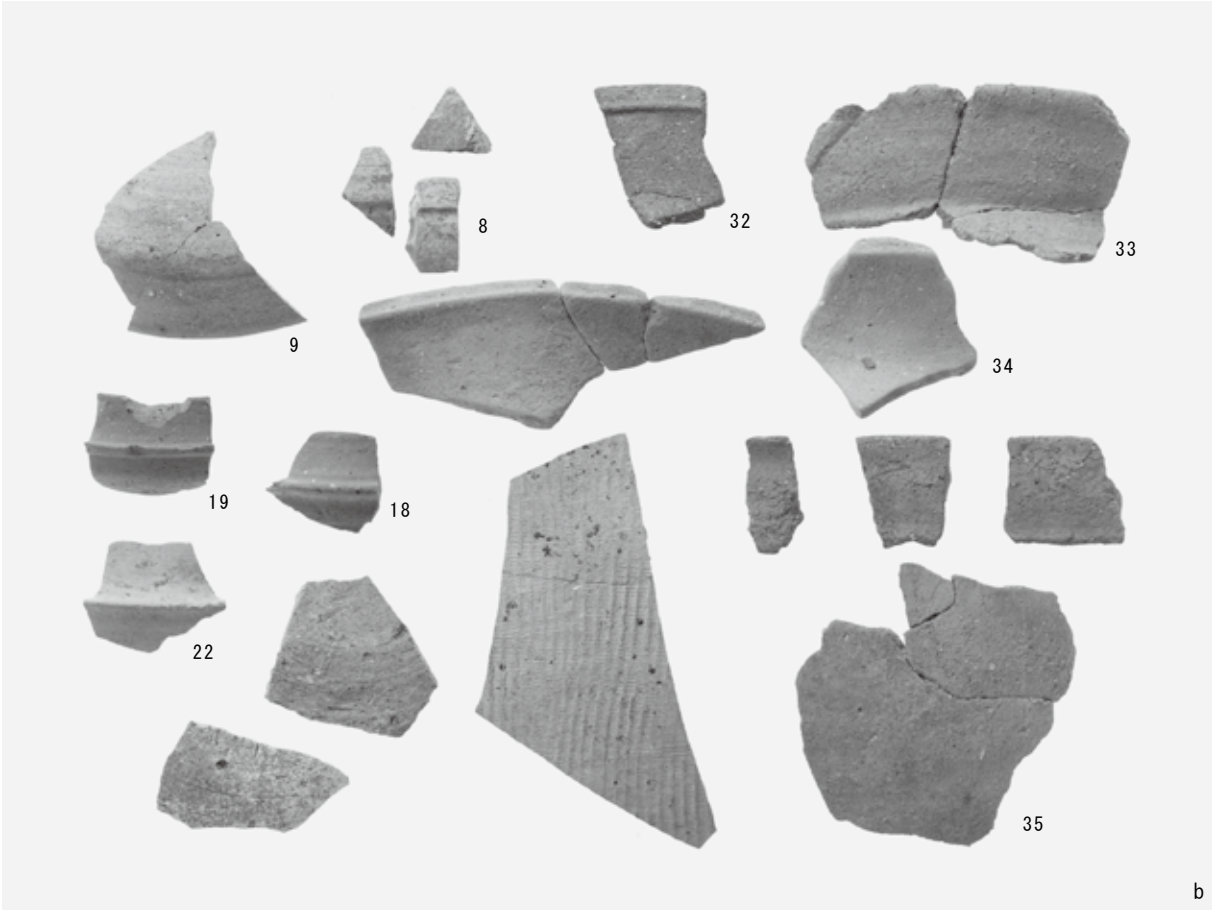


柱穴など検出状況と断ち割状況（すべて南から）

図版16　出土遺物1

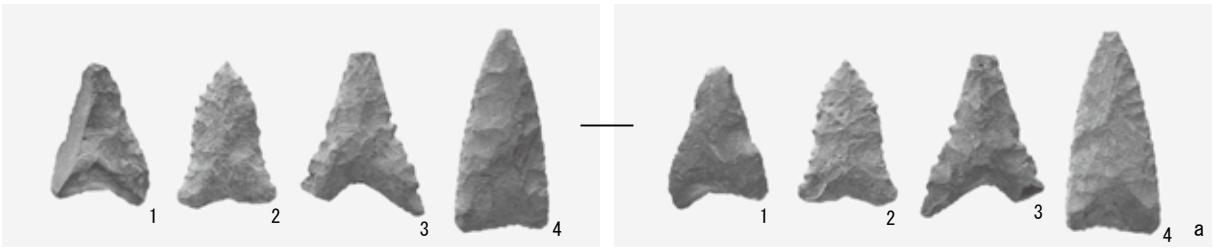


a. ２区竪穴住居2-1出土土器

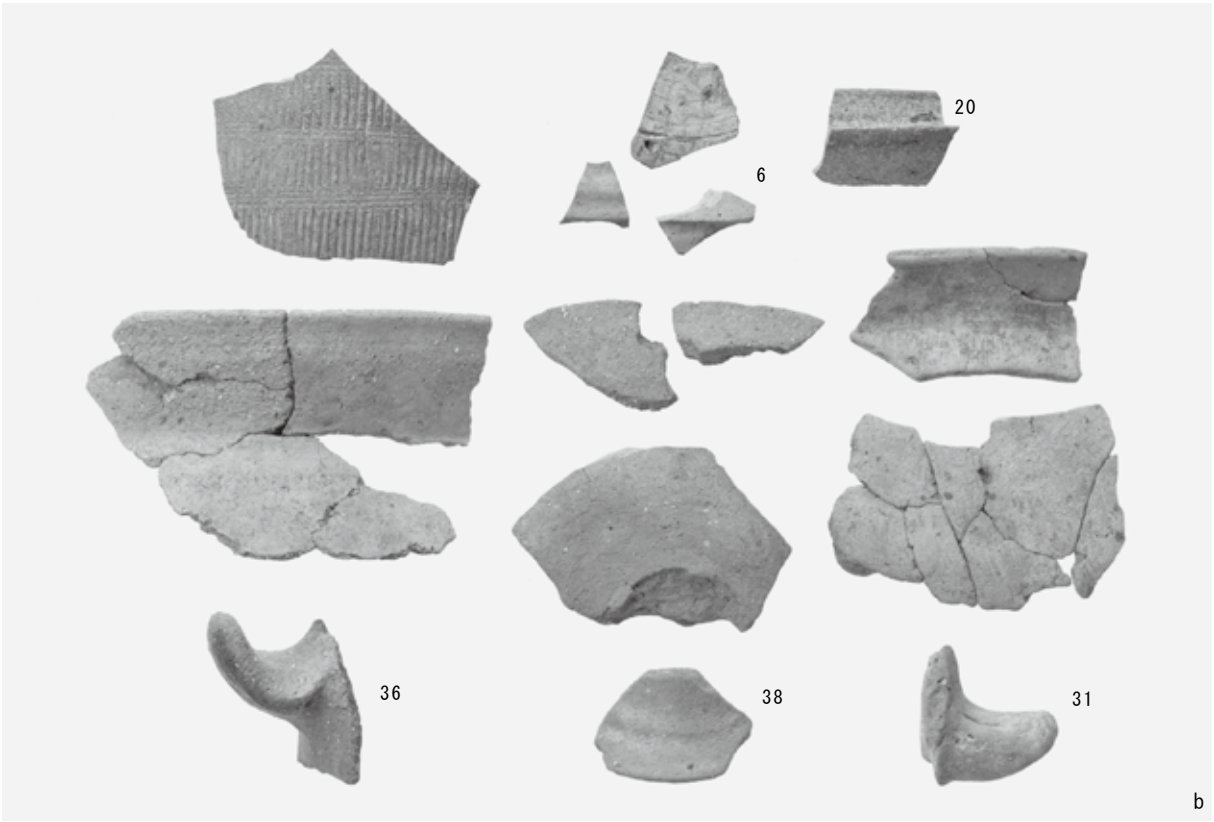


b. ２区竪穴住居2-1出土土器・掘立柱建物柱穴出土土器

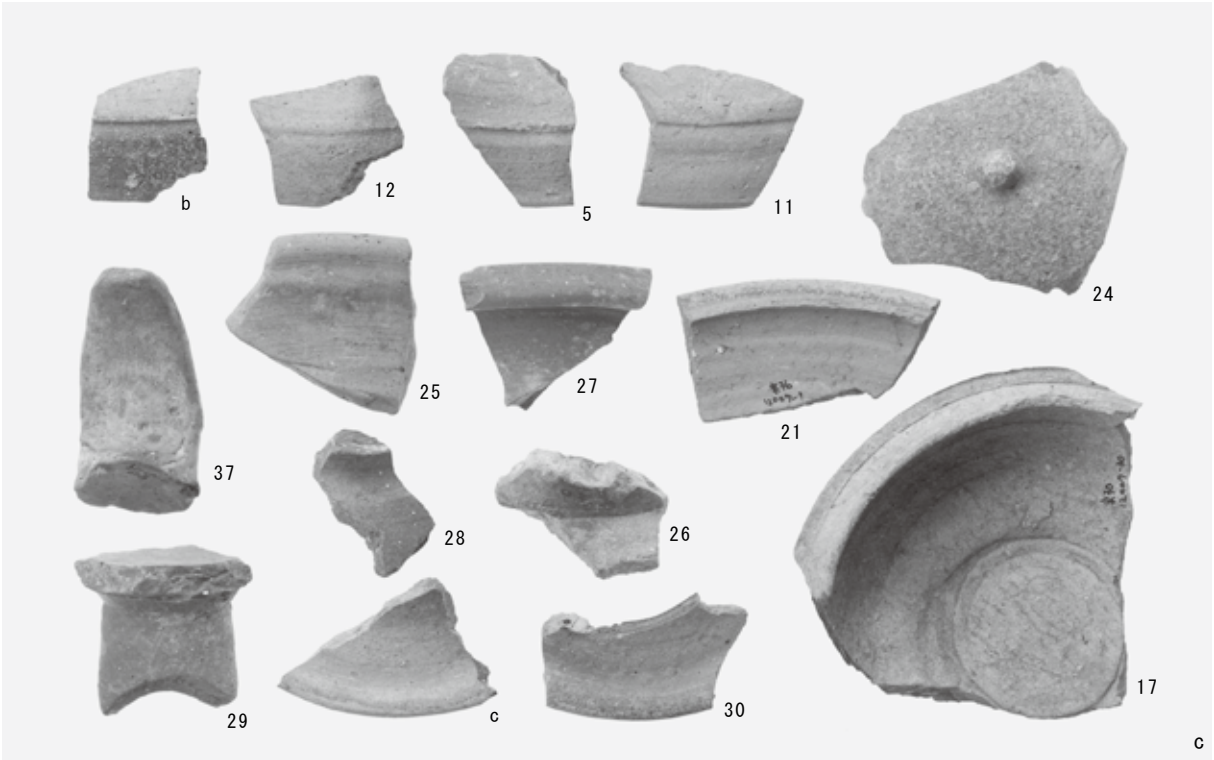
図版17　出土遺物2



a. 打製石器

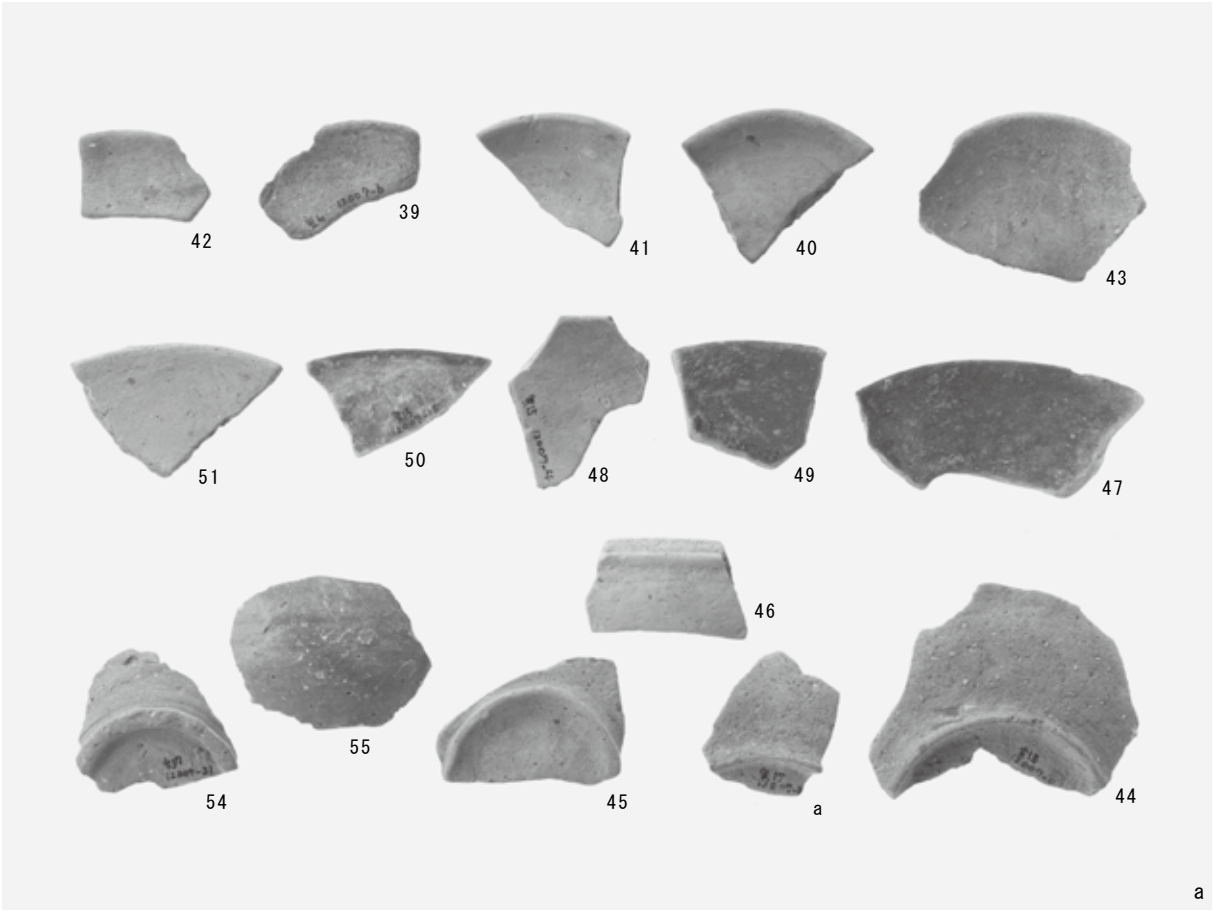


b. 竪穴住居2-2出土土器



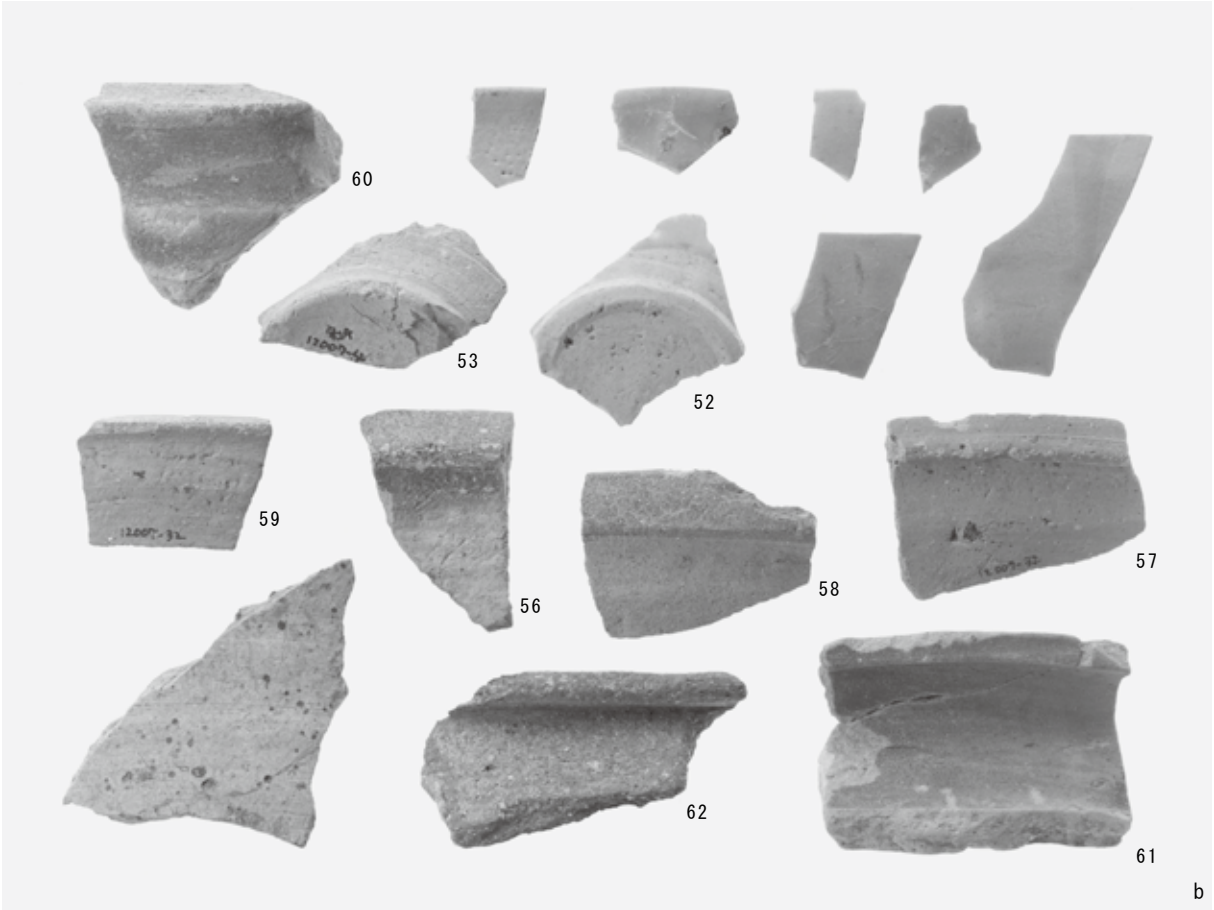
c. 遺物包含層出土、古墳時代後期の土器

図版18　出土遺物3



a

a. 遺物包含層出土土器



b

b. 遺物包含層出土土器・陶磁器